

知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

# 中 甫 洞 穴

1985年3月

鹿児島県大島郡知名町教育委員会

## 序 文

中甫洞穴は、昭和47年頃の採集品によって発見され、昭和57年10月河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望等によって調査されました。

その中に縄文草創期、弥生中期、須恵器など貴重な資料を得、昭和58・59年度の2ヶ年継続事業として調査されました。

調査の結果、爪形文土器、轟式土器、弥生土器、須恵器、石斧、人骨などで、この発見により沖永良部の歴史は一気に縄文草創期まで遡ることとなり奄美最古の遺跡として注目されました。

本町教育委員会では、文化庁、県教育委員会のご協力により、調査報告書の集成を企画し発刊の運びとなりました。

本書が文化財の研究にご活用いただき、文化財の保護、愛護思想の高揚に役立てば幸甚に存じます。

おわりに悪天候にもかかわらず発掘作業にあたられた地元の方々に厚く感謝申しあげます。

昭和60年3月

知名町教育委員会

教育長 平 良 清 義

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和57年10月に行った河口・本田・瀬戸口らの調査の後を受けて、昭和58年9月1日より同14日までおよび、昭和59年8月1日より同20日まで、知名町教育委員会が文化庁及び鹿児島県の補助を受けて、中甫洞穴遺跡の発掘調査を行なった結果の報告である。
2. 本報告の執筆は、河口貞徳・本田道輝が行なった。分担は次の通りである。

I	調査に至る経過	河口貞徳
II	調査の組織	河口貞徳
III	遺跡と環境	河口貞徳
IV	調査の経過	河口貞徳・本田道輝
V	層序	河口貞徳・本田道輝
VI	遺構	河口貞徳
VII	遺物	
	土器	河口貞徳
	石器・他	本田道輝
VIII	総括	河口貞徳

3. 報告書に記載した写真及図は河口貞徳・本田道輝が作製した。
4. 獣骨については松元光春が執筆した。

## 目 次

序		1
例 言		3
I 調査に至る経過		7
II 調査の組織		7
III 遺跡と環境		9
IV 調査の経過		11
V 層 序		19
VI 遺 構		28
VII 遺 物		28
VIII 総 括		64
獸 骨		67

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡地付近地形図	8
第2図	10
第3図	12
第4図	16
第5図 第I トレンチ東壁断面図	19
第6図	22
第7図	25
第8図	26
第9図 第2層出土土器	30
第10図 第2・3層出土土器	31
第11図 上層出土土器	32
第12図 中甫洞穴採集土器	33
第13図 藤I式土器（第4層中部層）	34
第14図	36
第15図	38
第16図	39
第17図 第4層土器の層別分類表	40

第18図	42
第19図 篦削り波状文土器	43
第20図 下層出土の土器	44
第21図 連点波状文土器	46
第22図 下層出土の土器	47
第23図 下層出土の土器	48
第24図 下層出土の土器	49
第25図 中甫遺跡爪形文土器	50
第26図 中甫遺跡採集土器	53
第27図	54
第28図	55
第29図	56
第30図	58
第31図	59

#### 図 版 目 次

図版 1	67
図版 2	68
図版 3	69
図版 4	70
図版 5	71
図版 6	72
図版 7	73
図版 8	74
図版 9	75
図版10	76
図版11	77
図版12	78
図版13	79
図版14	80
図版15	81
図版16	82
図版17	83
図版18	84

図版19	85
図版20	86
図版21	87
図版22	88
図版23 品・牙製品・石器（第二・三次調査）	89
図版24 石器（第二・三次調査）	90
図版25 石器（第三次調査）	91
 図版 I	99
図版 II	100

表 目 次

第一表 動物別及び区画別出土骨量( g )	97
第二表 骨格別および動物別出土骨片数	98

## I 調査に至る経過

昭和57年8月に、沖永良部島和泊町の先史時代遺跡の分布調査と、資料蒐集のために河口が町内を巡回した際、中甫洞穴遺跡の所在を知らされ、爪形文土器などを出土する極めて重要な遺跡であることを知った。河口・本田・瀬戸口は相踏って、さっそく同年10月5日より15日まで中甫洞穴遺跡の発掘調査を行なった。從来南島における発掘調査は海岸の砂丘遺跡にかぎられた観があり、調査結果については層序的な資料としては若干の不安を抱かざるを得ないところがあり、また石灰岩（隆起珊瑚礁）の風化土壌である赤色土層は無遺物層として処理される風があった。中甫洞穴遺跡は、南島としては初めての内陸部の調査であり、地層も表土以下は直ちに粘質の赤土層で、從来は無遺物層として放棄されていた地層との取り組みであった。結果としては良好な層序で、縄文の早前期に該当する南島式土器の新型式数種類と本土から移入された縄文前期の轟I式土器（最古の轟式）などを出土するという好結果を得た。しかし一面では、地層中に落盤による無数の巨石が堆積しており、発掘に大きな障害のあることも判明した。

昭和57年の調査は遺跡の一部を調査したもので、遺跡の規模については明らかにできず、内容の把握にも、より多くの資料を得る必要があった。同遺跡の所在する知名町教育委員会は、中甫洞穴遺跡調査が町にとっても必要な事業であることを認識し、国および県の補助を得て、昭和58年9月1日より同14日まで、前の調査を受けて、中甫洞穴遺跡の発掘調査を行なった。昭和57年の第一次調査は、洞穴入口西壁下の調査を主としたが、昭和58年の第二次調査では、洞穴入口東壁下・同入口中央部・洞穴西側流れ込み堆積部の調査を行ない、第一次調査と同類の資料を得たが、東壁下では縄文期該当の土壙墓が検出され横臥屈葬の人骨一体が出土した。<sup>(1)</sup>この調査では、地層中に堆積した巨石を除去するために、機械を使用したが、岩石の破碎は地層の攪乱を伴ない、必ずしも良好な方法ではないことがわかった。

昭和58年の第二次調査においては、洞穴入口付近の調査に終始し、洞穴内部および周辺部と、南側に隣接する洞穴の調査が残されることになった。知名町教育委員会は、国・県の補助を受けて、中甫洞穴遺跡の継続調査を行うこととし、昭和59年8月1日より同20日まで第三次の中甫洞穴遺跡の発掘調査を実施した。

## II 調査の組織

調査主体者	知名町教育委員会
調査責任者	教育長 平良清義
事務担当	社会教育課長 神川一郎
	社会教育課主事 大山 優
調査担当	総括 河口貞徳（鹿児島県考古学会会長）



第1図 遺跡地付近地形図 ○—中甫洞穴

調査員 本田道輝 (鹿児島大学助手)

調査作業員

中村マツエ, 本江マツ, 平 汎子, 平みさ子, 粟田ツル子,

中馬礼子, 富江和代, 前島ハル, 神川克仁, 勝間安起, 福永勇二,

西 常元, 久本晋仁, 大山幹男

### III 遺跡と環境

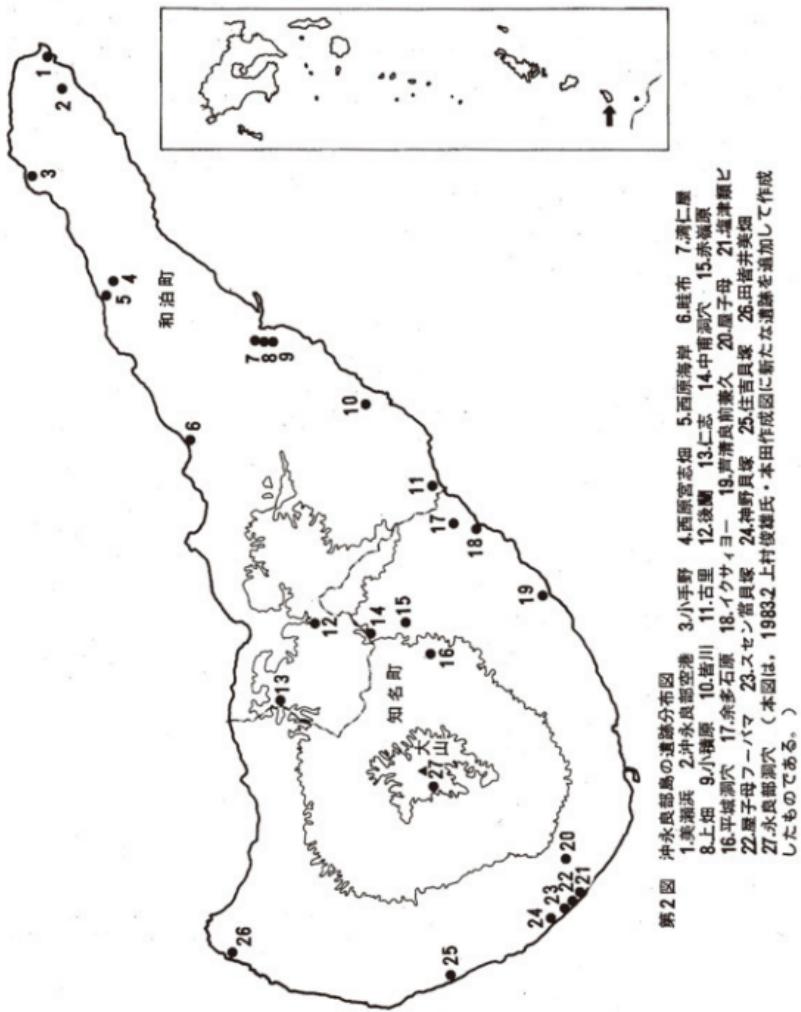
沖永良部島は奄美諸島の南部にあって徳之島と与論島の中間に位置し、鹿児島県本土から南々西 536kmを隔てている。周囲 49.3 km, 面積 49.51 km<sup>2</sup>, 西側の知名町と東側の和泊町に区分されている。海岸線は南部は外彎し、北部では内彎しており、西部は土地が広く、南北の距離 9 kmあり、東部へ細長く延びて、東西の距離は約20kmである。海岸には褶皺がよく発達し、とくに南海岸に著しく、北海岸は季節風による海蝕が進み急崖が連なっている。砂浜の発達も北岸より南岸が著しく大規模な砂浜海岸が見られる。

島は古生層を基盤として、数段の隆起珊瑚礁からなり、西部の中央に位置する大山は標高 245 mで、最高地点をなし、山頂部と町境界の和泊町側地域とには粘板岩層の分布が見られ、これに接して古期花崗岩の貫通が見られる。これより東方へは脊梁を形成して茎永層が延び、これに接して輝綠岩の分布が見られる。

地形は低平で大山を中心に、これを囲むような形でカルスト地形が発達し、ドリーネが数多く分布している。高位段丘から中位段丘への (130m~100m) 急斜面下には、各所に湧水が発達し、水連洞、イジンギヨ、ユガギヨ、ニヤートウゴーなどの例が見られ、中甫洞穴もその一つである。また中位段丘から低位段丘への標高60mから40m付近に形成された急斜面下の湧水は、集落立地の条件を与え、古来この湧水地に集落が成立した。

この地域は亜熱帯モンスーン気候区に属し、気温の年較差は約4℃程度で小さく、顕著な海洋性気候を呈し、低緯度で年平均気温が高く、夏季は湿度が高い。降水量は、奄美にあっては南下する程少く、本島では年に1900mm程度であるが、わが国としては多雨の部類に属する。灌漑に適する河川がなく、以前に水稻の2期作が行われた時代は、7月10月の雨量変動期の影響が大きかったために、灌漑用貯水池が各所に設けられていた。和泊町の耳付池はその名残りである。中甫遺跡の他和泊町の鞋布ナーバンタ遺跡、西原海岸遺跡などで弥生土器が発見されているが、本島の自然条件のもとで、弥生時代における水稻耕作の可能性については、問題の残るところである。

中甫洞穴は知名町東北部の久志検水窪にあり、和泊町との境界に接している。大山山頂より東々北 3.56 km、北部海岸線より 2.2 km の内陸部にあり、東経128°36'42"・北緯27°22'に位置している。標高は 100 m あり、大山を囲んで分布するドリーネのうちの一つで、径70m程の窪地となっている。付近には大小のドリーネが群をなして分布し、ほとんど耕地として利用されているが、遺跡地は森



林に覆われ、地下には水脈がある、北より南方向に流れ、鍾乳洞を形成している。窪地内には所々に珊瑚礁が露呈し、南東側と北西側の二ヶ所に、地下の鍾乳洞へ通ずる洞穴が開口している。

南東側の洞穴は小規模で、入口は草木に遮られて見落す程であるが、北西側の洞穴は規模が大きく、いわゆる「中甫洞穴」と呼ばれるもので、南東方向にむかって大きく開口し、入口幅14m、奥行20m、天井の高さ5mである（第3図、図版1上）。入口上面は切り立った石灰岩壁が露呈し、上面は森林で覆われ、洞穴の天井からは大小の鍾乳石が無数に垂下し、床面には巨大な石灰岩がよこたわって、上面には生長の悪い石垣がわずかに見られる。

洞穴の西よりには、洞穴の床面となっている岩盤の下に、大きな空隙があり、下方へ傾斜して地下の鍾乳洞へ通ずる斜坑を形成している。この坑道によって地下の水脈に達することができるので、遺跡が成立した一条件となつたものであろう。

沖永部島の先史遺跡調査には、昭和29年、河口貞徳による和泊町駐布わんじようナーバンタ遺跡の調査、昭和32年、九学会考古班による知名町住吉貝塚の調査、昭和57・58年、鹿児島大学・沖縄国際大学による知名町スセン當貝塚・神野貝塚の調査および、前述の中甫洞穴遺跡の調査がある。これらの調査を通じてわかる事は、一般に遺跡の規模が小さく、人工遺物・自然遺物の出土量が少ないとことである。島が小さく環境条件も恵まれていたとは思われないから、食料も豊富ではなかつたであろう。食料残滓に動物の種類が少ないとことは現状に照してもわかるが、四面に海を環らし乍ら貝塚らしい貝塚もなく、たまたま発見された住吉貝塚でも、貝の堆積が薄く、貝塚を形成する主要な貝が陸産のまいまであることも理解しにくいところである。

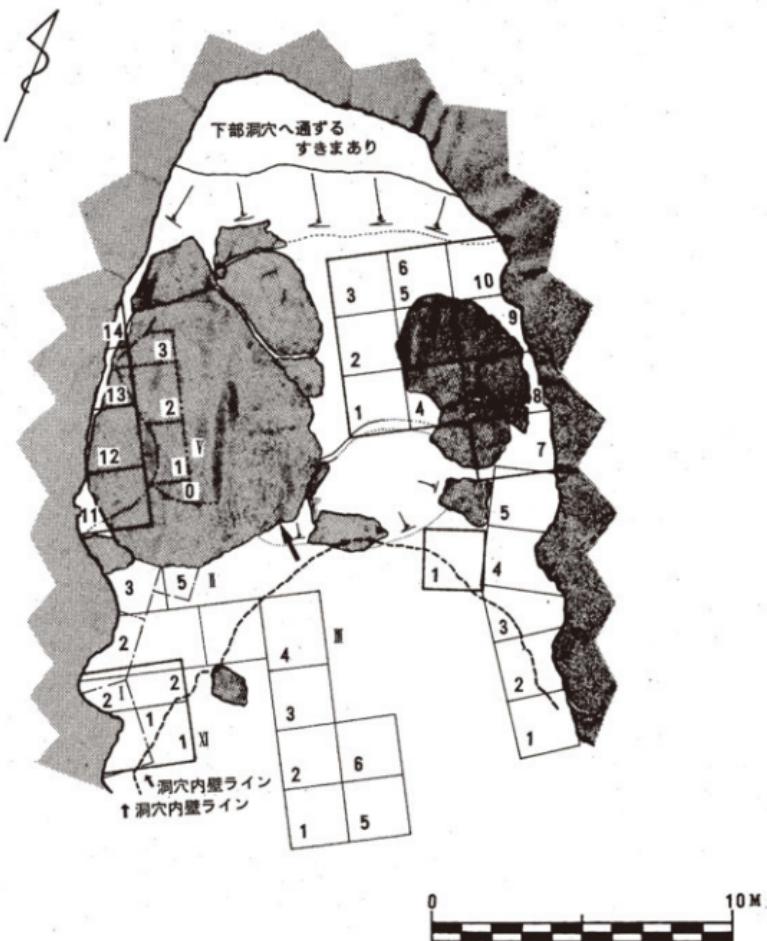
前述のように遺跡の規模は小さいが、発見された資料には、從来奄美諸島では未発見のものが相当あり、南島先史時代研究の空白部分について、一步前進のための材料を与えるものとなろう。

## IV 調査の経過

### 1) 第一次の調査経過

第一次の調査は、中甫洞穴入口の西側絶壁に沿って、幅2mのトレンチを、岩壁に平行して設け、南より1区（長さ3m）、2区（長さ2m）、3区（長さ2m）、4区（長さ60cm）に区分し、更にトレンチ北端より直角に、東方向に向かって1辺1mの方形トレンチを追加設定して5区とした。この他、洞穴の西側床面巨岩下にできている、地下水脈に達する空洞の、入口西側（向って左側）に堆積した土層の一部（入口に接する部分約1m<sup>2</sup>）を試掘した。この空洞内の堆積は、後に西壁下トレンチ（第1トレンチと命名）の第4層以下の土が流れ込んで堆積したものであることが判明した。

洞穴は奥へ狭くなり、最後は両側へ連なる壁面でかぎられる。洞穴の周辺をなす壁面下は、侵蝕により溝状となり、特に奥壁下は深く一部は地下水面上に通じている。洞穴床面は、奥より入口へ傾



←は下部洞穴への入口、ローマ数字はトレンチ名

第3図 中甫洞穴図

斜する平坦面を狭んで、西側は一塊の巨岩が盛り上がり、東側は数個の巨岩が累積している。洞穴入口付近には東西に走る亀裂があり、西側空洞方向へ傾斜した溝となり、外部との境界の観がある。

洞穴西側の空洞は、地下鍾乳洞の開口部である、周辺の雨水はこの一点に集中する。これによって侵蝕が進み、洞穴の入口付近を底とした、壠鉢を半分に切って洞穴入口にくっつけたような地形が形成されている。平常は地下へ流れ込む雨水も、大雨時には逆流して地表に噴出することがあり、第三次調査中の台風時に、そのような状態に遭遇し、その異様さに一驚を喫した。

第Ⅰトレンチは壠鉢状地形の縁部に当たり、高位にある。1区では表土は岩盤となっていたが、2区以下は極めて粘着力が強く硬くしまった土が堆積し、その中に大小の石灰岩が混ざり、その間に遺物が良い層序を示して埋存している。発掘は地表下2.2m程度で無遺物層に達し、五つの地層に区分された。第1層から第4層までの各層から、土器・石器・獸骨・貝類などが出土し、特に第2層からは人骨が発見された。各土層には例外なく石灰岩屑が多くふくんでいたが、第5層だけは石灰岩屑を殆んど含まず、まだ遺物も包含していない。第2・3層からは兼久式に近い凸帯をめぐらす壺形土器などの新しいタイプが見られ、第4層からは繩文前期の轟I式（轟式のうち最も古い型式）の他、地元の土器と見られるもので、連点文・波状文・鋸削り文・羽状連点文などを施した土器数種類が出土し、第4層の最下部からは爪形文土器が出土した。

## 2) 第二次の調査経過

第一次調査の結果を参考に、第二次調査では遺跡の広がりとその性格をより把握するため計4本のトレンチを設定して調査を実施した。トレンチの名称は、第一次調査のトレンチを第Ⅰトレンチとし、今回設定のトレンチ名をそれに続けて第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴトレンチと呼ぶことにする。以下トレンチ毎に述べよう。（第3図）

第Ⅱトレンチは、壠鉢状地形の西縁部から下底部への傾斜地に、一部を第Ⅰトレンチ2・3区に重ねる形で2m×4mで設定し、西より東へ1・2区と区分した。調査の進展に伴って1区を洞穴西壁まで延長する一方、1区北隣りに3区を設定して第Ⅰトレンチ3・4区を覆う形で前回調査の下層部を再調査した。地層の状況は、第Ⅰトレンチと変わらないが、2区では第2・3層が欠落して第1層の下は直ちに第4層となる。第4層下部からは巨大な石灰岩群が現われ始めてやがてトレンチ床面全面に広がり、大型削岩機の導入も効果なく以下の調査を断念せざるを得なくなり、結局1区側で地表下2m、2区側で50cm位までしか掘り下げるることはできなかった。

遺物は第2～4層で検出されたが、前年度出土した轟式の取り残し分がやまとまる程度で、他は少量の土器片・石器・貝類・骨片等である。4層下部からは、爪形文細片1点の出土をみた。

第Ⅲトレンチは、第Ⅱトレンチと直交させて壠鉢状地形の南縁部から下底部の傾斜地に2m×8.425mで設定し、南より2m×2mを1区画として1～4区に区分した。したがって、4区は2m×2.425mとなる。さらに、調査の進展に伴って1・2区を東側へ2m拡張して5・6区を設け、あわせて調査を実施した。第Ⅱトレンチに近接する3・4区は、石灰岩群の露出によって早々と調

査を断念し、1・2・5・6区を地表下約2mまで掘り下げている。地層は掘り下げ面まで10層を数え、他のトレンチ各層とも石灰岩屑は含まないものの、乾燥化して極めて固くその掘り下げはかなり困難である。

遺物は、第1・4・8層から検出されたが、第1・4層はそれぞれ陶器・青磁小片1点の出土であり、その性格等明らかにできない。第8層からは、少量の土器片とともに木炭の散布箇所が認められた。土器は、やや厚手の平底底部で木ノ葉様の圧痕を底面に有するもの以外特徴あるものは出土していないが、器面に金雲母が混じる破片が散見される。胎土、焼成、底部形態等から判断して第Iトレンチ1～3層出土土器との関連が考えられる。

第IVトレンチは、洞穴入口の東壁にその走向に沿って2m×10mで設定し、2m×2mを1区画として南より1～5区に区分した。トレンチ付近は洞穴側へ急傾斜で下る地形をなし、一方擂鉢状地形の東縁部を形成している。堆積土は大きく6層に区分できるが、第I・IIトレンチと同様粘着力が強く、第6層を除く各層には石灰岩屑が多く含まれている。1～3区は、地表下1～1.5m程度で石灰岩群が全面に露出し掘り下げが不可能になったが、4区では可能な限り岩の裂け目を掘り下げ、地表下2.5m程度で第6層面を検出することができた。一方、5区の大部分は石灰岩や石灰岩屑だけの特殊な層で形成され、表層以外土の堆積がみられなかったが、この部分も人力で岩石を除去しながら1.5m程掘り下げた。

遺物は、第1b・3b・4層に少量の土器片・石器・貝類・獸骨片等が出土したにすぎない。このうち、第1b・3b層の土器はその胎土、焼成、色調等の特徴から、第Iトレンチ1～3層や第IIIトレンチ8層との関連が考えられ、4層の土器は器面の特徴（付着した粘土粒をなでつけてツブツブした器面となる）から第Iトレンチ4層該当土器と判断した。復元可能な小形で長頭部をもつ丸底土器が石斧2本を内蔵した状況で出土している。なお、4区で隅丸の三角形状をした土壤から、周囲に配石をもつ横臥屈葬された壮年の女性骨が検出された。土層や遺物との関連からは時代を明らかにできないが、その埋葬形態から縄文期の人骨である可能性が強い。5区の石灰岩・石灰岩屑層でも人骨が散乱状態で検出されているが、こちらは時期を判断する資料がない。

第Vトレンチは、洞穴の床面を形成している巨岩下の西側空洞（以下、下部洞穴と略称する）に、その西壁に沿って長さ5m最大幅2mで設定し、南より1区（長さ2m）、2区（長さ1m）、3区（長さ1m）とした。その後、調査の進展に伴って1区南隣りに0区（長さ92cm）を設け、あわせて調査をおこなった。本地点は、第一次調査の際遺物が出土することを発見し、その一部を試掘した箇所に一致する。西壁に沿って厚く堆積した土は、西から東へ緩傾斜をなしてトレンチ東側杭列付近ではほぼ垂直に落ち、一方南から北へ向かってもゆるやかな傾斜面が形成される現況をなし、さながら洞穴入口西壁側の土砂がある時期浸蝕によって流入したような形状をなしている。堆積土は、薄い第1層を除けば同一層と判断され、20cm毎に採集した土壤サンプルでも変化は認められなかった。粘着力の強いことは他トレンチ堆積土と同様であるが、石灰岩や石灰岩屑の混じる量は少ない。

遺物は、多量の土器片、獸骨片と少量の石器、貝類からなり、土器にはやまとまるものも見ら

れる。これらの遺物は、0・1区東側の堆積土表面から1～1.5m程のところに集中し、堆積土の現況と同様に、西から東へ、また南から北へ傾斜する傾向にある。土器は、2点の小破片を除いてすべて第Iトレンチ4層該当土器に一致し、第Iトレンチから出土した轟式と同一個体と思われる2点の土器片の他、地元の土器とみられる連点文・連点条痕文・連点条痕波状文・波状文などを施した土器片からなる。第Vトレンチの堆積土は、その現況、土層の状況、遺物の出土状況等より判断して、第Iトレンチ周辺土が流れ込んだ再堆積土と考えられる。

なお、調査中に洞穴床面を形成する巨岩上部の一部分に、遺物を含む土が薄く堆積するのを発見した。その上部は20cm程の厚さで固着した膜状の石灰分に覆われている。この地点は第三次調査で調査の対象となった。

### 3) 第三次の調査経過

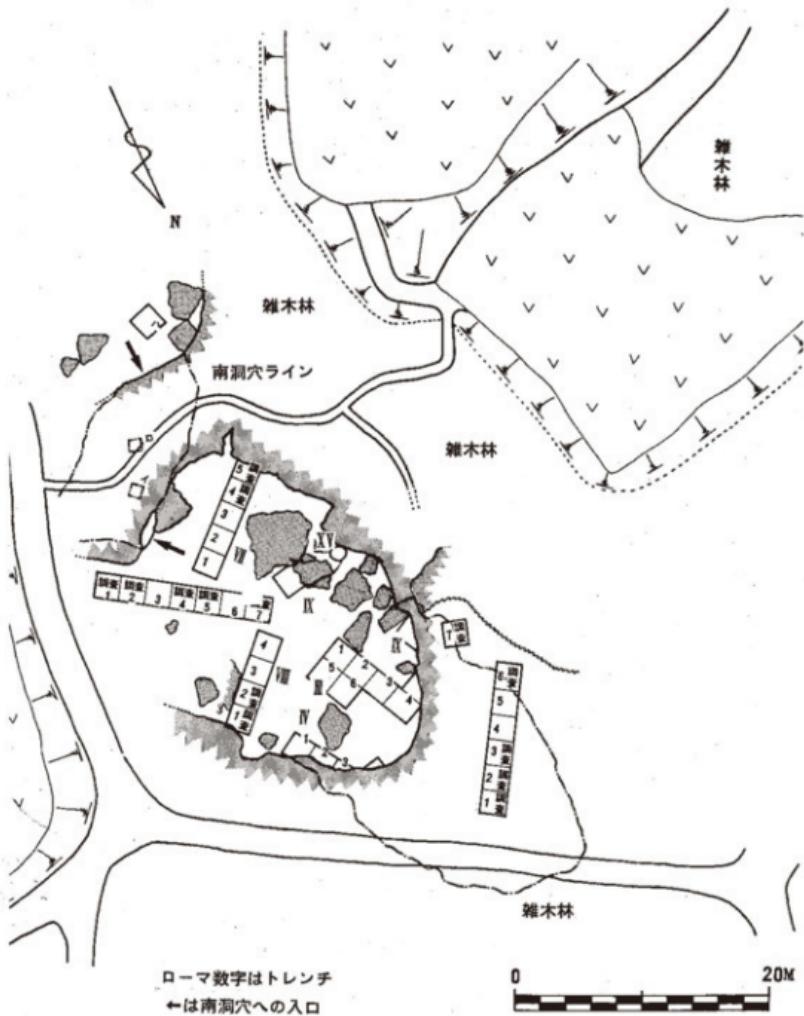
第三次調査では、中甫洞穴内部及び周辺部と南側に隣接する洞穴（以下、南洞穴と呼ぶ）を調査の対象とし、計10カ所にトレンチを設定した。トレンチ名は、前年度のトレンチ名に続き第VI～第XVトレンチとなる。（第3図・第4図）。前回までの調査と同様、各トレンチには極めて粘着力の強い、あるいはそれらが乾燥して極めて固くなった土が大小の石灰岩を含みながら堆積し、掘り下げはなかなか困難であった。おまけに、調査の後半には台風10号が襲来し、第VIトレンチの大部分が水没するというアクシデントにも見舞われたが、何とか当初の計画通り調査を終了することができたのである。ところで、中甫洞穴の調査では、次々に出現する石灰岩の除去方法が問題であり、今回も小型の削岩機や鎌等を利用して石灰岩に立ち向かったが、第XIトレンチでのチェーンブロックの使用が最も効率よい方法であることを確認したので付記しておく。

次にトレンチ毎の調査経過を述べよう。

第VIトレンチは、農道から中甫洞穴へむかう空地に2m×14mで設定し、2m四方を一区画として東側から西側へ1～7区とした。この付近は、中甫洞穴側へゆるやかに傾斜する地形となっている。調査は、3区を除く6区画で実施したが、時間の都合で1・2区は第3層上面まで（地表下60cm）、6・7区は第2層上面まで（地表下10cm）掘り下げたにすぎない。最も深掘りした4・5区も、地表下1.5m程で東壁側から迫り出した石灰岩のため以下の掘り下げが不可能となり調査を中止した。遺物は各層とも全く出土しない。

第VIIトレンチは、中甫洞穴前面の凹地を形成する石灰岩壁のうち、東南部側の壁に直交する形で2m×10mで設定し、2m四方を一区画として北側より南側へ1～5区とした。この付近は、周囲に巨大な石灰岩が露出する狭小な平坦地であり、南洞穴の北側入口に近い。調査は4・5区の二区画で実施し、地表下1m前後まで掘り下げたが遺物は全く出土せず、床面全面に石灰岩群が現われたため調査を中止した。

第VIIIトレンチは、前述凹地の北西側壁に直交する形で2m×8mで設定し、2m四方を一区画として北側より南側へ1～4区とした。この付近は、凹地中央部へむけてゆるやかに傾斜する地形を



第4図 遺跡周辺地形図

なし、石灰岩が数多く露出している。調査は1・2区の二区画で実施し、地表下1m前後まで掘り下げたが遺物は全く出土せず、床面全面に石灰岩群が現われたため調査を中止した。

第Ⅹトレンチは、中甫洞穴と南洞穴の中間に位置する小洞穴とその前庭部2m四方に設定し、あわせて一区画とした。前庭部は、30cm程掘り下げれば全面石灰岩となり遺物の出土は見られない。一方、小洞穴内部は天井部まで土が充満して堆積し、入口付近にわずかな空間部があるにすぎず、南側には深い隙間があって急傾斜をなして土が下部の洞穴へと流れ込んだ状況を示していた。このため、縦はぎ法によって天井部から1m前後掘り下げながら小洞穴奥（西側）へと前進し、結局入口より4m程奥まで掘り進み第XVトレンチ堆積土と繋がることが判明した。

遺物は、第1層から小動物の骨（ネズミ類か）とカニの鉗脚が入口付近に散見され、小洞穴奥側の第2層から土器片・石器・獸骨等が検出されている。土器片の数量はやや多く、数点の有文土器も認められるが、1cm前後の小破片ばかりでまとまりなく、器壁が荒れたものが目立ち再堆積の可能性も考えられる。

第Xトレンチは、南洞穴内部および南洞穴南側入口付近の3ヵ所に設けた試掘坑の総称である。南洞穴は、北側と南側に開口して入口となり、共に洞穴中央部へ急傾斜をなして土が堆積している。洞穴内部は比較的広く、天井部には無数の鐘乳石が垂下し、床面には石匂がみられる。洞穴は東側、西側へと延びており、石灰岩が累積して前進を拒んでいるが、水の流れる音が聞きとれるところから中甫洞穴下部洞穴へと繋がるものと思われる。試掘坑は、洞穴内部の北側入口からの急斜面部と中央部に1m×1mで設定してイ・ロ区とし、洞穴外部の南側入口付近に2m×2mのハ区を設けて調査を行なった。イ区は1m程掘り下げたところで石灰岩群が出現して調査を中止し、ハ区も1m程の掘り下げで調査を中止した。共に遺物の出土は見られない。一方、ロ区は削岩機を使用して石灰岩を除去しながら50cm程掘り下げ、少量の遺物が検出された。

遺物は、第1層より獸骨片が、第2・3層より数点の土器小片が出土し有文土器も認められるが特徴がつかめない。

第XIトレンチは、第一次調査で未調査となっていた1区とその東側地域に、中甫洞穴入口の西側壁に沿って長さ3.5mで設定し、南より北へ1区（長さ2m）、2区（長さ1.5m）とした。トレンチ幅は3m前後となり、第一次調査の1区全域を覆い第二次調査の1区の一部を含むこととなる。前述のように、このトレンチではチェーンブロックを使用して累積する石灰岩を除去しながら地表下3m程掘り下げ、チェーンブロックが石灰岩の除去にかなり効果があることが判明した。地層は5層に区分され、各層とも遺物を包含し、特にこれまで無遺物層としていた第5層（灰褐色土層）にも少量の無文土器片が含まれることが確認された。

遺物は、土器片と少量の石器・獸骨・貝類からなり、数点の人骨片も第1・2層から出土している。土器片は第3・4層にやや多いが特徴あるものは数少なく、数点の連点文・連点条痕文が知られるだけで、ついに爪形文土器の姿を見ることはできなかった。

第XIIトレンチは、中甫洞穴上部の平坦地に2m×12mで設定して2m×2mを一区画とし、北側より南側へ1～6区とした。さらに、6区よりやや東南側の中甫洞穴上縁部近くに2m×2mの7

区を設定した。この付近は、現在は松の木が繁り周辺は竹を主とする雑木林となっているが、かつては畠地として利用されていた箇所であり、南側へ緩傾斜をなすものの、おおよそ平坦な地形となり、中甫洞穴前面の凹地を一望できる。調査は4・5区を除く各区で実施し、地表下50cm～1m程掘り下げたが遺物の出土は全く認められず、調査を中止した。

第XIIトレンチは、第二次調査の第IIトレンチ4区西側に隣接して2m×2mで一区画を設け調査を実施した。この付近は北側へ傾斜する一方、壠鉢状地形の東縁部にあたり、西側へ急傾斜をなす地形となっている。地表下50cm～1m掘り下げたところで石灰岩群が現われ、南壁付近には下部の洞穴へと通じる隙間も数ヵ所出現して掘り下げが不可能となり調査を中止した。

遺物は、第1層より数点の土器片が出土したのみである。

第XIVトレンチは、第二次調査の際遺物が出土することを発見した中甫洞穴上部洞床面に設定し、調査の進展に伴って順次拡張して14区まで設けた。上部洞床面の入口側中央部を基点に、床面を2m×2mと一区画として碁盤目状に区切り、中央部を1～3区その東側を4～6区、さらにその東側を洞穴内壁ラインまで延長して7～10区とし、一方1～3区西側杭列より西へ7mの幅をもたせて、洞穴内壁西側ラインまでに4区画を設け11～14区とした。中甫洞穴上部洞は、巨大な石灰岩が重なり合って床面を形成し（これらは下部洞穴の天井部でもある）、それらは東西および北側から床面中央部へ傾斜している。東西の洞穴内壁ラインに沿っては溝状の凹地が走り、北側の内壁ライン付近には下部洞穴へと垂直に落ちる大きな隙間があり、5m程下に下部洞穴を流れる地下水を見ることができる。床面中央部南側（1区付近）では膜状の石灰岩を挟んで3層の土の堆積がみられ、それらはいずれも床面の傾斜に沿ってしだいに薄くなりやがて消失する。また、内壁ライン沿いの溝状の凹地には多量の石灰岩屑を含む土が堆積している。これらの堆積土には多くの遺物が含まれ、それらを挟む石灰岩にも多くの遺物が含まれるが、石灰岩が厚く固着してその取り上げは困難を極めた。床面を形成する石灰岩にも、それらに固着して表面を石灰分に覆われた遺物が点々と見られた。

遺物は、多量の土器片、獸骨片と少量の石器、貝、牙製品・貝類からなり、第三次調査出土遺物の主体をなしている。床面中央部南側では、第1・2層に凸帯文の土器等が出土して第一次調査の2・3層土器と同時期と考えられ、第3・4層には連点文や波状文等の第一次調査4層該当土器の一部が認められ層位的に区分することができる。溝状の凹地でも同様で、地表近くで若干の上層土器（第一次調査の2・3層該当土器）が出土する他は、いずれも下層土器（第一次調査の4層該当土器）の出土をみた。

第XVトレンチは、第Xトレンチ小洞穴の上部に設定し、周囲を石灰岩に囲まれて不定形となる。地表下30cm～1m程掘り下げたが、第1層より土器小片2点が出土したにとどまった。この付近の堆積土は、小洞穴に充満する堆積土へと繋がるものである。

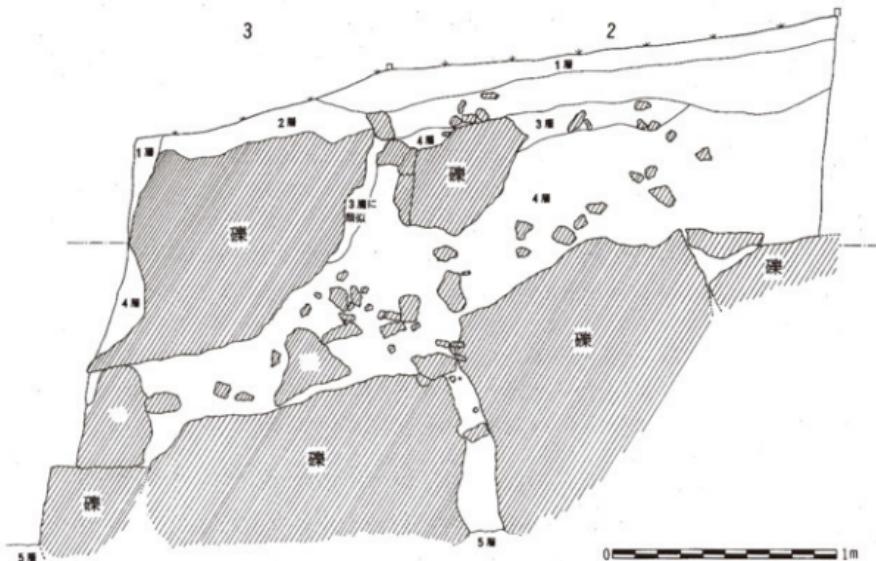
## V 層序

### 1) 第一次調査の層序(第Ⅰトレンチ)

堆積土は5層に分けられ、第1層から第4層までは石灰岩屑を多量に含み、珊瑚礁が風化してできた土壌で粘質が著しく強い。第5層は微粒子となった石灰岩を小量含むだけである。土層の堆積状況を見ると、東西方向の断面では、第1層から第4層までは水平に堆積し、第5層は擂鉢状地形の傾斜に従って、西から東へ傾斜した堆積となっている。一方南北方向の断面(第5図)では、第1層から第4層までは、現在の地表と同様の傾斜角度で南から北へ下っているのに比べ、第5層は、それより緩やかな傾斜角度をもって、同様に南から北へ下っている。上層より層別に述べる。

第1層 黒色土層で厚さは10cm、下部は黒褐色に移行する。有機質を多く含み、乾燥して粒状を呈し、石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

第2層 茶褐色土層で厚さは20cm、上層部は黒褐色で、下部に下るにしたがって茶褐色に漸移す



第5図 第Ⅰトレンチ東壁断面図

る。石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

第3層 暗褐色土層で厚さは15cm, 上部は褐色を呈し下方へ暗褐色に漸移する。粘質が強く、石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

第4層 厚さは160cmあって3層に分かれる。

第4層上部 褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑をやや多く含む。遺物包含層である。

第4層中部 黒褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

第4層下部 茶色土層で粘質が強く、石灰岩屑を多く含む。遺物包含層である。

第5層 灰褐色土層で粘質がやや強く、石灰岩屑を殆ど含まず、一方他の層に見られない雲母を含み、粒子も極めて細かである。堆積にも特色がある。無遺物層である。

## 2) 第二次調査の層序

### (第Ⅱトレンチ)

第Ⅰトレンチに隣接するため、層序及び各層の特徴は第Ⅰトレンチに一致する。土層の堆積状況は、東西方向の断面では、第1・4層が擂鉢状地形の傾斜に従って西から東へ傾斜して堆積し、第2・3層は東側では欠落する。第5層は、その上面に巨大な石灰岩群が出現して堆積状況を明確にできない。南北方向の断面では、各層とも現在の地表と同様の傾斜で南から北へ下っている。

第1層 黒色土層で有機質を多く含み、乾燥して粒状を呈し石灰岩屑を含む。第Ⅱトレンチでは遺物の出土は見られない。

第2層 茶褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

第3層 暗褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

第4層 褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

第5層 灰褐色土層で粘質はやや強く、石灰岩屑を殆ど含まない。無遺物層である。

### (第Ⅲトレンチ)

堆積土は10層を確認した。各層とも乾燥して極めて固く、その掘り下げにはかなりの労力を必要とする。石灰岩屑の含有量は他のトレンチ程多くない。土層の堆積状況は、東西方向の断面では各層とも略水平となり、南北方向の断面では、擂鉢状地形の傾斜に従って南から北へ傾斜して堆積する。

第1層 黒褐色土層で有機質を多く含み、乾燥して粒状を呈する。陶器片1点が出土した。

第2層 暗褐色土層で乾燥して固い。無遺物層である。

第3層 褐色土層で乾燥して固い。無遺物層である。

第4層 明褐色土層で乾燥して固い。青磁微細片1点が出土した。

第5層 茶褐色土層で乾燥して固い。無遺物層である。

第6層 紅褐色土層で乾燥して固い。無遺物層である。

第7層 暗褐色土層で乾燥して固い。無遺物層である。

第8層 黒褐色土層で乾燥して固い。遺物包含層である。

第9層 赤褐色土層で乾燥して固い。無遺物層である。

第10層 灰褐色土層で乾燥して固い。無遺物層である。

(第IVトレンチ)

堆積土は6層を確認した。堆積状況は各区においてやや異なる。東西方向の断面では、南側が各層とも略水平をなすのに対し、北側の壠鉢状地形縁部では、その地形の傾斜に従って東から西へ傾斜し、特に第4・6層はその傾斜が強い。一方、南北方向の断面では、各層とも現在の地表と同様に南から北へ強く傾斜して下っている。

第1a層 黒色土層で有機質を多く含み、乾燥して粒状を呈する。遺物の出土は認められない。

第1b層 黄褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を多く含む。部分的に堆積し、遺物包含層である。

第2層 暗褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。トレンチ南側に堆積し無遺物層である。

第3a層 淡暗褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。部分的に堆積し無遺物層である。

第3b層 黒褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。トレンチ中央部に堆積し遺物包含層である。

第4層 褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を含む。下部は茶色味が強くなり、西側へ強く傾斜する。遺物包含層である。

第5層 赤褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑を多く含む。部分的に岩の裂け目に堆積し、無遺物層である。

第6層 灰褐色土層で粘質はやや強く、石灰岩屑を殆ど含まない。無遺物層で、西側へ強く傾斜する。その特徴から、第Iトレンチ5層に該当するものと考えられる。

なお、5区の大部分には第1層以下に土の堆積がなく、石灰岩や石灰岩屑が堆積するという特殊な状況を示していた。この層からも遺物の出土が認められる。

(第Vトレンチ)

堆積土は2層に区分できるが、両者共に第I・IIトレンチ周辺の土壤が流れ込んだ二次堆積層と考えられる。土層の堆積状況は、南から北へ緩傾斜をなし、また西から東へも緩傾斜をなすが、途中でほぼ垂直に落込んで下部洞穴の空隙部を形成している。

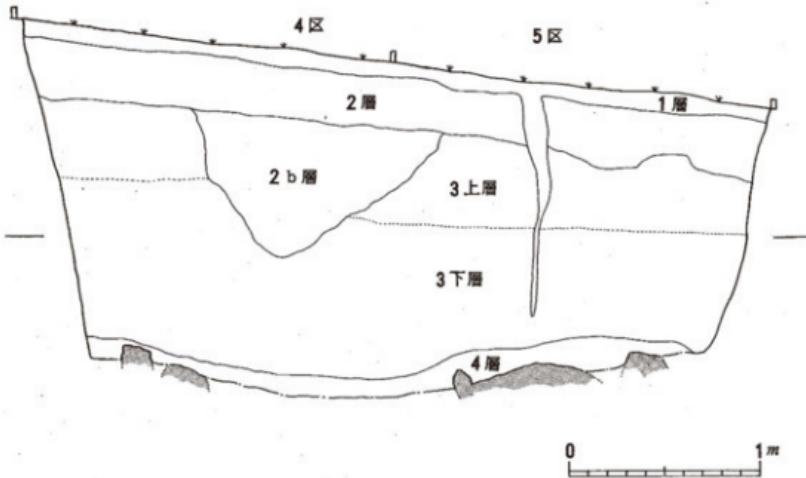
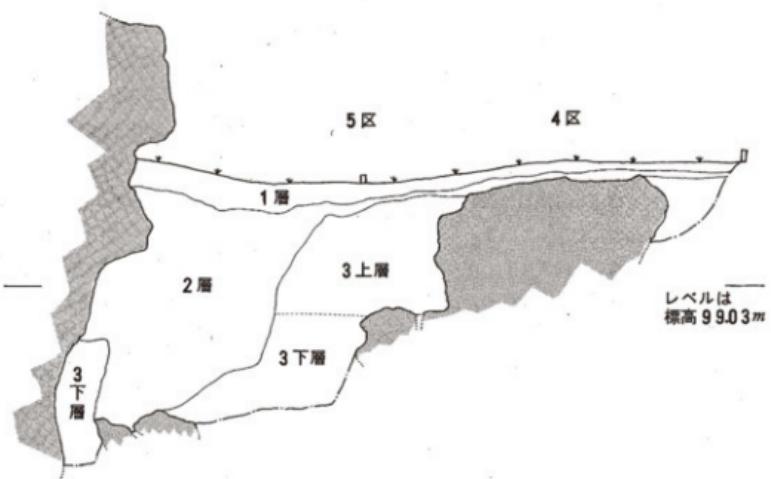
第1層 褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑をあまり含まない。無遺物層である。

第2層 暗褐色土層で粘質が強く、石灰岩屑をあまり含まない。遺物包含層であるが、その出土地点は0・1区東側の堆積土表面より1~1.5m程のところに集中し、他ではほとんど検出されない。

3) 第三次調査の層序(第6~8図)

(第VIトレンチ)

堆積土は掘り下げ面まで4層に区分できる。各層とも石灰岩屑を多く含み粘質が強い。第1~3



第6図 第VI・VIIトレンチ地層図 (上・第VI・VIIトレンチ北壁層位断面図)  
(下・第VIトレンチ西壁層位断面図)

層は、現在の地形と同様に中甫洞穴側へ向って緩傾斜をなすが、第4層上面はゆるやかに波打って他層とは異なる状況を示している。遺物は、各層とも全く出土しない。(第6図下)。

第1層 黒色土層で厚さ10cm程であり、乾燥して粒状を呈しボロボロしている。

第2層 茶褐色土層で厚さ25~30cm程、乾燥して固い。

第2b層 やや黄色味をおびた茶褐色土層で、細い黑色土粒子を多く含む。トレンチの一隅に検出された落込みの埋土である。乾燥して固い。

第3層 紅褐色土層で、下部は暗紅褐色土層へと漸移する。厚さは1m前後で乾燥して固い。

第4層 暗茶褐色土層で、10cm程掘り下げたところで東壁側より迫り出してきた石灰岩のため掘り下げ不可能になった。乾燥して固い。

#### (第VIIトレンチ)

堆積土は掘り下げ面まで3層に区分できる。各層とも石灰岩屑を多く含み粘質が強い。トレンチ周辺は平坦であり、第1層も略水平に堆積するが、第3層はトレンチ西側の石灰岩巨石付近で一端消失し、それを充填する形で第2層が厚く堆積している。この箇所は、掘り下げ中に下部の洞穴(おそらく南洞穴に通じるものであろう)へ繋がる深い空洞が出現しており、この空洞が堆積状況にも影響を与えたのであろう。遺物は各層とも全く出土しない。(第6図上)

第1層 黒色土層で5~20cmの厚さに堆積し、乾燥して粒状を呈しボロボロしている。

第2層 茶褐色土層で、東側では5cm前後の厚さであるが、西側では1m前後の堆積がある。

第3層 紅褐色土層で、下部は暗紅褐色土層へと漸移する。1m程の厚さで堆積するが、前述空洞部付近では消失する。

#### (第VIIIトレンチ)

堆積土は掘り下げ面まで3層に区分できる。各層とも石灰岩屑を多く含み粘質が強い。第1~3層とも現地形と同様に西側へ緩傾斜をなすが、2区側では第2層が石灰岩の隙間に厚く堆積し、第3層は一部でしか見出しができない。遺物は各層とも全く出土しない。(第7図下)

第1層 黒色土層で10cm前後の厚さに堆積し、乾燥して粒状を呈しボロボロしている。

第2層 茶褐色土層で、西側にしだいに厚味を増して70cm前後となる。

第3層 紅褐色土層で、70cm前後の厚さに堆積するが、2区側ではほとんど消失して一部分に検出されるだけとなる。

#### (第IXトレンチ)

堆積土は掘り下げ面まで2層に区分できる。第1・2層とも東側へ傾斜する一方、南側の深い隙間へ急傾斜をなして堆積する。第1層は、小洞穴入口付近のみに認められ、天井部まで堆積土が充満する箇所では、直ちに第2層となっている。各層とも石灰岩屑を含み粘質が強い。

第1層 黒色土層で数cmの厚さに堆積し、乾燥して粒状を呈しボロボロしている。小動物の骨やカニの鉗脚等を含む。

第2層 茶褐色土層で1m前後まで掘り下げた。遺物を包含しているが、前述のように再堆積の可能性がある。

#### (第X トレンチ)

各区とも接続していないため土層は異なるが、石灰岩肩を含み粘質が強いのは同様である。イ区の堆積土は2層に区分でき、いずれも南側へ急傾斜をなす。第1層は黒色土層で、10cm前後の厚さに堆積し乾燥して粒状となりボロボロしている。遺物は出土しない。第2層は茶褐色土層で、1m前後の厚さに堆積し、その下位は石灰岩群となっている。無遺物層である。

ロ区の堆積土は3層に区分でき、いずれも西側へ傾斜する。第1層は黒色土層で、5cm前後の厚さに堆積し乾燥して粒状となりボロボロしている。少量の獸骨片が出土した。第2層は茶褐色土層で30cm前後の堆積となり、第3層との間には板状に石灰岩が広がって両層を仕切っている。遺物を包含する。第3層は暗褐色土層で、石灰岩肩を多く含み20cm前後の厚さに堆積し、その下位は再び石灰岩となる。遺物を包含する。

ハ区の堆積土は3層に区分でき、北側へ緩傾斜をなしている。遺物は全く検出されない。第1層は黒色土層で5cm前後の堆積となり、乾燥して粒状をなしボロボロしている。第2層は茶褐色土層で15cm前後の堆積となり、やや乾燥して固い。第3層は紅褐色土層で、掘り下げ面まで70cm前後の厚さに堆積し、下部は暗紅褐色土層へと漸移する。やや乾燥して固い。(第7図上左)

#### (第XI トレンチ)

第I・IIトレンチ層序と重複するため省略する。これまで無遺物層としていた第5層(灰褐色土層)でも数点の土器片が出土したのが注目される。

#### (第XII トレンチ)

堆積土は掘り下げ面まで4層に分けられる。各層とも石灰岩肩を含み粘質が強いが、乾燥してやや固い。堆積状況は現地表面と同様に、東西方向へは路水平に、南北方向へは各層とも南側へ緩傾斜をなしている。遺物は全く出土しない。(第8図)

第1層 黒色土層で数cmの厚さに堆積し、乾燥して粒状となりボロボロしている。

第2層 茶褐色土層で20cm前後の厚さに堆積する。

第3層 紅褐色土層で70cm前後の厚さに堆積し、下部は暗紅褐色土層へと漸移する。

第4層 暗茶褐色土層で、深掘り部のみで検出した。掘り下げ面まで20cm前後の厚さであるが、さらに下位へ続くものと思われる。

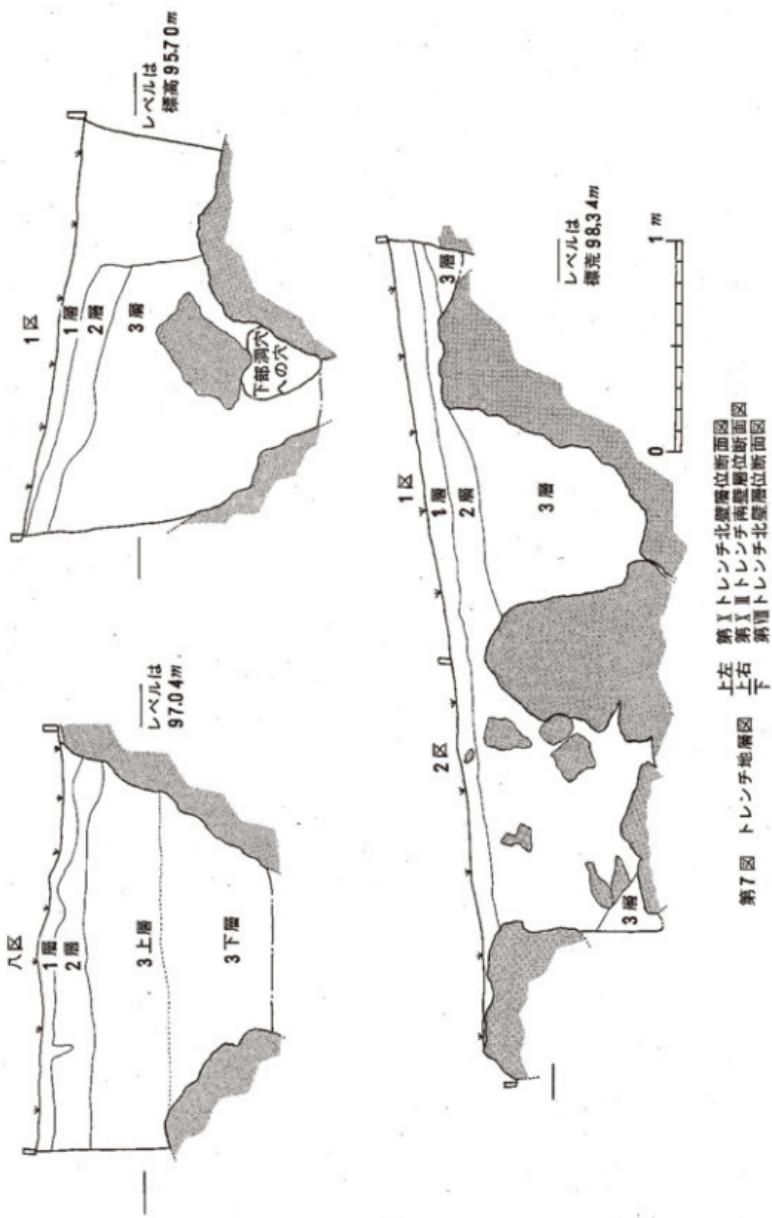
#### (第XIII トレンチ)

堆積土は掘り下げ面まで3層に分けられる。擂鉢状地形の東縁部に位置するためか、第2・3層は西側へ傾斜して突然消失し、その部分を昨年の排土が充填して現地形をなしている。遺物は第1層に数点の土器が認められただけである。(第7図上右)

第1層 黒色土及び昨年の排土で、西側へしだいに厚味を増して10cm前後となり、西壁付近では60cm程の堆積となる。黑色土は乾燥してボロボロしている。

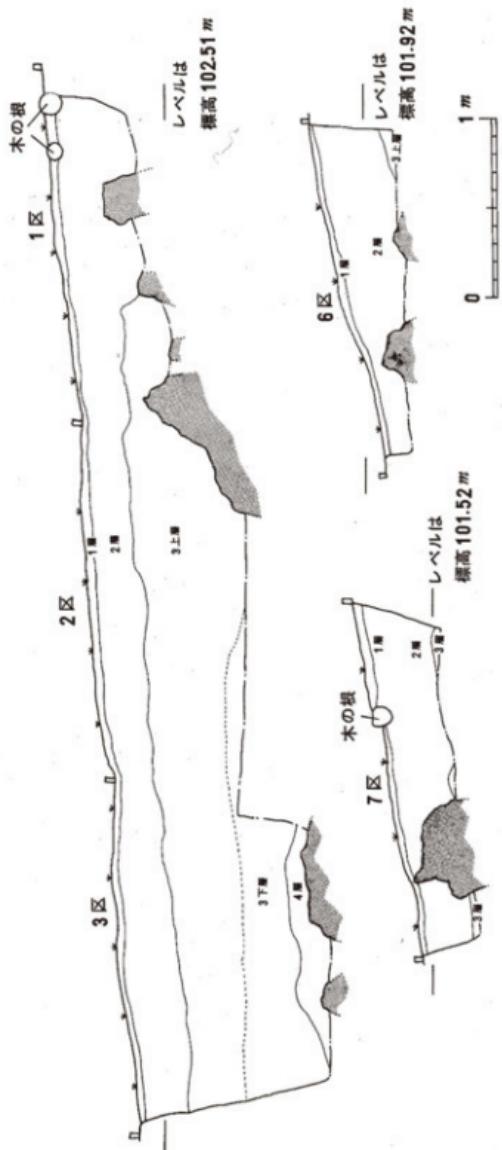
第2層 茶褐色粘質土で15cm程の厚さで堆積する。

第3層 紅褐色粘質土で1m前後の厚さで堆積し、その下位には墨々と石灰岩が重なり合っている。



第7図 トレンチ地層図  
上左 第Ⅰトレンチ北壁位置断面図  
上右 第Ⅱトレンチ南壁位置断面図  
下 第Ⅲトレンチ北壁位置断面図  
下 第Ⅳトレンチ南壁位置断面図

第8図 第XIIトレンチ地層図(第XIIトレンチ北壁層位断面図)



#### (第XIVトレンチ)

洞穴中央部の南側（1・4区）では膜状の石灰岩を挟んで堆積土を3層に区分できるが、北側へいく程に薄くなり、2区北半及び3区・6区西半ではほとんど土の堆積は認められない。一方、東西の洞穴内壁ライン沿いの溝状凹地及び6区東半には石灰岩や石灰岩屑を多量に含む堆積土が認められる。これらは石灰岩の隙間を充填する形で厚く堆積する。

第1層 灰白色層で粒子が細かく1～6区に認められるが、床面の傾斜にそって南側へ傾斜し、3・6区付近では数mmの厚さとなり、1・4区で5～10cmの厚さで堆積する。遺物包含層である。粘質は弱い。

第2層 灰黒色土層で1・4区の南半分程に認められ、それより北側では消失する。0～5cm程の厚さで堆積し、遺物包含層である。やや粘質を含む。

第3層 石灰岩が膜状になったもので、おそらく天井部や周囲から流れ出た水に含まれる石灰分が膜状に固着したものと思われる。厚さ10～20cmあり、遺物を多く包み込んでいるがその取り上げは極めて困難である。

第4層 黒褐色土層で第1層と同様な範囲・堆積状況で認められる。多量の遺物を包含するが、厚味の薄い箇所では上下の石灰岩に固着し、その取り上げは極めて困難である。やや粘質である。

第5層 中甫洞穴の上・下部洞穴を仕切る巨大な石灰岩で、上部洞穴床面の基盤となる一方、下部洞穴の天井部を形成している。

洞穴内壁ライン沿いの溝状凹地及び6区東半には粘質の強い褐色土が堆積し、これも遺物を包含する。

#### (第XVトレンチ)

堆積土は2層に区分され、略水平に堆積する。遺物は第1層に数点の土器片が検出されただけである。第2層はそのまま第Xトレンチ小洞穴内の堆積土へと続くものである。

第1層 黒色粘質土で厚さ10cm前後に堆積し、乾燥してボロボロした粒子となっている。

第2層 茶褐色粘質層で、掘り下げ面まで40～90cm前後の厚さに堆積しているが、小洞穴の直上ではさらに厚くなり、そのまま小洞穴内の堆積土へと続く。

## VII 遺構

中甫洞穴遺跡における第一次より第三次に至る調査は、第一次の洞穴入口、西断崖下の第Ⅰトレンチの調査、第二次における、洞穴の入口の擂鉢状地形の中央底部から周辺部へかけて設けた第Ⅱ・第Ⅲトレンチ、洞穴入口東側断崖下の第Ⅳトレンチ、洞穴西側の地下空洞に設けた第Ⅴトレンチの調査、第三次における、洞穴前面の第Ⅵトレンチ・第Ⅶトレンチ・第Ⅷトレンチ・第Ⅸトレンチ、および、洞穴入口西側断崖下の第Ⅹトレンチ（第Ⅰトレンチ東側に隣接）、洞穴入口東側断崖下の第Ⅺトレンチ（第Ⅳトレンチ西側に隣接）、第Ⅻトレンチ（第Ⅹトレンチに隣接）、洞穴内に設けた第Ⅼトレンチ、洞穴西側に隣接する一段高い台地に設けた第Ⅽトレンチ（洞穴上地表面）、南洞穴に設けた第Ⅾトレンチの調査まで総計15地点、中甫洞穴とその周辺におよんだ。

調査の結果、遺跡と思われる所は中甫洞穴と南洞穴および、両者の中間にある巨岩の下に発見された小洞穴の3ヶ所で、周辺からは何等の発見も得るところがなかった。

南洞穴では、内部に設けた（イ）（ロ）の試掘溝から小量の土器片と獸骨が発見されて先史時代に利用された痕跡が認められた。

両洞穴中間の小洞穴では、若干の土器・石器・獸骨が出土したが、二次堆積の疑いがあるが、上部には遺物の出土する地層・遺構等が検出できないところから、遺跡の一種と見られよう。

中甫洞穴は中心的な位置にある遺跡である。洞穴内部では中央の傾斜面から東壁下までは、巨岩を挟んで下層の遺物が出土しているのに対して、西壁下からは上層の遺物が少量出土するだけである。一方洞穴西側の地下に通ずる空洞内の堆積土層から、下層の遺物が相当量出土するが、この土層は、洞穴入口西壁下から流れ込んだ二次堆積であることが判明した。

入口西壁下からは、大きく分けて二時期の堆積が見られ、下層と上層の遺物が出土し、上層入口付近に人骨も出土している。

入口東壁下からは、下層の遺物が出土し、入口付近では、上層と下層の中間に土塙墓が検出された。

以上の遺物出土状況から、遺跡が成立した当初は、洞穴の中央部から東壁までと、入口西壁下および東壁下が生活面として使用され、この時期の終末期に、東壁下の入口付近に埋葬が行なわれたと見られる。この後、相当の空白期間を経て、洞穴入口西壁下から洞穴内西壁下にかけて、再び生活が営まれ、入口付近で埋葬も行なわれている。

## VII 遺物

### A 人工遺物

人工遺物としては、土器・石器・牙貝製品などがある。遺物の埋蔵の状態は、量的に見ると少ない部類に属するが、層位的な包含状況は良好で、第2・3層および、その相当層には、弥生時代に該当するとと思われる若い時代に属する遺物のグループが包含され、また採集遺物にも同時期のものが見られる。第4層は更に3層に分かれ、縄文早前期に該当する遺物群が、移入土器と思われる轟I式土器を中心として、その前後に一連となって数型式が包含され、採集遺物にも同時期と考えられるものがあり、更に第4層最下部からは、縄文草創期に属する爪形文土器が出土している。第一次、第二次の調査では無遺物層と考えられていた第5層から、第三次の調査では、小量ではあるが遺物の出土を見た。

次に第一次・第二次の調査による資料に採集遺物を加え、更に南島に広く移入されている轟式の型式分類資料を加えて前半にあて、第三次の調査による資料を後半に記述する。

## D 土 器

### 第一次・第二次の調査および採集による資料

#### 第2層・第3層の土器 (第9~11図、図版2・3)

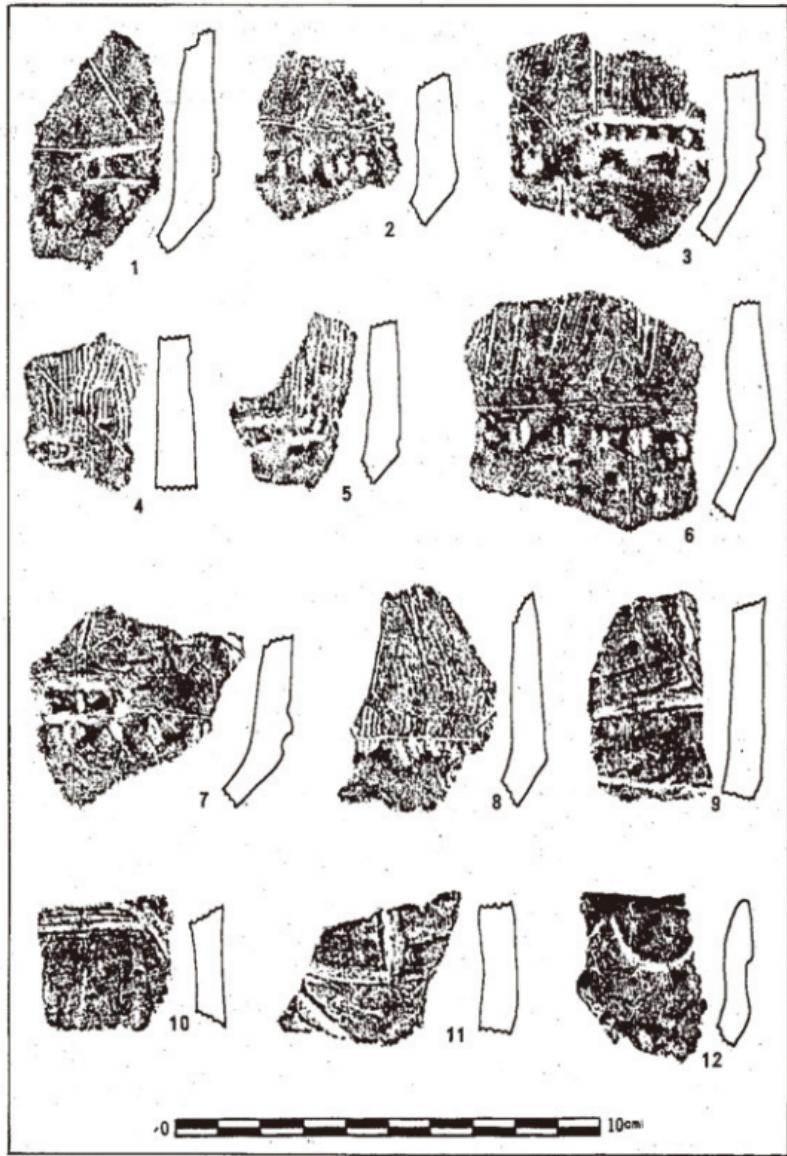
壺形土器・甕形土器・鉢形土器に分かれる。

##### 壺形土器 (第10図-1・6、図版2-1・3)

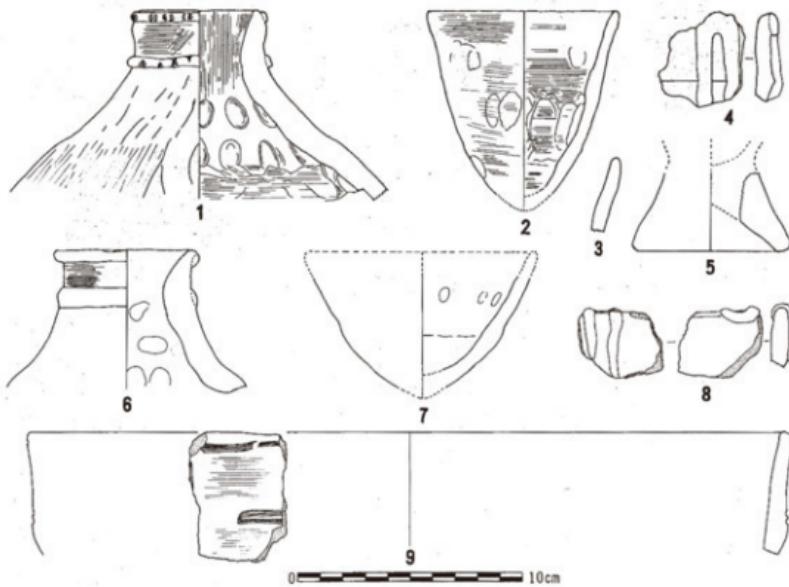
この壺形土器は、高さ15~20cmの小型土器である。輪積で、接合部内面には指頭による押圧痕が顕著である。焼成は良好で、色調はあかるい褐色を呈している。器形は頸部が球形に張り、肩部から急にせばまって、頸部は筒状になって立ちあがり、口縁部には細い凸帯を2条めぐらし、押圧して刻目を施すものもある。底部は丸底またはそれに近い器形であろう。器壁が厚く、器面はナデ仕上げを施している。胎土に石灰岩粒子および雲母が認められる。煮沸に使用した痕跡はない。

##### 甕形土器 (第9~11図、図版2・3)

口縁部から頸部へ移行するところで、「く」字状に屈曲する器形である。なかには屈曲部が稜線を形成するものも見られる(第10図-4、図版3-上2)。口縁部に凸帯・沈線などを施し、この部分が肥厚するものもある。「く」字状屈曲部に刻目を施し、その直上に横位の刻目凸帯を部分的に貼り付け、更に、細い沈線で、口縁部に直線文を描くもの(第9図-1~8、図版2-5~8・11~13、図版3-上1)もある。この土器は粒子が粗く、胎土に石灰岩粒子・雲母を含み、刷毛目仕上げで焼成は良くない。煮沸に使用した痕跡がある。次に、口縁部から頸部におよぶ細い粘土凸帯2条を、縦に貼り付けたものがある。器面は研磨され、胎土には石灰岩粒子・雲母を含み、焼成は良好である(第10図-4・8、図版3-上3・4)。3番目には、第10図-9・図版2-2の土



第9図 1—2層出土土器

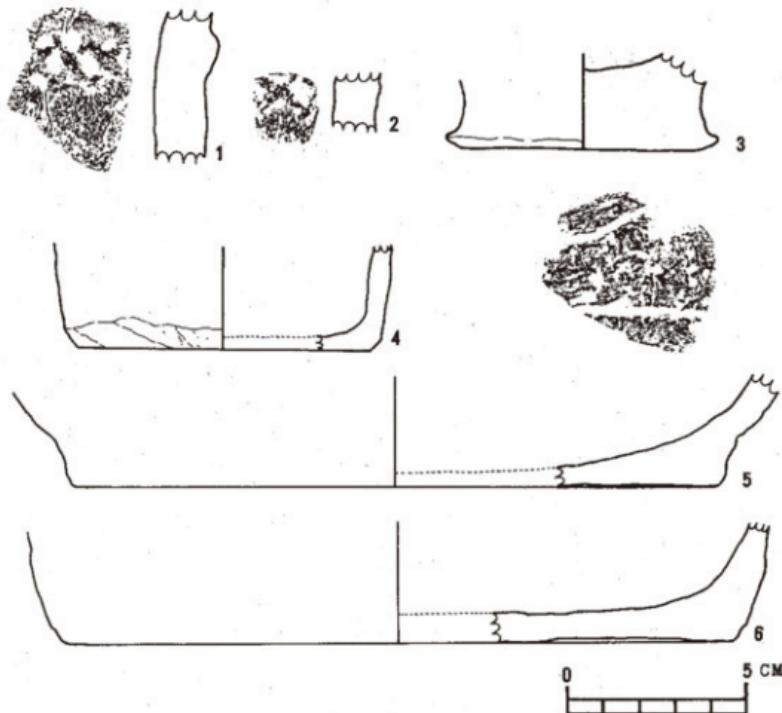


第10図 1-2・3層出土土器

器がある。口縁部に、先端に繊維が露呈した工具を用いて、横位・縦位に浅い沈線を描いたもので、胎土に石灰岩粒子・雲母を含み、ナデ仕上げで焼成は良好である。第9図-12、図版3-上7・8の土器は、口縁部の肥厚するもので、第9図-12・図版3-上7は、波状口縁で、口縁から下方へ弧状に肥厚する。胎土は粒子が細かで、焼成は良好である。図版3-上8の土器は、口縁部が断面三角形に肥厚し、この部分に細沈線による曲線文を施している。胎土は粒子が粗いが、焼成は良好である。両者ともナデ仕上げで小型土器と思われるが、煮沸用として使用されている。前者は、最近、笠利町長浜金久Ⅲ遺跡で類品が発見され、後者は、同じく宇宿港遺跡に類似土器が出土している。

壺の底部としては、上げ底の土器片がある（第10図-5・図版3-上9）。浅い上げ底で、金峰町松木遺跡出土の、弥生後期壺形土器の底部に類するものである。胎土の粒子は粗く、石灰岩粒子を含み、焼成は良好である。火熱をしばしば受けた形跡があり、煮沸に使用されたことを示している。

他に壺形土器の底部と思われるものに、第11図-3がある。底面に木葉圧痕があつて兼久式と思



第11図 1: IV-1b層, 2: V, III-8層, 4: IV-1b~4層, 5: V  
6: IV-3b層出土土器

われる。第11図-4・5・6の土器も同時期に属するものと思われるが、口縁部に該当する土器は発見されていない。

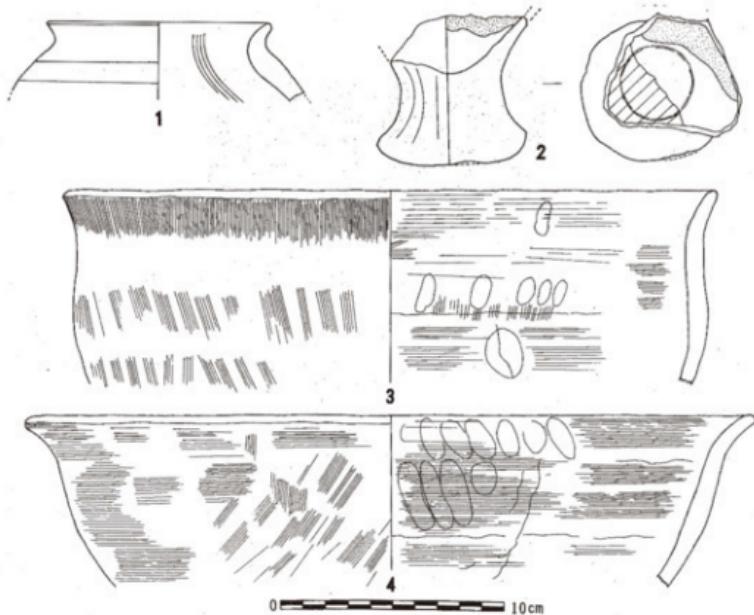
第9図-9~10、図版3-上10・11に示す3片の土器は弥生土器の破片である。繊維の露呈した工具で、浅い箇描き文を施したものである。

#### 鉢形土器 (第10図-2・3・7、図版2-4、図版3-上5・6)

高さ6~8cmの小形土器である。壺形土器と同様に、輪積みで指頭圧痕をのこす粗雑な作りであるが、南九州弥生後期頃にみられる、小形鉢形土器に類する器形である。胎土は粗く、石灰岩粒子を含み、焼成は良好である。色調はいずれも黒褐色を呈するなかで、図版3-上6の土器は紅褐色を呈し、やや大形で弥生式土器と考えられる。

#### 採集土器 (第12図、図版4-1~4)

採集土器のうち、弥生土器と須恵器をあげる。第12図-1、図版4-3は須恵器の壺で、移入品である。第12図-2、図版4-4の土器は、蓋形土器のつまみとも見られるが、土器内面にこげつ

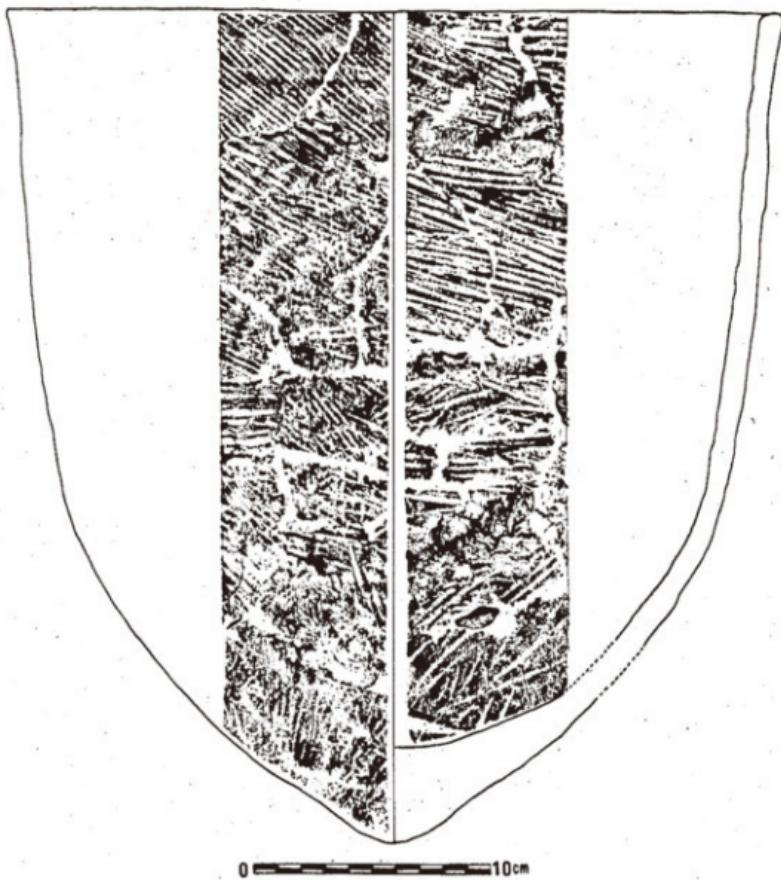


第12図 中甫洞穴採集土器

き痕があり、圓形土器の底部で、山ノ口式に類するものと考えられる。器形に変化したところが見られるのは、地元で作られたことによるものであろう。第12図-3・4、図版4-1・2の土器は、圓形土器と鉢形土器である。現地で生産された弥生式土器と考えられるが、時期については、資料が充分でないために判定できない。

#### 第4層の土器 (第13~26図・図版5~16)

第4層出土の土器は、土層の3区分に従って、出土する土器を比較すると、出土層の区分に対応して型式分類の可能性が考えられるので、第4層の土器を、更に上部・中部・下部の出土別に分類して述べる。尚この3区分した中で、中部層から出土した土器の中に、本土から移入したと思われる轟式土器が含まれている。これは市来式と同様に、南島式土器の断年に重要な基準となるもので



第13図 森I式土器(第4層中部層)

ある。ところが轟式には、種々の要素が含まれており、更にいくつかの型式に分類すべきであるが、それが行なわれていないために、種々の混乱を招いているのが現状である。そこで本土の轟式土器について型式分類を試み、のちに中甫出土の轟式土器の占める位置について考えよう。

#### 轟式土器の分類

轟式土器は、はじめ三森定男によって、鹿児島県金峰町阿多貝塚出土の土器を標式として、阿多式とされたが、大正8年に、熊本県宇土市轟貝塚が浜田耕作の発掘によって著名となり、轟式の名が流布するようになった。轟式は土器の表裏面を、貝殻縁で器面調整を行うもので、更にその上に貝殻縁による格子文・曲線文、みみずばれ状の隆起帶文、点線文・刻目凸帶文、相交孤文などを施した鉢形、深鉢形、砲弾形などの器形を示す土器で、平底と尖底とが見られる。南九州を主として九州全域に分布する前期繩文式土器である。<sup>(5)</sup>

南九州において轟式に先行する型式として塞ノ神式が挙げられる。塞ノ神式は、縄文を有するA式と、貝殻縁による施文のあるB式とに分かれ、国分市平椿貝塚や溝辺町石峰遺跡において、両者の層序関係が明らかになり、塞ノ神A式が、塞ノ神B式より先行することが確認されている。

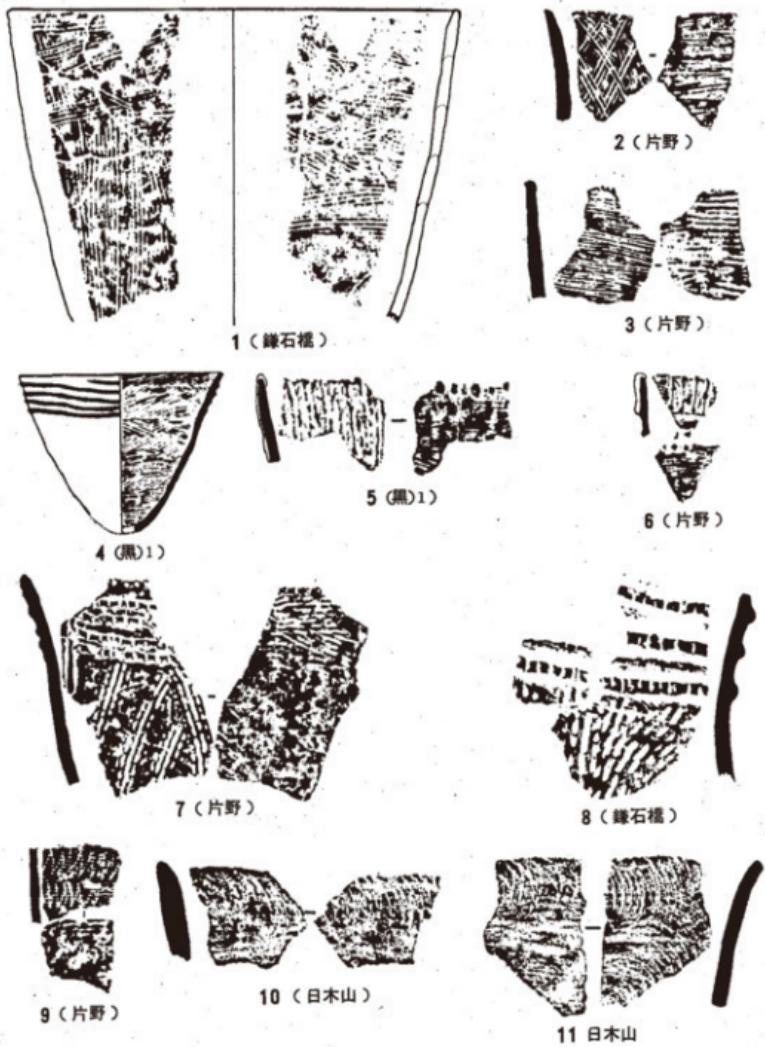
塞ノ神B式土器は、終末期になるとラッパ状に外反する口縁部の「反り」を失い、単純な深鉢形平底の器形が、一部に出現するに至る（第15図）。このような現象は、平椿貝塚の他、鹿児島市加治屋園遺跡・加治木町三代寺遺跡においても確認されている。この器形になると、貝殻縁で器面調整を行ない、その上をなで仕上げするような手法が、塞ノ神B式のなかに、新しく用いられるようになる（第15図）。また塞ノ神B式に見られる、貝殻縁による格子状文様は、古式の轟式にも見られるものである（第14図-1・2）。以上にあげた両型式に共通する諸条件に併せて、吉田町小山遺跡や、志布志町鎌石橋遺跡に見られる層序の関係から考えて、轟式が塞ノ神式の系統に属し、それに後続する型式であることは明らかである。<sup>(6)</sup>

轟式土器の型式分類は、志布志町片野洞穴出土の土器について、層序に従って分類をこころみたことがあるが、更に同町鎌石橋遺跡・吉田町小山遺跡・吹上町黒川洞穴・加治木町日木山洞穴・熊本県宇土市轟貝塚その他の資料を参照して、層序に従って分類すると、4つに分けられる。これを古い順に轟I式・轟II式・轟III式・轟IV式と呼ぶことにしたい（第14図）。

#### 轟I式（第14図-1～3）

轟式土器のなかで最古と思われる型式である。鎌石橋遺跡では、鬼界カルデラ起源の幸屋火砂流の直下から出土する貝殻縁で器面調整した土器で、小山遺跡でも、同じく鬼界カルデラ起源のアカホヤ（幸屋火砂流と同一時期）層直下から、同類の土器が出土している。また遠く、大分県においても、下菅生B遺跡・桑木G遺跡でアカホヤ層の下から同類の土器が出土することが知られており、宮崎県北川内区内野々遺跡でも同様な層序で同類の土器が出土している。これらの土器が轟I式土器である。器形は深鉢形で、直口が多く、口縁部がわずかに外反するものもみられる。底部は丸底または平底のようであるが、まだ完形土器を見ない。土器の内外面を貝殻縁で器面調整を行なうが、更にその上に、貝殻縁による格子目または曲線文を重ねるものもある。<sup>(7)</sup>

轟I式土器は、上にあげた遺跡の他に、志布志町片野洞穴の最下層から出土し、片野I式（河口



第14図 賽I式(1~3), 賽II式(4~6), 賽III式(7・8), 賽IV式(9~11)

貞徳)と呼び、日本山洞穴から出土したものは、条紋文土器(樋口清之)と呼ばれ、轟貝塚から出土したものは轟A式(松本雅明)と呼ばれている。

以上の状況から見て、轟I式土器文化は、鬼界カルデラが大爆発を起す以前に、九州一円に広く分布していたことがわかり、塞ノ神式土器文化が、九州域に広がっていったあとを受けて、轟I式土器文化も南九州を起点として広域化していったと推定される。

#### 轟II式 (第14図-4~6)

轟II式は、轟I式に後続する型式である。層序関係は片野洞穴遺跡<sup>10</sup>・黒川洞穴遺跡<sup>11</sup>で明らかにされている。土器の内外面を貝殻で調整し、みみずばれ状の凸帯で器面を飾る土器である(第14図-5・6)。脛が張り、口縁部で外反する丸底の器形と、直口の深鉢形丸底の器形が見られる。黒川東洞穴の最下層から出土した、深鉢形丸底で口縁部にそって数条の三角凸帯をめぐらした土器(第14図-4)もここに含めたが、栗野町花ノ木遺跡の三角凸帯を器面の上半部に多条にめぐらす浅い鉢状の土器とともに、編年上の位置には問題が残る。轟II式は轟式の代表的な型式で、ほとんどの轟式遺跡から出土しているが、南島ではまだ発見されていない。

#### 轟III式 (第14図-7・8)

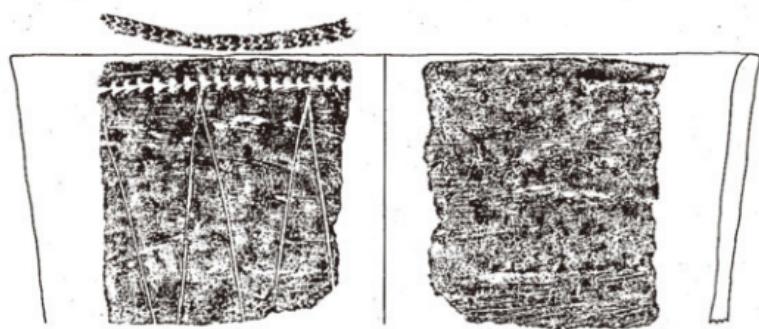
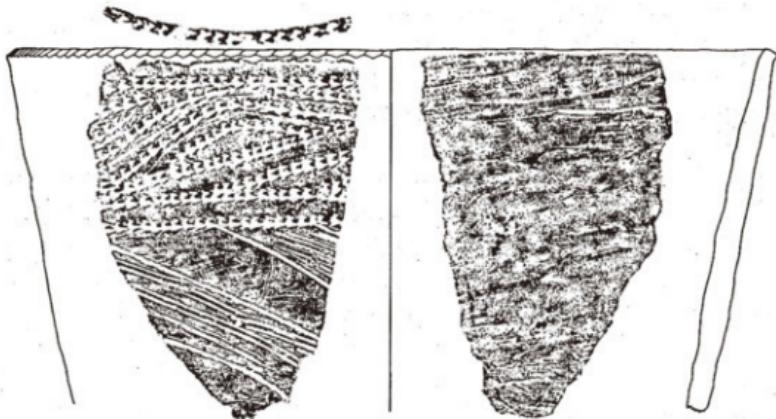
轟III式は轟II式に後続する型式である。片野洞穴では、轟II式出土層の上の層に、鎌石橋遺跡では幸屋火吹流の上の第3層から出土している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、更に同じく貝殻縁による連点文を施し、刻目凸帯を貼付する土器(第14図-7・8)である。土器表面の貝殻縁による条痕が微かに見られる程度のものもみられる。宝島大池遺跡では、赤連系土器とともに出土し、また片野洞穴では、貝殻条痕を地文とする曾畠式土器を共伴している。

#### 轟IV式 (第14図-9~11)

轟IV式は、轟III式に後続する型式である。片野洞穴の層序によって、轟III式との関係が判明している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、更に貝殻縁によって、連続して弧文をジグザグに施す土器(第14図-9~11)である。日本山洞穴出土の相交弧文土器(樋口清之)に該当する。

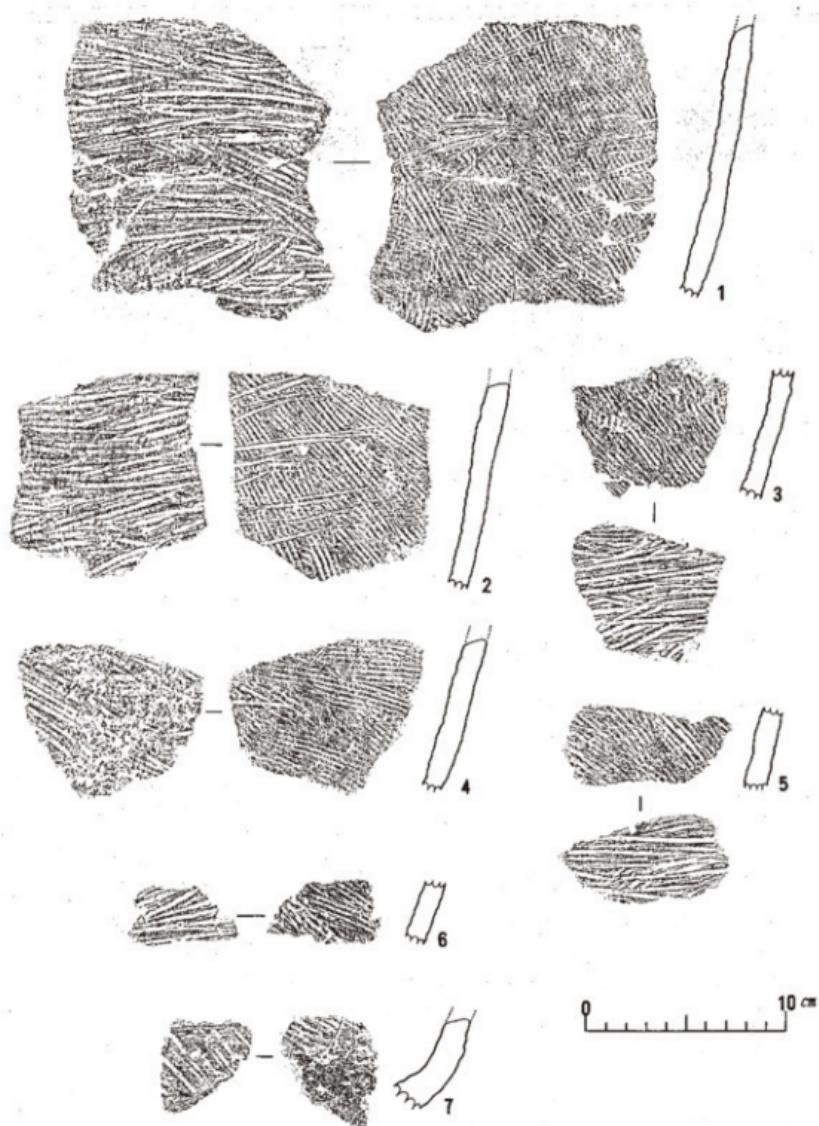
#### 第4層中部層出土の轟式土器 (第13・16図・23図-1, 図版5・6)

この土器は第Iトレーナー2・3区の中部層を中心に、とくに2区中部層を主とし、2区の上部層下部層および、3区の下部層その他に若干の破片の出土を見たが、これらは一個体分の土器が分散したもので、2区中部層に原位置があったものと推定される。器高は推定34.8cm、やや乳房状に近い尖底で、外側へ開き気味の直口深鉢形の土器(第13図・図版5)である。器壁は厚く1cm内外あり、底部では4cmに達している。輪積で成形され、アナダラ属の貝殻腹縁を用いて器面を調整し、内面は、太めの肋を有する貝殻を使用して、主として横位に調整し、その間に僅かに斜位をまじえ、外面はやや細めの肋を有する貝殻を使用して、斜位調整を主として、僅かに縦位をまじえ、底部は中心より放射状に調整している。胎土は砂粒を多く含み、石英・輝石・雲母・石灰岩粒が認められ、色調は、底部は黒褐色、下脚部は赭褐色、上半部は黒褐色ないし黄褐色で、内面底部は黒褐色、脣部へ移行すると赭褐色となり、上部へ移行するにしたがって黒褐色に変ずる。焼成は普通であるが、砂粒を多く含むために、器壁面より粉状となって剥離する傾向がある。



0 15cm

第15図 ノ神B式土器の移行形態(平繪)



第16図 爺式土器(第2次下層出土)

第17図 第4層土器の層別分類表

上層面凹窓口付器	中層面凹窓口付器	下層面凹窓口付器
1	2	14
3	4	15
5	6	16
7	8	17
9	10	18
11	12	19
13	19	

この中甫洞穴から出土した轟式土器は、移入品と考えられ、前述の轟I式に該当するものである。したがって中甫洞穴第1トレンチの第4層の中部層は、轟I式の時期に該当し、6,300年前に爆発したと言われる、鬼界カルデラの活動以前の時期に比定してよいであろう。

第4層上部層出土の土器（第17図-上段、第18・19図、図版7～9）

第4層上部出土の土器は、轟I式以降の時期に当る。器形は口縁部の外反するもの、波状口縁をなすもの、口縁部が内側へ傾斜して胸部の張るものなどがあり、深鉢形と考えられるが、底部は不明である。文様には連点文・浅い波状文・窪削連続文・凸帯文があり、無文も見られる。

連点文（第17図-1・3、第18図-1～7、図版7～3、図版8-3・4・7、図版9-1・2・4・5・7～13）幅8mm程の櫛状の工具を用いて、1cm内外の間隔で連続施文したものである。上から下へ向けて施文するために、幅8mm、縦4mm程の凹点となり、内部に櫛齒痕をのこし、文様の下際には、粘土の盛り上がりができる。この文様は第4層上部層の代表的なもので、下部層から系列のなかでの一つとしてとらえることができる。

波状文（第17図-2、第19図、図版7-1・4・8、図版9-3）胎土の粒子は細かで、焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。細い箇状工具で、浅い波状文を継続して、あるいは連続して施文したものである。第19図の土器は、西側下部空洞の堆積層から出土したものであるが、器形は丸底となっている。

貝殻縫刺突文（第17図-4、図版11-9）貝殻縫を工具として、条痕文と弧文を描くもので、弧文の縁部には、施文による粘土の盛り上がりが見られる。胎土は粒子が細かで、細砂を含み、その中に石灰岩の粒子もみられる。焼成は良好で、色調は紅褐色である。

凸帯文（図版9-6）8mm幅の低い粘土帯を貼付した土器である。小片で全体の形は不明である。砂粒を多く含み、火熱を受けて脆くなっている。凸帯を有するものはこの一例だけである。

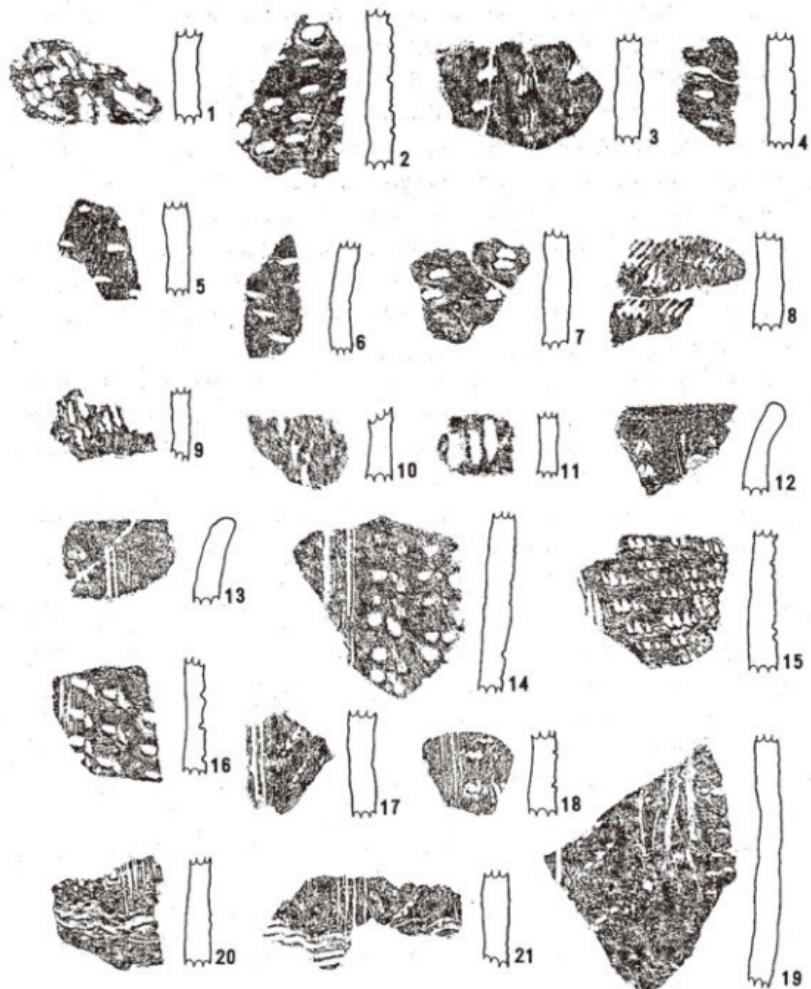
第4層中部層出土の土器（第17図-5～13、第18図-8・20・21、第20図、図版10、図版11）

第4層中部層出土の土器は、前に述べた轟I式土器と同一層序の土器である。器形は口縁部が外反するものが多く、胸部の張るものも見られる。一般に小形で、口径25cm内外である。胎土は細かで焼成は良く、色調は紅褐色を呈し、まれに黒褐色のものもある。文様には連点文・櫛描き文・沈線文・波状文がある。

連点文（第17図-5・6・8・9、図版11-1・2・4・5・7・8）第4層上部層の連点文では、一点の単位が大きく、中に線刻が見られたが、この層から出土する連点文は、これに比べて小さく、文様内部に線刻は見られない。施文具は2叉に近い細めの箇状工具を用い、縦または斜めに、上から下方向へ、引きずり気味に押出し、口縁部または、口縁部から胸部までの部位に施文している。

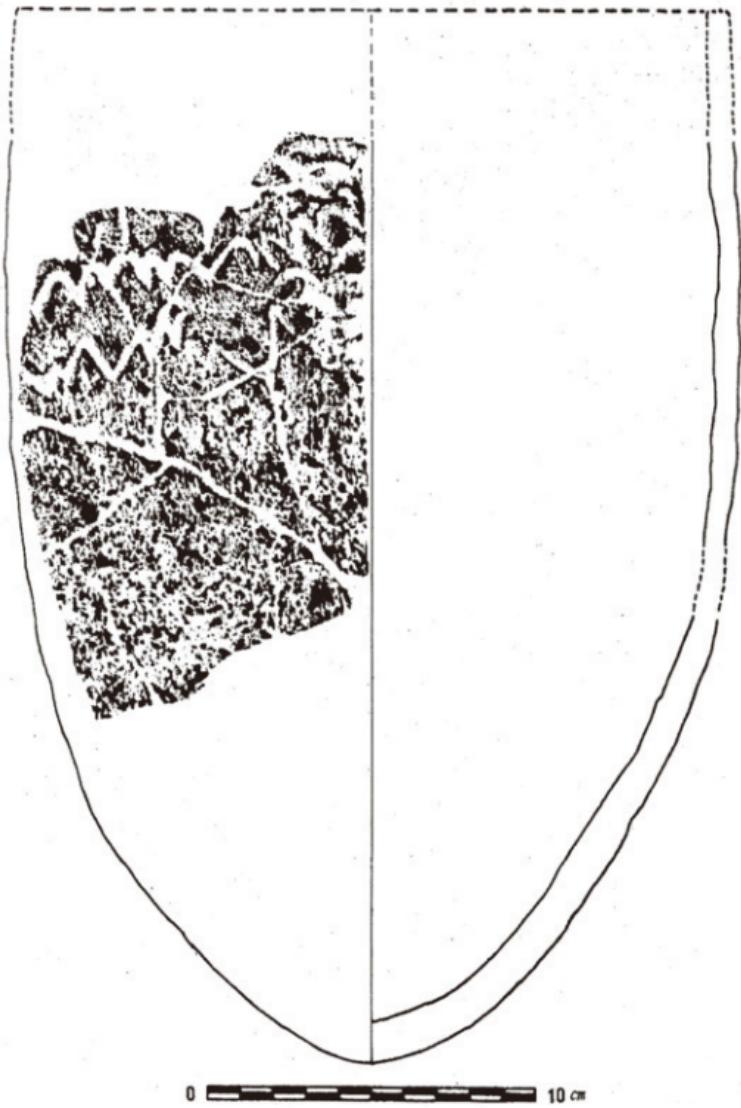
櫛描き文（第17図-7、図版11-11）貝の肋を4条残した貝殻腹縫、または同様な櫛状工具を施文具として、横方向にひっかくように連続して施文したもので、裏面には、同じ施文具で、局部的に縦方向に施文したものである。

沈線文（第17図-10、図版11-12）横位の細い沈線を、口縁に平行に数条施すものである。

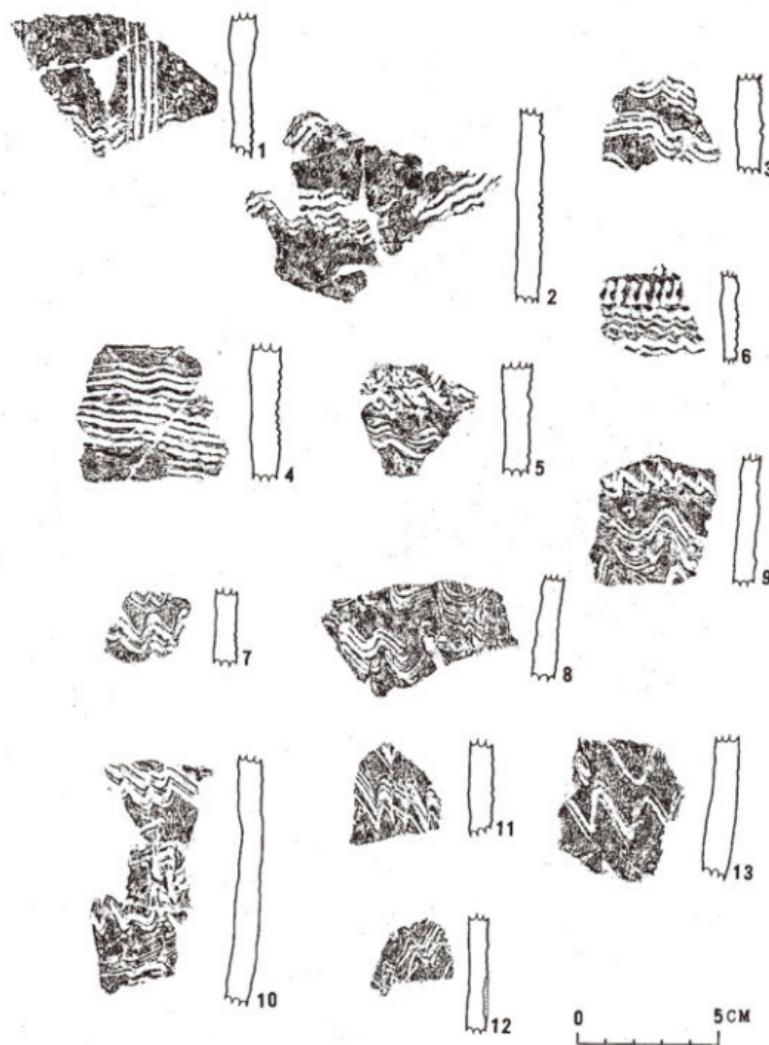


0 5 CM

第18図 下層出土の土器(第2次)



第19図 篦削り波状文土器



第20図 下層出土の土器(2次)

裏面にも口縁下に、同様な沈線で、幾何学的な文様を描くが、すべて一本の工具で順次に描いたものである。前述の櫛描き文とともに、南島では極めて珍しい例で、九州の前期繩文土器と対比されるものといえよう。

波状文（第17図-11～13、第18図-20・21、第20図、図版10-1～7、図版11-3・6）貝殻縁によって横位の波状文を施したものである。施文法は、左より右へ短かく区切り乍ら連続して描く。

第4層下部層出土の土器（第17図-14～19、第22～24図、図版12～16）

第4層下部層出土の土器は、層位的に森I式土器以前の時期と見られるものである。土器が小片で、器形を推定することが困難であるが、洞穴西側下部空洞堆積の土器である第21図・第23図-2・3の土器や、第Ⅱトレンチ出土の第24図の土器によって、円筒形で丸底の器形であろうと思われる。文様は、連点文・羽状連点文・箆削り連続文・波状文の4種類がある。

連点文（第17図-14・15、第22図-1～3・6～12、図版12-1・2・4・5・13～15、図版14-1～3）第4層中部層出土の連点文と、一見したところでは同類のように見えるが、第4層中部層出土のものは、点の間隔がやや広く、施文に規則性が欠けているが、第4層下部層出土のものは、数点によって文様の一単位が構成され、この単位文様が縦列をなして全体の文様が構成されている。これは、施文具が異なるためで、前者が細い箆を使用して施文しているのに対し、後者は幅が広く、先端に数個の突起のある施文具（ハイガイ属の貝殻腹縁部）を用いているからである。このことは、文様が数個の点で一単位が構され、弧状を呈し、同形態のものがくりかえし施文されていることでわかる。

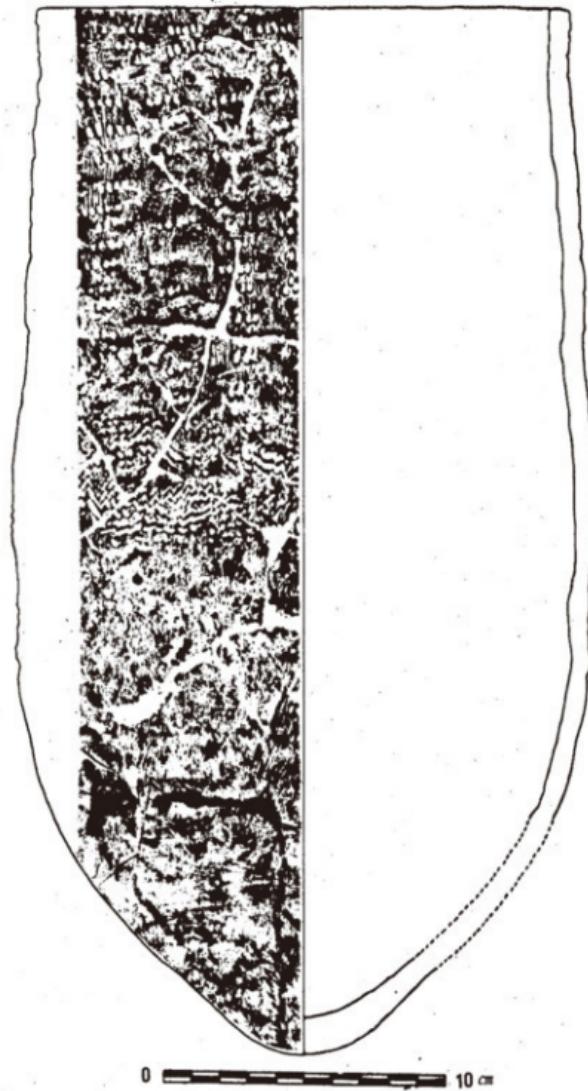
箆削り連続文（第17図-16、図版12-3）箆を施文具として、連続して爪形あるいはジグザグの文様を施文したものである。

波状文（第17図-19、図版12-7・10～12、図版14-4）第4層中部層出土の波状文と同類であるが、施文法が一層複雑になっている。貝殻腹縁を施文具として、一方向に引き描きするだけでなく、多様な操作を行なって施文している。

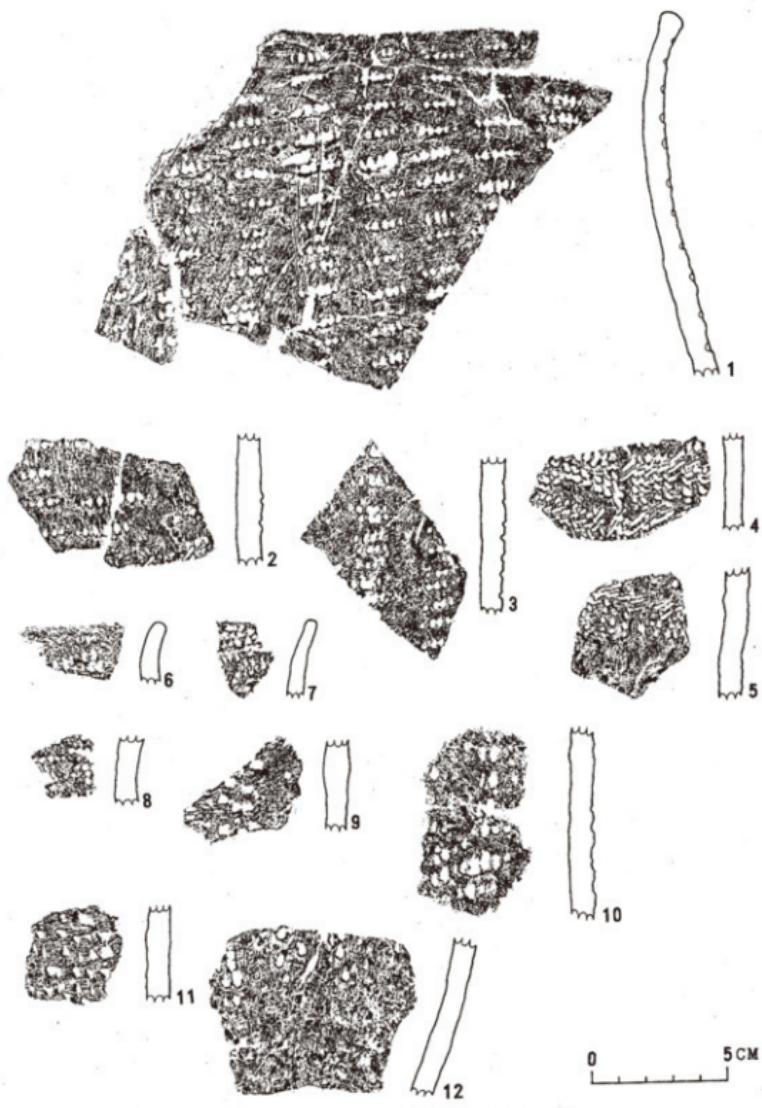
羽状連点文（第17図-17・18、図版16-上）貝殻腹縁を施文具として、羽状の連点を施したものである。この文様をもつ土器は、胎土の粒子が細かで、焼成は普通であり、器面は平滑に調整されている。色調は褐色である。第4層下部層出土の土器の中でも古いタイプと考えられる。

第4層最下部層の土器（爪形文土器）（第25図、図版15-3、図版17）

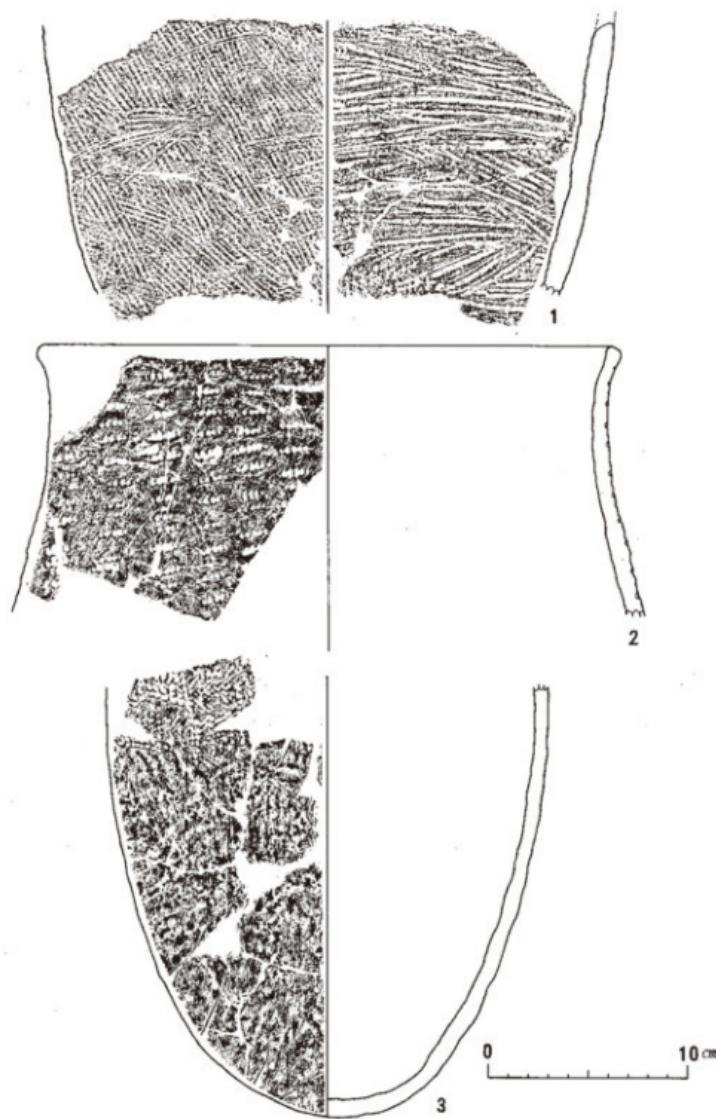
発掘によって2片の爪形文土器を得た。採集土器と合せて考察する。中甫の爪形文土器の特徴は、土器の表裏に相対応して、指頭による押圧痕を有することである（第25図-1断面）。これは輪積みによって土器を製作する際に、粘土の輪を重ねて、これを接着するために指頭によって内外からつまみ、土器を左方向に回転しつつ成形する。この時に生じた成形痕である。この作業によって器面には指圧痕をつらねた溝状のくぼみが、横位にはやや顯著に、縦位には浅く出現する。これらの押圧痕や、隆起帶は、土器製作の過程で必然的に生じたもので、土器に文様を施すような、意図によって生じたものではない。然るに、このような押圧痕や隆起帶が、しばしば文様として取り扱わ



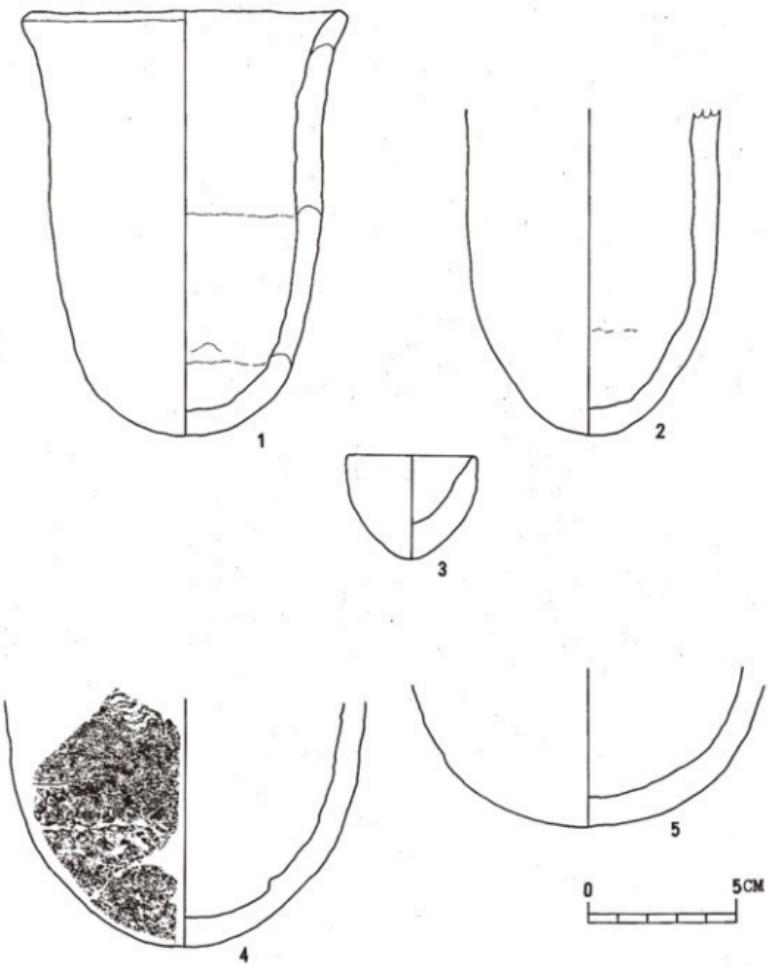
第21図 連点波状文土器



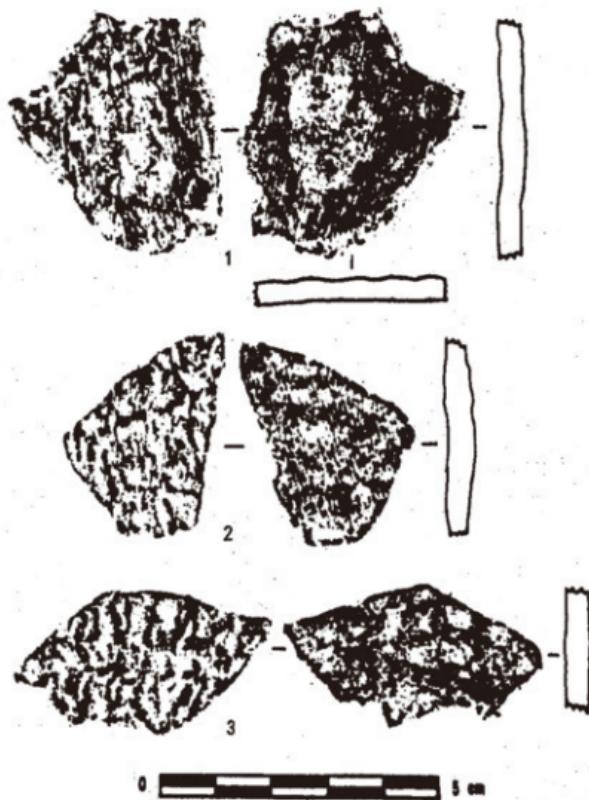
第22図 下層出土の土器(2次)



第23図 貝式土器(1)・連点波状文土器(2・3)(2次)



第24図 下層出土の土器(2次)



第25図 中南遺跡爪形文土器

れていることがあるが、これは概念の混交といわなければならない。

中南洞穴出土の土器に施された爪形文は、前述のような押圧によって成形され、押圧痕・隆起帯が生じた後に、二次的に人の爪を用いて施文されている。文様の幅は5~6mmで小さく、隆起帯・押圧痕の差別なく施され、一次的に指頭の押圧によって、爪形が印されたものでないことを示している。第25図-1、図版17-1の土器は、岸田善光が採集したもので、縦4.5cm、横3.8cm、厚さ3.58~4.8mm、平均4mmの腹部破片である。輪積み接着するための指頭押圧によって、土器表面には、浅く横走する溝と、深く縦走する溝が見られ、溝と溝との間には、縦・横の隆起帯が生じている。一方裏面には、表面の溝に対応して（つまみ接着の場合、拇指とひとさし指が対応する）深く横走する溝と、浅く縦走する溝が見られ（第25図-1）、溝と溝との間には、縦横の隆起帯が生じている。表面に施された爪形文は、弧の凸面を左に向かって、横位に帶状をなし、指頭押圧による

土器成形後に施文したものである。

土器成形の手順を考察すると、先づ粘土で輪を作り、これを重ね、時計の針と逆の方向に廻転し乍ら、右手の拇指を内面に、ひとさし指などを外面にあてがい、接合部分を、内外から押圧（つまんで）して接着させ、左手指は、右手にそえて、縦位の整形を行う。この場合、左手指は器壁の厚さの調節を、内外にあてがった指先の感触によって行なったものと考えられる。爪形文土器の厚さが、平均して4mm位に保たれているのは、このような工作法の過程にもとづくものと考えられ、焼成がきわめて良いのも、器壁の薄いことによるものと思われる。

器面調整にはナデ仕上げが行なわれているが、爪形文には、ナデによるかぶりが見られないから、器面調整を行なった後、爪形を施文したものと見られ、土器の製作過程は、指頭押圧による成形→ナデ仕上げによる器面調整→爪形の施文、の順で行なわれたことがわかる。

第25図-2、図版17-5の土器は、縦3.8mm、横2.8mm、厚さ3~5mm、平均4mm、脇部と見られ、上部 $\frac{2}{3}$ は、煮沸による炭素付着の跡がこっている。

第25図-3、図版17-4の土器は、縦2.65mm、横4.8mm、厚さ3.5mm~4.5mm、平均4mm、底部に近い脇部の破片と見られ、底部から脇部へかけて、外方へ開く部分である。

胎土は粒子が細かで、図版17-1~3の土器は、石英・長石・雲母を含み、図版17-4・5の土器は、石英・雲母・石灰岩粒子を含む。いずれも焼成がよく固く焼きてしまっている。

#### 下部洞穴入口の堆積土から出土した土器 (第19・21~23図、図版7・13~15)

下部洞穴入口の堆積土層は、西壁付近の第4層が流れ込んで再堆積したもので、遺物は豊富に包含されており、出土土器には復元できたもの、または器形の判明したものなどがある。次にこれらについて述べる。

第4層上部層土器に並行する土器 (第19図、図版7-1) 円筒形丸底の土器、推定高さ32cm、口径22cm、尖底に近い丸底で脇が長くやや張り、直口で地域的特色の顕著な器形を示す。南島の土器としては大きいものである。輪積みの跡がみられる。器壁は厚さ9mm内外ある。口縁部から脇部へかけて、鉗状工具を用いて、波状の浅い凹線文を、三重にめぐらしている。胎土は粒子が細かで、石英・雲母・石灰岩粒などを含み、焼成は普通であるが、質は極めてもろい。色調は、表面は黒褐色で、脇部にススの付着がみられる。内面は紅褐色で、底部付近にこげつきの跡が見られる。

第4層下部層出土土器に並行する土器 (第21~23図、図版13・14) 連点波状文土器。第21図・図版13に示した土器に代表される。この土器は、推定高さ37cm、口径19cm、下脇部のやや張り出した、丸底に近い尖底で、直口をなす器形であるが、第23図-2に示すように口縁部の外反するものも見られる。器高が著しく高く、南島の古い時期の一つの特徴をあらわすものといえよう。南島の後半期の土器に比べて、大形である。

成形には輪積み手法が用いられ、器面に接着部分を示す凹凸を見ることができる。胎土は粒子が細かで、僅かであるが石灰岩粒を含んでいる。焼成は普通であるが、質は割合いにもろい。色調は黒褐色であるが、下脇部の張り出した部分に、炭素の付着による黒褐色化が見られ、底部も黒褐色

を呈している。内面は褐色であるが、底部にはこげつきの跡が残っている。器面は平滑でナデ仕上げであるが、下脣部には粘土粒が付着し、これをナデつけて、表面がぶつぶつした状態となっている。

文様は特色あるもので、第4層出土の土器に見られる各文様とともに、南島では初めて見るものであり、本土でも類例を見ないものである。施文具は肋のある貝殻腹縁部で、土器の口縁部から脣部中央のあたりまでは、横に並んだ4～6個を単位とする連点を、縦列、横列をつけて施文し、脣中央よりやや下部までは、連点文の下部に接して、同じ施文具で波状に横引きし、あるいは連点を加えるなどして、複雑な横走する文様を描出するものである。

連点文の一単位内における、刺突された点の数には、最少3点から最大6点まで数えられる。このために、施文具を貝殻とすることに疑惑を生ずることもあるかと思われるが、実際には、貝殻縁が弧形をなすこと、施文時の力の強弱、施文され土器表面の状況（凹凸・隆起など）などによって、同一貝殻施文具によって、連点の数に差異を生じ、凸部では点が大きく深くなり、連点の両端では浅く小さな点となって文様が描かれるなどの現象が起こるのである。したがって施文具は单一の貝殻腹縁部と断じてよい。この土器の属する時期は、第4層下部層出土の土器のうち連点文、波状文を備えていることから、第4層中部層より出土した轟I式の時期よりさかのぼるものと考えられ、南島の土器では、爪形文土器を除くと、最も古い部類に属するものであろう。

#### 無文土器及び底部（第24図、図版15-1・2）

第24図-2～5の土器は下部洞穴の第Ⅴトレンチから出土したもので、焼成や色調等から、第4層出土の土器の時期に属するものと思われる。どの土器群につくか不明であるが、第4層の土器は丸底の器形であろう。3の小形土器は珍らしいものである。第24図-1は、第Ⅳトレンチ第4層の完形に復元できるもので、長脣丸底の無文土器である。横転した状態で出土し、内部に磨製石斧2点を内蔵して検出された。この第4層からは、他にも少量の土器片が出土しているが、特徴のあるものは見られない。しかし、脣部外外面には前述のぶつぶつした状態を示すものが見られ、またこの完形土器の器形自体から判断して一応第4層の土器群に入れておくことにしたい。色調は赭褐色、砂粒を含み焼成はあまり良好でない。輪積みの痕跡が認められる。

#### 採集土器（第26図、図版4-5～11）

岸田善光が採集した土器のうち、第4層出土の土器に並行するものである。第26図-2・7、図版4-6・7の土器は、貝殻腹縁を施文具として、条痕・連点を描くもので、第17図-4の土器に類似し、第4層上部層の時期に該当する。第26図-5、図版4-5の土器は、同じく貝殻腹縁を施文具として、連点を描くもので、第17図-1・3の土器に類似し、同時期と考えられる。

第26図-1・3・4・6・8、図版4-8～11の土器は、第4層上部の連点文土器に類似しているが、連点文の場合は、施文具が貝殻腹縁であるのに対して、ここにあげた土器は、箇を施文具とするもので、文様としては爪形文の部類に属するものである。とくに第26図-6・8、図版4-10・11に示す土器は、鋭利な箇を使用して、爪形文の特徴をよく現わす文様を描出しており、土器内

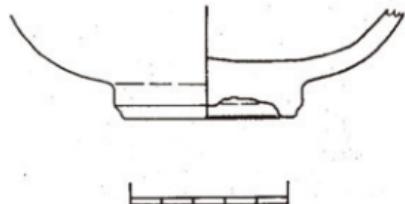


第26図 中南遺跡採集土器(中南洞穴出土)

面には指頭による押圧痕を残すなど、成形の上でも爪形的な要素を備えている。しかし反面、器壁が厚く、文様が縦に配列するなどの、最下層出土の爪形文土器との差異点もあって、爪形文土器との距離も感じさせる。いずれにしても、爪形文土器の系列にあるものとして、注意すべきであろう。

### 第三次の調査による資料

青瓷 (第27図・図版18-1)

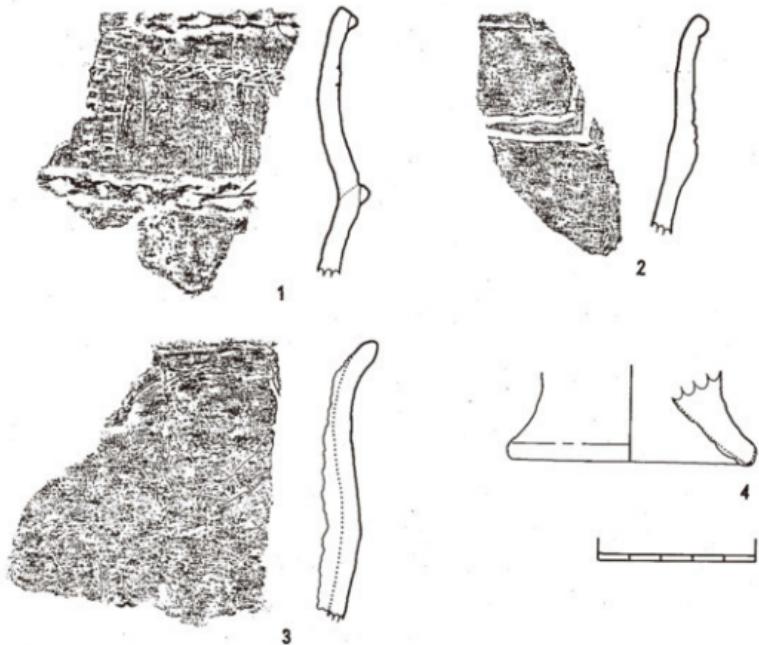


第27図

第27トレンチ4区にある巨大な石灰岩落盤の下にできた空隙の表面から一個出土した青瓷の碗である。胎は灰白色を呈し、削出し高台である。灰味のある透明感の強い釉が薄くかかり、体部の回転ヘラ削痕が見える。釉は高台外面までかかり、一部疊付にまわっている。無文で貫入が見られる。

上層の土器 (第28図・図版18-2~7)

第一次調査の第2・3層の土器に該当するものと思われる。すべて壺形土器である。第28図-1・図版18-2の土器は、胴部と口縁部のつぎ目のあたりで「く」字状に屈曲し、口縁部で再び外反する器形である。口唇部と、「く」字状屈曲部に沿って、糸状の刻目凸帯を貼付し、口縁部には縦位に2条の、鋭利な鋸さきでつき刺した連点文と、口唇部より、横位に鋭く刻まれた2条の刻線の間に、同様な斜線を加えた文様を施している。胎土に白粒子を含み、焼成は悪く、もらい仕上りである。口縁部は縦に刷毛目が見られ、凸帯に沿って、横ナデしている。色調は、外面は煮沸によって黒褐色を呈し、内面は石灰分が付着しているが、剥ぎとった部分では灰色または黒褐色である。土器成形には、輪積みを行ない、その時の指頭による圧痕が器面に残存し、かなりととのった文様・器形をもち乍ら、全体としては稚拙な感じを与える。第28図-2・図版18-3の土器は、基本的には、前者と同様の器形であるが、胴部と口縁部との境の屈曲度が弱く、口縁部は立ちあがり気味である。口唇部直下に1条、屈曲部に沿って2条の浅い沈線をめぐらし、屈曲部の沈線は立ちあがって、縦位の部分をもっている。口唇部には間どおに、上から押圧して、できた刻目が施されている。胎土には白粒子を含み、焼成は良好で、器壁の厚さは前者より僅かに厚く6mmである(前者は5.5

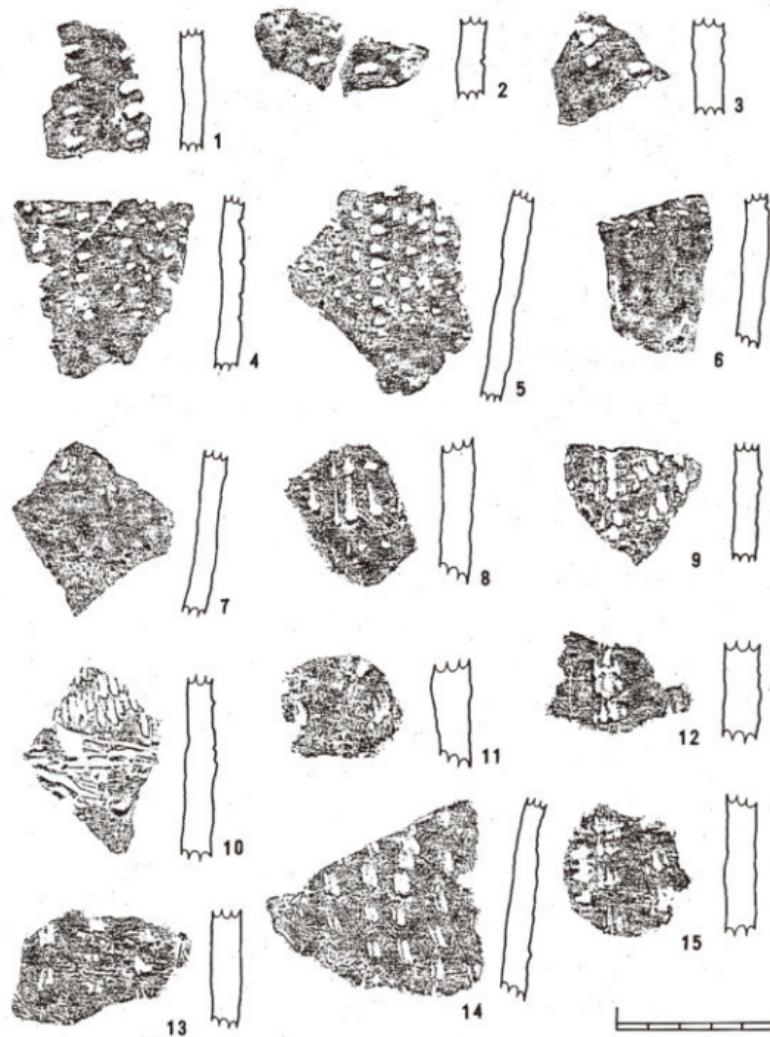


第28図 上層の土器 1:(XIV-1-1), 2:(XIV-11-上層), 3:(XIV-6-大岩に付着), 4:(XIV-8-下)

mm)。色調は内外面ともに黄褐色を呈しているが、外面はややくろずみ、横ナデ仕上げである。第一次調査による、第2・3層出土の土器が出土した、西壁下の第1トレンチに続く、洞穴の西側入口から出土したもので、第一次報告書の第5図-9の土器と同一個体と思われる。

第28図-3・図版18-5~7の土器も壺形土器で、第28図-3と図版18-5・6は同一個体で、図版18-7と共に、大岩に付着し鍾乳石におおわれた状態で出土したものである。波状口縁気味で、口縁部は外反し、脣の張った器形で、南九州の弥生後期の壺形土器を思わせるが、口縁部が波状をなす点で異なっている。しかし採集された弥生土器とも類似し、その影響は否定できない。輪積みによって成形され、器面に凹凸が顕著で、刷毛目仕上げである。胎土に雲母を多く含み、焼成は悪く、もろい。色調は、表面は煮沸によって黒褐色を呈し、内面は緑褐色である。器壁は厚さ7mm強である。図版18-7の土器は前者に比べ、雲母の含有量も少なく、器壁は厚さ8mmあり、焼成はきわめて良好で、堅固に仕上がっており、弥生土器を思わせる土器である。

第28図-4・図版18-7は、壺形土器の底部である。おそらく南九州の弥生後期終末の松木薦式か、中津野式の壺形土器底部と思われ、移入された土器であろう。図版トレンチ8区の下層から出土



下層の土器 I 1・2・7・9・13・14：(XⅠ-2-3), 3～5・10～12・15：(XⅣ-1-4) 6：(XⅣ-8-最下), 8：(XⅣ-6-4層該当)

第29図

しているが、この地点は洞穴東側入口付近であって、洪水時には下部から水が湧き出す地域であるために層序の混交が推測され、この土器の場合も本来上層に位置していたものと想定される。

ここにあげた上層の土器は、第一次調査における、第2・3層出土の土器と同一型式に属するものと思われ、兼久式の系統に属し、弥生後期の時期に該当するものと思われる。

#### 下層の土器 (第29~31図、図版19~20)

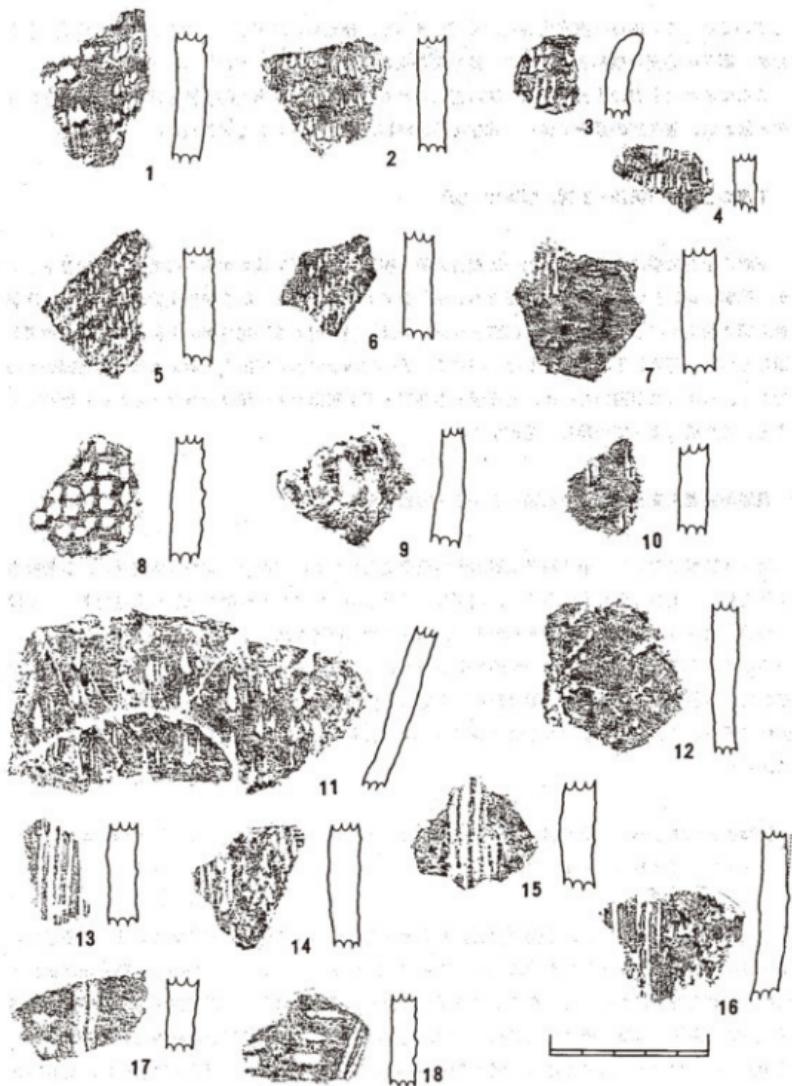
下層の土器に挙げるものは、第一次調査の第4層出土の土器に該当するものであり、第Xトレンチ・第XXトレンチから出土した土器であるが、第Xトレンチでは、第3層出土の土器が、第一次調査の第4層出土の土器と並行し、第XXトレンチでは、洞穴内の遺物包含層の上に、鍾乳石が被覆堆積しており、鍾乳石下の出土土器は、同じく、第一次調査の第4層出土土器に並行する時期のものである。しかし層が薄いために、上部層・中部層・下部層出土の分類はできなかった。したがって、主として文様によって分類し、記述する。

#### 貝縁刺突連点文土器 (第29図-1~3・図版19-1~3)

第一次調査において、第4層上部層出土の連点文としたものである。肋を3条程残した貝殻縁を工具として、土器の面を上から下へ、刺突して、ひっかく様にして連続施文した文様である。文様一単位の大きさは、縦4mm、横8mm内外で、内部に肋の痕跡を押し、下部には粘土の盛り上がりが見られる。文様は縦・横1cm程の間隔で器面をうめるのが普通のようである。土器は胎土の粒子が細かで、白色の粒子を含み、色調は黒褐色を呈し、焼成は普通である。貝縁で器面を調整した後ナデ仕上げをしている。器壁の厚さは8mm内外。第一次調査では、第4層中、上部層の代表的なものであった。

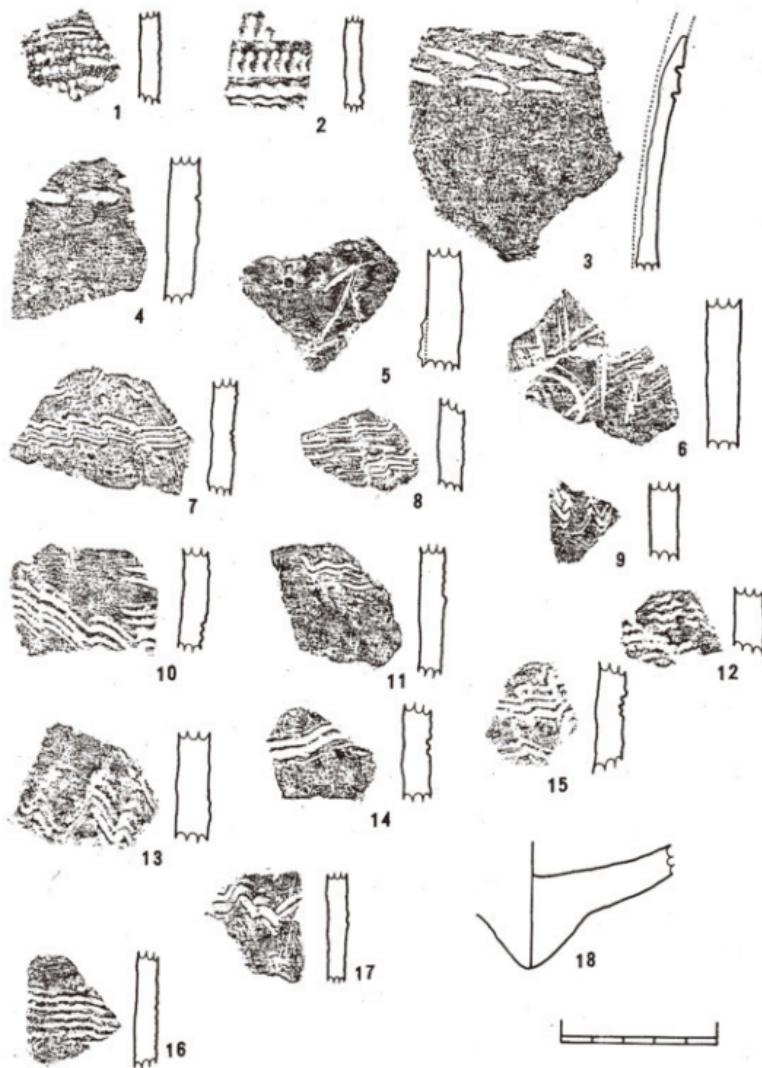
#### 籠描き点刻文土器 (第29図-4~7、第30図-8・11、第31図-3・4、図版19-4~7・図20-8・11、図版21-3・4)

单一の籠状工具を用いて、土器の脛部以上の全表面に点刻文を施すものである。第一次調査では第4層中部層の連点文としたもの一部であるが、工具が2叉となるものを除き、籠の先端がわからない工具を使用したものだけをここに挙げた。胎土は粒子が細かで、白色粒子を僅かに含み、焼成は良好である。器壁の厚さは6.5mm余りで、色調は外面は黒褐色、内面は緑褐色のものが多い。第30図-11、図版20-11の土器は、洞穴内中央部の石灰岩を剥ぎ起した裏面に固着していたもので、長時間をかけて剥ぎ取ったものである。底部に近い部分で、褐色を呈する。底部は丸底で、底部近くまで施文されている。脱い籠を縦に引いて、一見、爪形に近い文様となっており、爪形文土器からの系列にあるものと考えられる。第31図-3・4、図版21-3・4の土器は器壁は厚さ1cmで他



下層の土器Ⅱ 1・10・17・18 : (XIV-2-3), 2・6・9・13・14・18・16 : (XIV-1-4), 7 : (XIV-2-4), 8・12 : (XIV-7-下), 11 : (XIV-3-4), 15 : (XIV-4-4)

第30図



下層の土器Ⅲ 1:(XIV-2-4), 2:(XIV-岩陰表層), 3:(XIV-  
6-4層下部該当), 4-10-13-15:(XIV-9-下層), 5-9-  
11-16:(XIV-1-4), 12:(XIV-7-表層),  
14:(XIV-9-10), 17-18-(XIV-8-下)

第31図

と比べて厚く、胎土は粒子が粗く、雲母を多く含み、焼成も悪く、もろい。太目の籠を横位に使用した文様も特異なものである。採集土器に同種のものが見られた。

**貝縁ひっ搔き文土器** (第29図-8・9・11~15, 第30図-1~7・10, 図版19-8・9・11~15, 図版20-1~7・10)

肋を2個以上残した貝殻縁部を施文具として、土器上半面に、ひっ搔く様に施文したものである。第一次調査の第4層中部層出土の連点文土器の一部で、篦描き点刻文を除いた、残りの土器である。胎土に白粒子を含み、器壁は一般に厚く、7mm~9mm余りあり、焼成は普通である。色調は一般に黄褐色を呈する。文様は、貝縁の肋が2個乃至4個ある施文具を使用して施しており、大半は施文具を水平に保持して施文しているが、第30図-1・5~7・10, 図版20-1・5~7・10の土器は、施文具を斜位に保持して施文している。

**貝縁条痕文土器** (第30図-13~18, 図版20-13~18)

貝殻腹縁を施文具として、条痕文とひっ搔き文または連点文を交互に施文したものである。器壁は厚く8mm~9mmあり、胎土は粒子は細かで、白色粒子を含み、焼成は悪く、器体はもろい。色調は、くすんだ褐色である。

**貝縁波状文土器** (第31図-5~17, 図版21-5~17)

貝殻腹縁によって、横位の波状文を施したものである。器壁は厚さ7~8.5mmあり、胎土は粒子が細かで、白色粒子を僅かに混じ、焼成が良好で、器体の堅固なものと、粉質でもろいものとがある。第31図-5・6, 図版21-5・6の土器は同一個体である。他に比べて文様の刻みが浅く不規則であるが、基本は同じく波状文である。器壁は厚く1cmあり、焼成は良好で、色調は紅褐色である。第31図-12, 図版21-12の土器は、波状文と連点文とが接して施されたもので、第21図、図版13のような連点波状文土器の一部と思われるもので、第31図-1, 図版21-1も同様のものと思われる。

**斜行連点文土器** (第30図-12, 図版20-12)

貝殻腹縁によって、斜行する連点を、間隔をおいて施文したものである。連点文の各点間が深い溝でつながれており、貝縁で施文されたことを示している。第一次調査の第4層下部層の羽状連点文土器(図版16-上)と同種である。12の土器は、腹部に当り、上部へ僅かに外反し、この部分にすすぐ付着して、下半部の赭褐色から黒褐色に変色している。胎土は粒子が細かで、白色粒子を含

み、器壁は厚さ、上部では8mm、下部では7mmと薄くなっている。焼成は普通である。

#### その他の土器 (第31図-2・18、図版21-2・18)

2の土器は小片であるが、器壁が厚さ5mmできわめて薄く、焼成が良好である。輪積で成形され裏面に痕跡をよくのこしている。色調は両面ともに黒褐色を呈する。文様は貝殻腹縁と思われる施文具で施文し、波状文と刺突文との組み合せ文様で、押し引き文との類似点が見られる。胎土は粒子が細かで、白粒子、雲母などを混じていない点にかえって異質的な感じを与える。同一個体かと思われる土器片が、第二次の調査でも発見されている。18の土器は、乳房状の底部で、胎土に白色の粒子を含む。粉質で焼成はあまり良くない。セット関係は不明である。

#### 貝・牙製品

##### 貝製品 (図版22-10・12、図版23-1~5)

貝製品は、第一・三次調査で少量検出されている。出土地点は第I・XIVトレンチに限定される。

貝輪 (図版22-10) 第Iトレンチ4区2層下部から1点出土した。ゴホウラ製貝輪の残欠である。

貝玉 (図版23-1・2) 第XIVトレンチ3・6区4層から1点ずつ出土した。イモガイ類の螺塔部先端を研磨し、穿孔したもので、光沢を有する。ともに1cm程の大きさで、中央部に小孔を穿っている。3・6区の境付近で、後述する牙製品とともに検出された。

三角形状有孔貝製品 (図版23-3~5) いずれも第XIVトレンチ1区3・4層から出土したもので、両面及び側縁部を丁寧に研磨し三角形状に形を整えている。中央部よりやや上位に偏して近接する小孔を二つ穿ち、両面共に真珠光沢を有する。ヤコウ貝を素材とするものであろう。3は、4層より出土し全長1.9cm、最大幅1.1cm、4は3層より出土し全長1.8cm、最大幅1.3cm、5は4層より出土し全長1.9cm、最大幅1.8cmである。4層時期における定形化した垂飾品の一種と考えられる。

穿孔貝 (図版22-12) 第Iトレンチ4区2層出土。ゴホウラ貝の外唇部、腹面の体層部、螺塔の上端部を除去し、肩角の突起を残した背面部中央に一孔を穿いたものである。人骨に沿って、北東35cmの位置に出土した。

##### 牙製品 (図版22-11、図版23-6)

牙製品も第一・三次調査で検出されている。いずれもイノシシの牙を利用したものである。

図版22-11は、第Iトレンチ2区4層中部から出土したもので、牙の先端部、基部ともに欠損しているが、残存部分の一端に小孔を穿ったものである。

図版23-6は、第XIVトレンチ3区4層から前述の貝玉2点と相接して出土したもので、牙の先端部、基部の一部に加工痕が認められ、基部の加工は孔の一部をなすものかもしれない。これらとと

もにもう1点イノシシ牙が出土しているが、こちらは加工痕は認められない。しかし、その出土状況からこれら4点が連結された垂飾品として利用された可能性が十分考えられる。

## 石 器

石器は、三次にわたる調査で比較的多く検出され、それらは石斧（打製・磨製）・磨石・叩石・石皿・砥石・剥片石器等からなる。

打製石斧（図版22-4） 第Iトレンチ3区4層中部より出土した。長さ11.3cm、幅4.2cm、厚さ1.8cm、刃部は片刃の様相を示している。轟式土器と共に伴して検出されたものである。石材は砂岩。

磨製石斧（図版23-10） 第IVトレンチ1区4層から出土したもので、刃部は欠損し現存する長さ6.5cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmと小形である。両面及び両側面ともよく研磨され形が整っている。石材は砂岩である。

局部磨製石斧（図版23-9・11、図版24、図版25-1・2） 本遺跡で最も普遍的にみられる石斧で、大半が砂岩製である。第二次調査で6点、第三次調査で7点の計13点出土している。両面及び側面に打削面や敲打痕を残し、局部的に研磨したものである。

図版23-9は第IIトレンチ3区4層から出土したもので、基部は欠損し現存する長さ4cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmと小形である。両面は大きな打削面を有し、刃部付近は丁寧に砥ぎだされ両刃となる。石材は砂岩である。

図版23-11は第IIトレンチ3区4層から出土したもので、基部及び側面部の一端が欠損し現存する長さ5.3cm、幅2cm、厚さ0.8cmと小形である。両面には打削面を残し、刃部付近と側面部を研磨する。刃部は両面から砥ぎだされているが、片面の砥ぎしが強くやや片刃的な様相を示す。粘板岩製である。

図版24-1は第IVトレンチ4区4層から出土したもので、刃部が欠損し現存する長さ12.6cm、幅6.3cm、厚さ3.4cmである。一部に打削面を残すものの全体的に比較的よく研磨され、一側面には敲打痕を残す。砂岩製である。

図版24-2も第IVトレンチ4区4層から出土したもので、刃部が欠損し現存する長さ14.8cm、幅7.2cm、厚さ3.2cmである。片面には打削面を大きく残し、刃部付近とその側面を研磨する。砂岩製である。

図版24-3は第VIトレンチ2区3層から出土したもので、刃部端が欠損し現存する長さ16.4cm、幅5.9cm、厚さ3cmである。両面には打削面、側面には敲打痕を残すが風化が強い。刃部付近とその両側面を研磨し、刃部は片刃になるものと思われる。砂岩製である。

図版24-4は第IVトレンチ7区1層から出土したもので、完形である。長さ12.3cm、幅4.4cm、厚さ2.7cm、両面ともに自然面を一部に残し、片面の刃部付近を研磨する。砂岩製である。

図版24-5・6は第IVトレンチ4区4層から、土器に内蔵された状況で出土したものである。共

に砂岩製で略完形である。5は、長さ8.5cm、幅4.3cm、厚さ1.7cmと小形で、刃部端を欠損する。片面を局部的に研磨し、他は打割面のままである。6は、長さ1.05cm、幅7.5cm、厚さ2.4cmであり、片面の刃部付近と、他面は刃部から基部付近までを丁寧に研磨し、両側面の刃部付近も研磨する。刃部は両面から砥ぎだされているが、片面の砥ぎだしが強く片刃となる。

図版24-7・8は、大きさや形態がよく類似するもので、共に砂岩製である。7は、第Ⅹトレンチ2区4層最下部から出土したもので、完形であり長さ8.5cm、幅4.7cm、厚さ1.2cmと小形で薄手となる。片面は略全面を研磨し、他面は刃部付近のみを研磨して刃部を砥ぎだし片刃となる。8は、第Ⅹトレンチ6区4層下部から出土し、長さ7.8cm、幅4.6cm、厚さ1.3cmと小形薄手の完形品である。7と同様に、片面は略全面を研磨し、他面は基部及び刃部付近のみを研磨して刃部を砥ぎだし片刃とするものである。

図版25-1は、第Iトレンチの石灰岩に付着して露出していたもので、全体的に風化が強くかつ石灰分が表面に付着して刃部の状況がよく確認できないが、刃部付近にのみ研磨を加えたものようである。長さ1.43cm、幅6.8cm、厚さ2.8cmを測る。砂岩製である。

図版25-2は、第Ⅹトレンチ4区3層から出土したもので、基部付近のみ残存する。長さ8.3cm、幅6.2cm、厚さ2.3cmを測る。砂岩製である。

磨石（図版25-5～11） 局部磨製石斧とともにその出土量は多く、第二・三次調査で計28点出土している。径10cm、厚さ5cm内外のものを主体とし、石材は砂岩、花崗閃綠岩、石英斑岩等からなる。第V・Ⅹトレンチからの出土が多い。

叩石（図版22-5～8） 第Iトレンチ及び第Vトレンチから出土している。石材は砂岩を主に花崗岩を混じえ、火熱を受けたものも認められる。石の大きさは磨石にはば一致し、側面に叩打痕を残すものである。

特殊石器（図版25-4） 第Ⅹトレンチ1区で除去した石灰岩下底部に付着していたもので、およそ4層最上部に該当するものと思われる。刃部を欠損するものの略完形であり、長さ2.65cm、幅4.6cm、厚さ1.6cmと薄手で細長い形状をなし、側面は一方向から剥離調整をなして形を整え、両面を丁寧に研磨するもので、わずかに残る刃基部からみれば、刃部は片面から砥ぎだし片刃としたものと考えられる。南島における類例を知らない。

その他の石器（図版22-1～3・9、図版23-7・8、図版25-3）

図版22-1・2・9は、自然円礫を打ち欠いて一部を剥離調整し刃部を形成したもので、他にも少数例見出すことができる。石材は砂岩を主としている。第I・Ⅹトレンチ4層から出土している。

図版22-3・図版25-3は、自然円礫を打ち欠いて形を整え、刃部を二次調整するもので、第I・Ⅹトレンチ4層から出土しているが数少ない。

図版23-7は、両端が欠損するが三角形状をなし、両面及び側面に荒い研磨を加えるもので側面は平坦となり、現存長さ2.2cm、幅1.1cm、厚さ2mm、薄手で偏平な用途不明石器である。第Iトレンチ1区4層下部から出土している。石材は頁岩である。

図版23-8は、一端が欠損するもので、全面丁寧に研磨され、側面部は片面は幅2mm程、他面は1

程の平坦面を持ち、横断面の最大厚は一边に偏り、縦断面でみれば端部へむけてしだいに厚味を減じるものである。何らかの製品であるとも考えられる。第Xトレンチ2層から出土し、頁岩製である。その他、石皿、砥石の小破片が第IV・Vトレンチから出土している。

### VII 総括

前述において第一次から第三次に渡る調査の報告を述べたのであるが、終りに遺跡の概要をまとめ、問題となることがらについて若干ふれておこう。

中甫洞穴遺跡は、内陸部の鍾乳洞を利用した先史時代の生活跡であり、縄文時代該当の時代から弥生時代該当の時代におよび、極く微量ではあるが歴史時代の痕跡も残し、また埋葬遺構もあり、從来南島に見られなかった長頭型など特徴ある人骨の出土と共に、いくつかの新型式の土器が発見され、南島の先史文化について、若干の新資料が得られたことは、本遺跡調査の最も重要な点である。

#### (1) 遺跡の年代

中甫洞穴遺跡について、まず問題にされる点は、遺跡が成立し存続した年代であろう。

中甫遺跡の年代を考える場合、この遺跡から出土した土器が重要な資料となることはいうまでもない。しかし乍ら、南島の先史時代は、本土の先史時代と異なる、独自の南島先史文化圏を形成したものと考えられ、本土の土器文化の編年には、そのまま当てはめることはできない。一方、南島土器文化の編年は、ようやく着手されたばかりで、時代的欠落が大きく、尺度として使用することが困難である。ことに本遺跡のように、出土した土器が、ほとんど新型式の場合はなおさらである。そこで残された手段としては、本土と共通する遺物を検出し、これを手がかりとして編年をこころみることであろう。次にこの条件を満たす資料として使用できそうなものを挙げると、「爪形文土器」、「轟1式土器」、「弥生後期の土器」がある。それぞれについて検討しよう。

#### 爪形文土器

爪形文土器は、中甫洞穴では最下層出土の土器で、本遺跡で最も古い時期に位置することは明らかであるが、南島における爪形文土器の時期については、南島における最古の土器型式であるとする点では異論はないものの、爪形文土器を出土した、沖縄県渡具知東原遺跡や野国貝塚における、共伴石器に対する見解のちがいによって、南島爪形文土器の時期を、本土と同様に草創期と見る説と、若く見る説との二説がある。今のところ決定的なものはないが、野国貝塚では大量の爪形文土器が出土していることから見て、現地で生産されたものには違いない。一方本土の土器との比較によると、同類と見る外はなく、福岡県門田遺跡出土の爪形文土器との酷似や、全体的に見た爪形文内の型式変化の流れから見て、南島の爪形文土器も、その流れの中に組み込まれているなど、二原的な発生と見ることは困難である。

### 轟I式土器

轟I式土器は、中甫洞穴下層のうち、その中層から出土し、一連の下層土器では、新旧の流れの中で、中頃の時期に当るものと思われる。この土器は移入土器と考えられるものであるが、共伴する在地の土器には、接触による影響は施文具の共通性であろうか。轟I式土器が、鬼界カルデラの爆発（6300年前）以前に九州全域に分布した土器文化であることから、これと共に下層中部層の土器も同時期と見られ、下層のうち下部層から出土した土器は、轟I式土器より古い型式と言える。その代表的なものは「連点波状文土器」（第21図・図版13）で、下層の上部層から出土し、轟I式土器に後続する土器の代表的なものは「簾削り波状文土器」（第19図）である。これらは、貝殻腹縁を施文具とし、丸底で円筒形に近い器形を呈し、敷型式の土器文化を形成するものと思われ、爪型文土器文化と、赤連系土器文化との間に位置するものと考えられる。

### 弥生後期の土器

弥生後期の土器としたのは、南九州弥生後期の壺形土器の底部である。上げ底の器台部分で、中甫洞穴では、上層から兼久式系統の土器と共に出土している。兼久式土器は、河口が面繩第3貝塚（兼久貝塚）出土の土器を標式として命名した土器で、奄美・沖縄に広く分布する土器である。壺形丸底の土器と、深鉢形平底の土器のセットからなり、壺形土器には底部にユナ（オオハマボウ）の葉の圧痕を印するものが多い。弥生土器の影響を受けたものと思われ、他の南島式の土器と異なり、著しく焼成が良好で、出来上りが堅徹である。弥生後期の上げ底の底部と共に關係が知られる遺跡としては、中甫遺跡の他に、面繩第1貝塚Aトレンチ3区3層<sup>10</sup>、スセン當貝塚<sup>11</sup>があり、弥生後期と並行關係にあることがわかる。一方、笠利町長浜金久遺跡では、兼久式土器と土師器の壺形土器との共伴がしられている。このことは兼久式自体にも変化が見られ、時代的な差異の存在も考えられるので、再検討を要するところである。

## （2）南島式土器

南島の土器は、明治以来、昭和初期に至るまで、縄文土器に属するものと考えられていたが、昭和30年の宇宿貝塚の調査を機として、南島独自の先史文化圏が考えられ、その土器を南島式と呼ぶことが提唱された。<sup>12</sup>しかし最近、有文土器を縄文土器と呼ぶこともあって、区別する意味が不明瞭になる恐れも生じて来た。たしかに、本土の縄文土器は、各時期に、しばしば南島に移入され、その影響も多少見られる。たとえば、縄文前期の轟I式・曾畠式・春日式、後期の松山式・市来式・曉朝の黒II式などがあひいて、その度に、影響も若干生じている。しかしそれは長続きせず、しかも南島本来の土器文化は、根本的な変容を受けないまま継続しているのが実状である。

かりに南九州の縄文文化の様相を、比較のために見ると、他から移入した文化は、消滅することなく、在地の文化と並行して、ある期間を経過し、ある時点で、両者が結合して一つの新しい文化が発生し、新生の文化はある期間を継続し、後に再び新たに移入して来た文化と接触し、その影響を受けつつ、今回は消滅して、移入文化にその位置を譲っており、広域の文化圏に包含されるという経過をたどっている。

以上の両文化圏の移入文化に対する、受容のしかたの差異が、文化圏の差異を示すものであろう。中甫における、貝殻腹縁を施文具とした丸底円筒形の土器文化は、初期の南島式土器文化として成立した一群であろう。

### 注

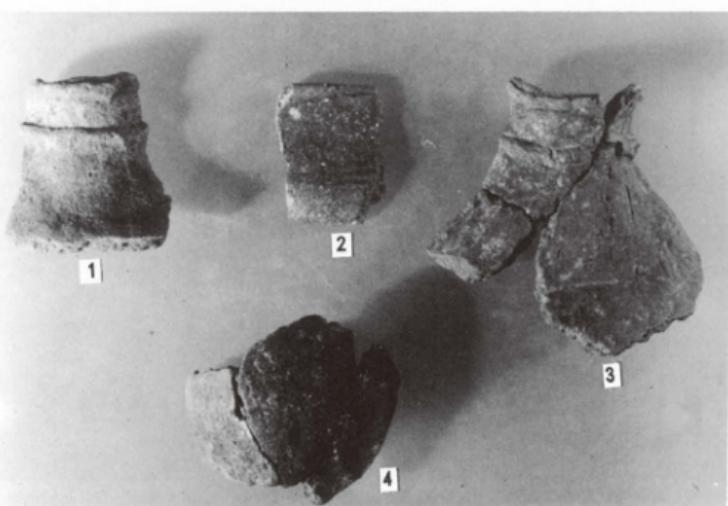
- (1) 河口貞徳他 「中甫洞穴」 鹿児島県考古17号 鹿児島県考古学会 1983
- (2) 知名町教育委員会 「中甫洞穴」 鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書 1984
- (3) 本田道輝 「松木薦遺跡出土の土器について」 鹿児島考古14号 鹿児島県考古学会 1980
- (4) 河口貞徳 「鹿児島県肝属郡大根占町山ノ口遺跡の土器」 弥生式土器集成 2, 日本考古学協会 1961
- (5) 三森定男 「轟諸型式土器」 日本考古学辞典 日本考古学協会編 1962
- (6) 河口貞徳 「鹿児島県片野洞穴」 日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 1967
- (7) 河口貞徳他 「鎌石橋遺跡」 鹿児島考古16号 鹿児島県考古学会 1982
- (8) 鹿児島県教育委員会 「小山遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 1982
- (9) 坂本嘉弘 「第二節 椽文時代の発展」 大分県史先史編 1983
- (10) 宮崎市教育委員会 「内野々第1遺跡」 生目台住宅団地計画区域内埋蔵文化財等調査報告書 1982
- (11) (6)に同じ
- (12) 河口貞徳 「鹿児島県黒川洞穴」 日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 1961
- (13) (1)に同じ
- (14) 伊仙町教育委員会 「面纏第1, 第2貝塚」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1983
- (15) 上村俊雄・本田道輝 「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」 鹿大考古 第2号 1984
- (16) 河口貞徳 「南島式土器」 考古学ジャーナル No.228 1984



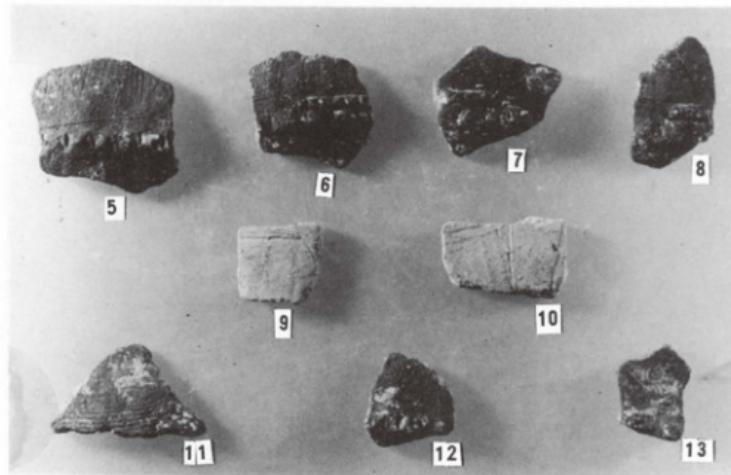
図版 1 中南洞穴全景

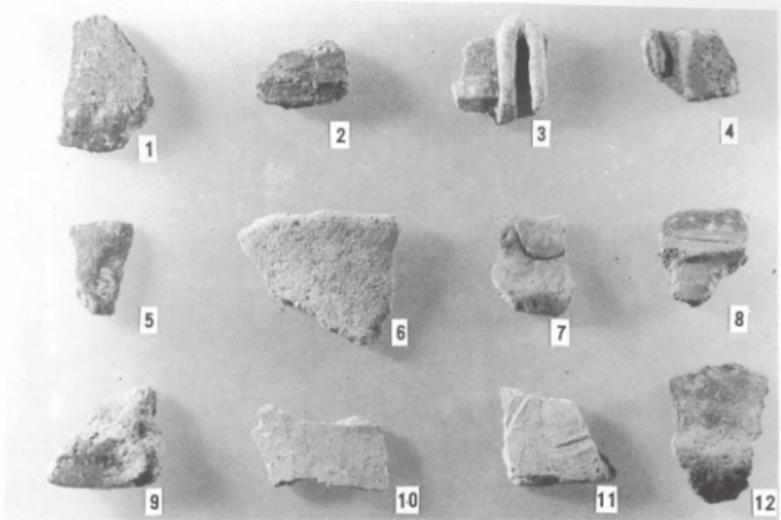


第Ⅲトレンチ調査風景

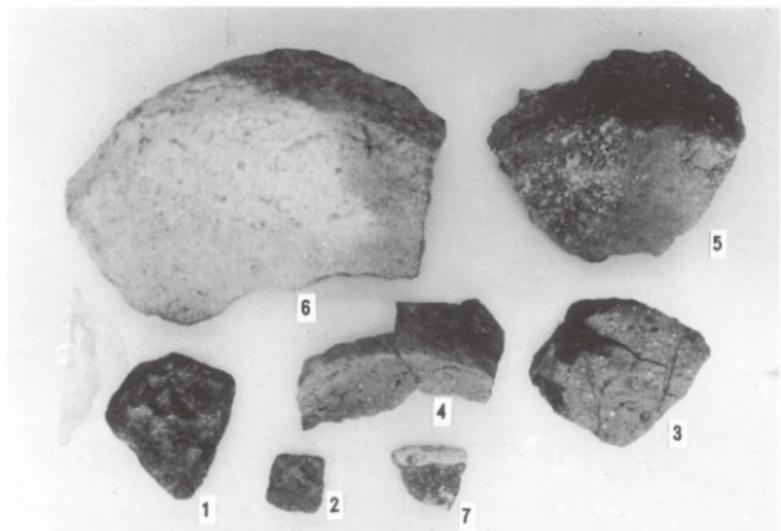


図版2 第2・3層出土土器

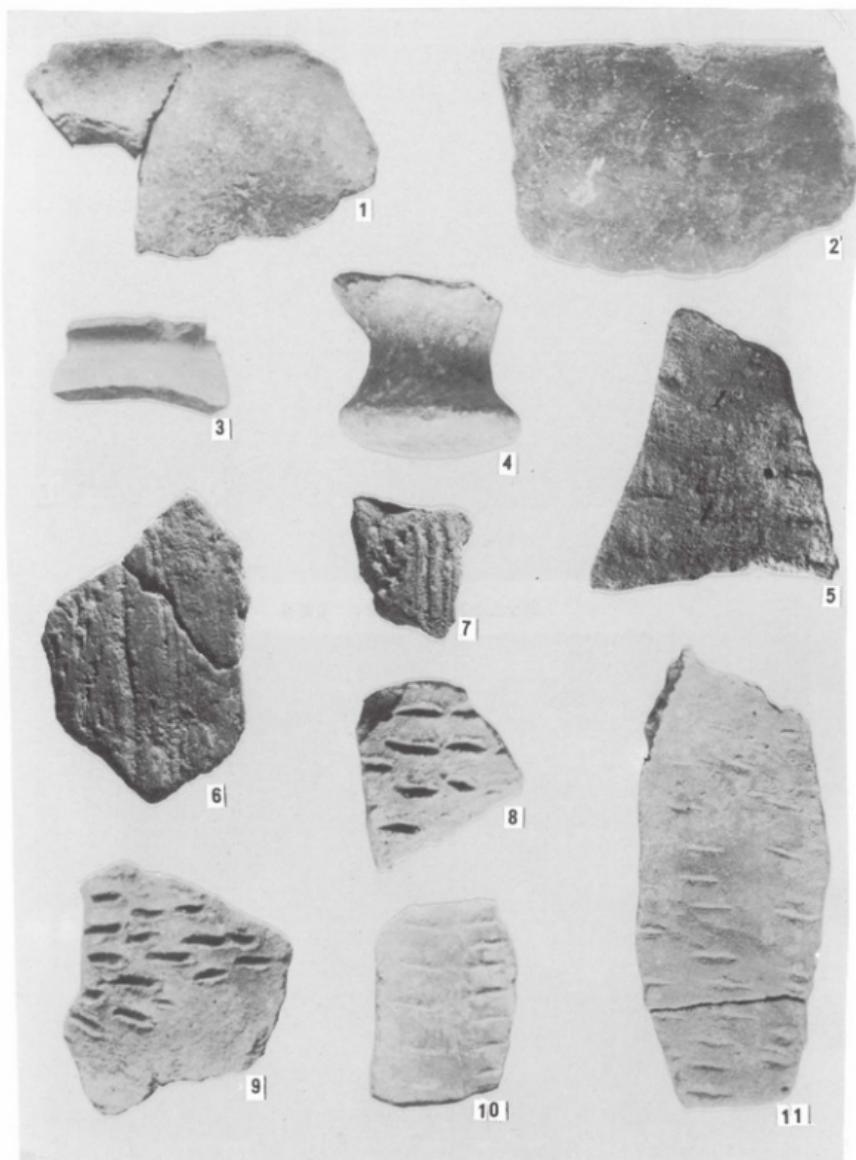




図版3 I-2層 出土土器



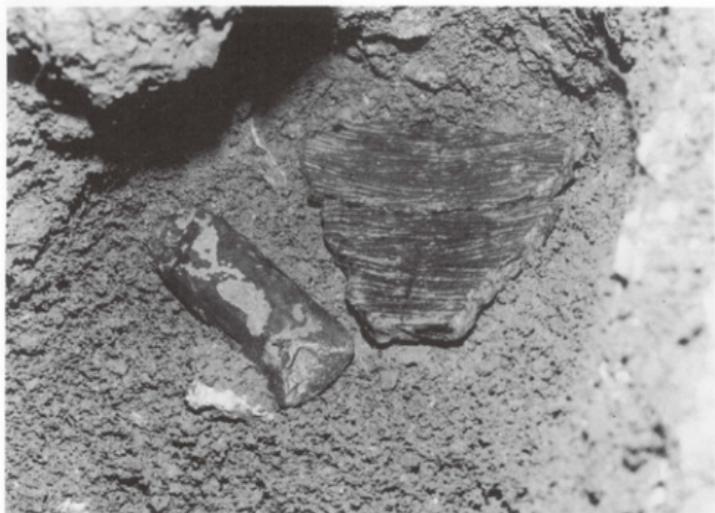
1:Ⅳ-16層, 2:Ⅲ, 3:Ⅲ-8, 4:Ⅳ-16~4層, 5:Ⅳ, 6:Ⅳ-36層



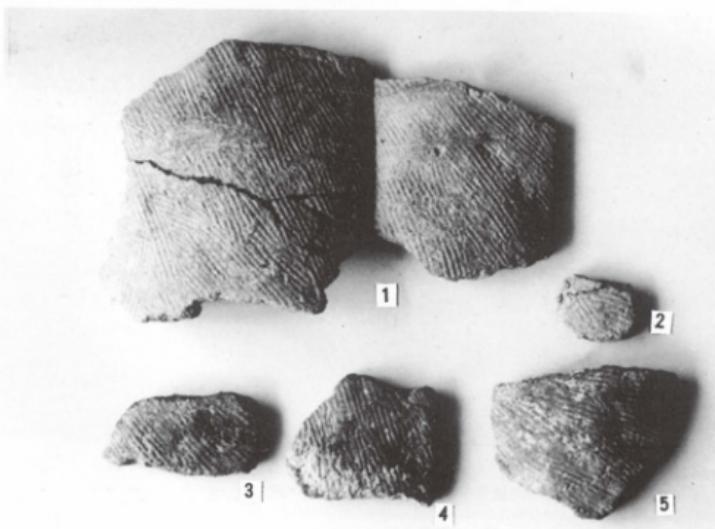
図版4 岸田氏探集中甫遺跡土器



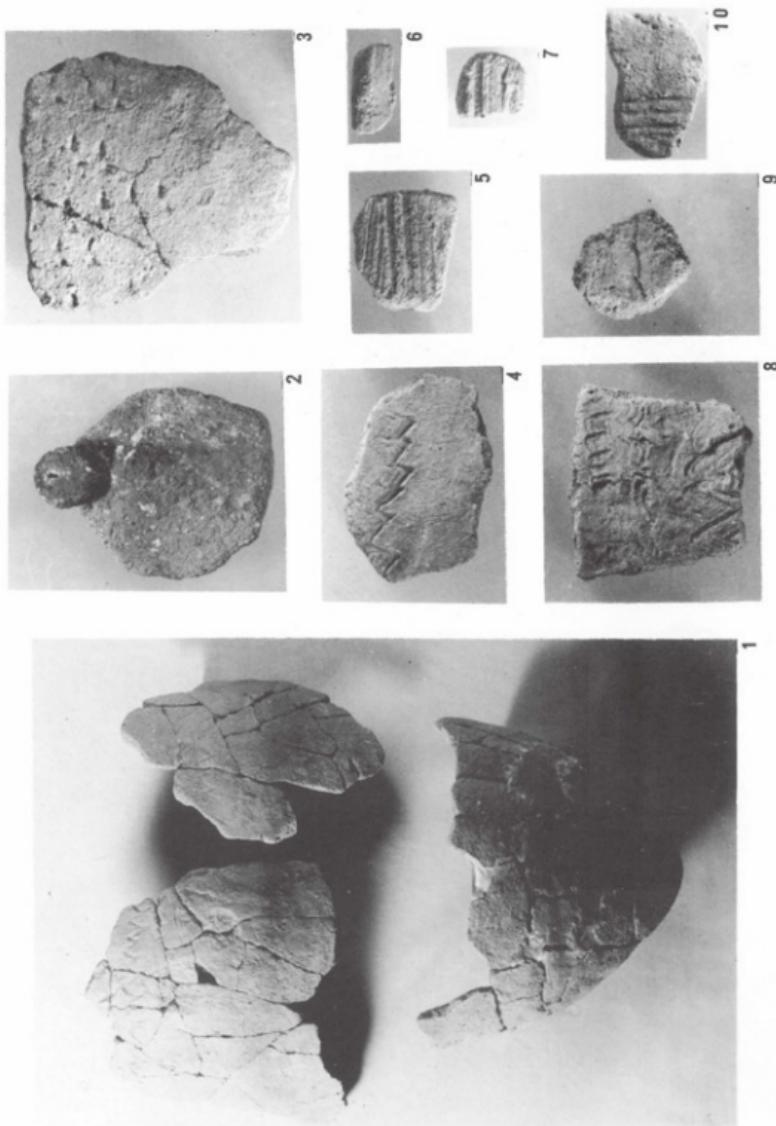
图版5 贽式土器(2区4层中部出土)(1)

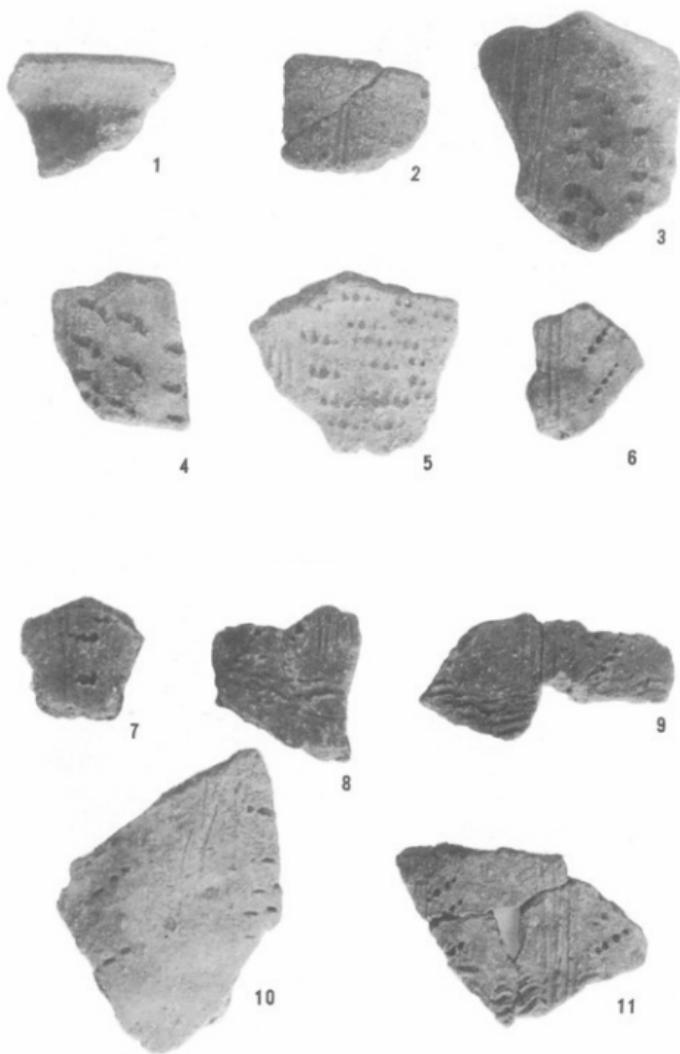


図版6 爰式土器・石斧の出土状況（I・3区4層中部層）

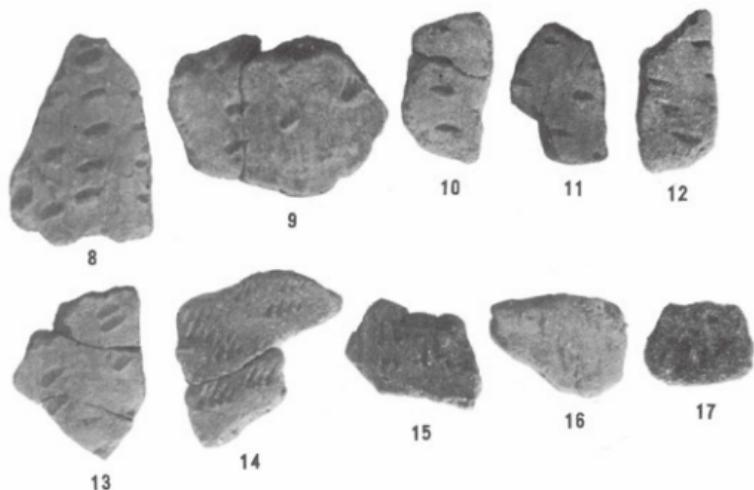


圖版 7 下部洞穴入口堆積出土

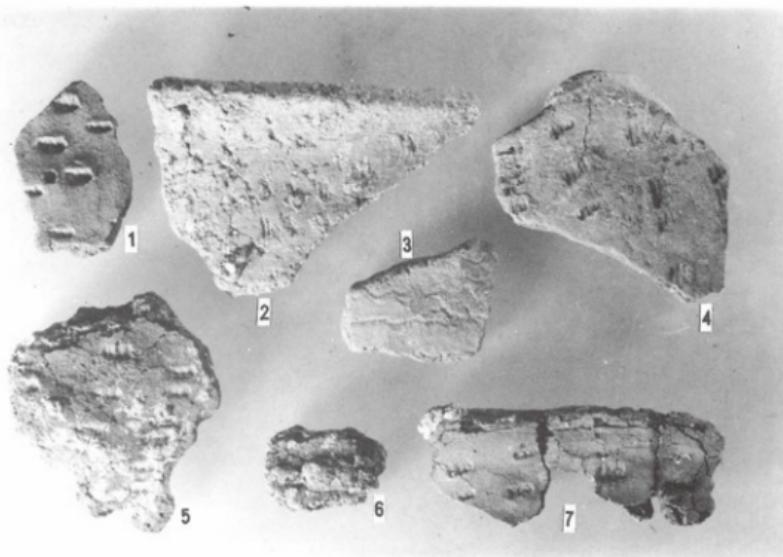




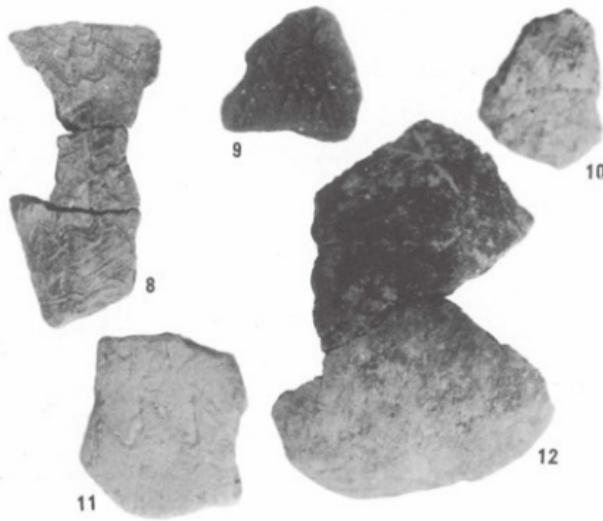
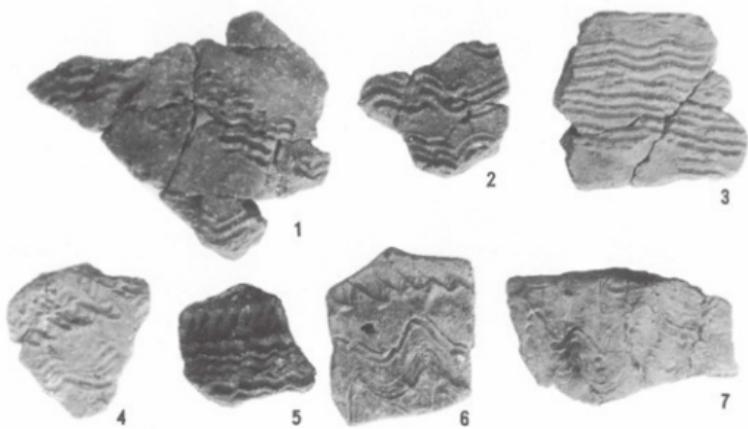
図版8 下層出土の土器(2次)



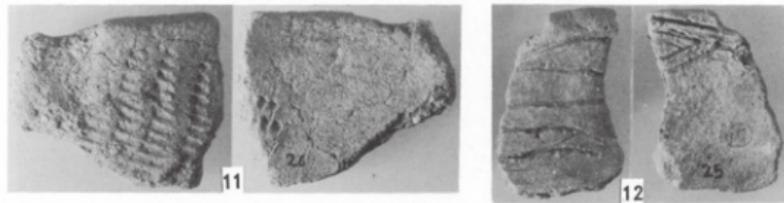
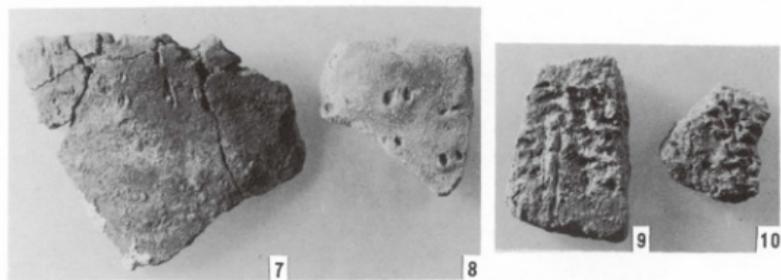
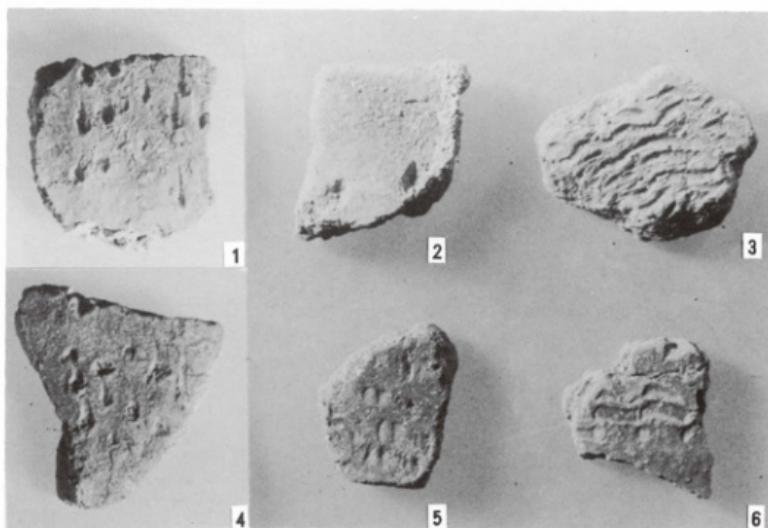
下層出土の土器（2次）



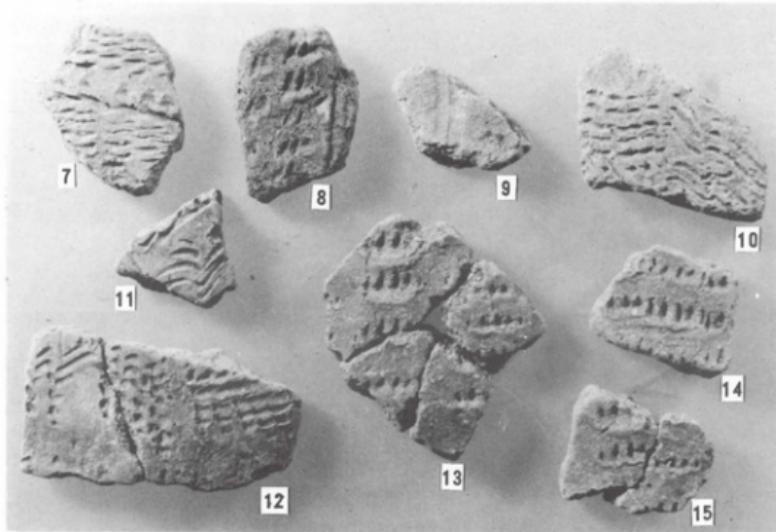
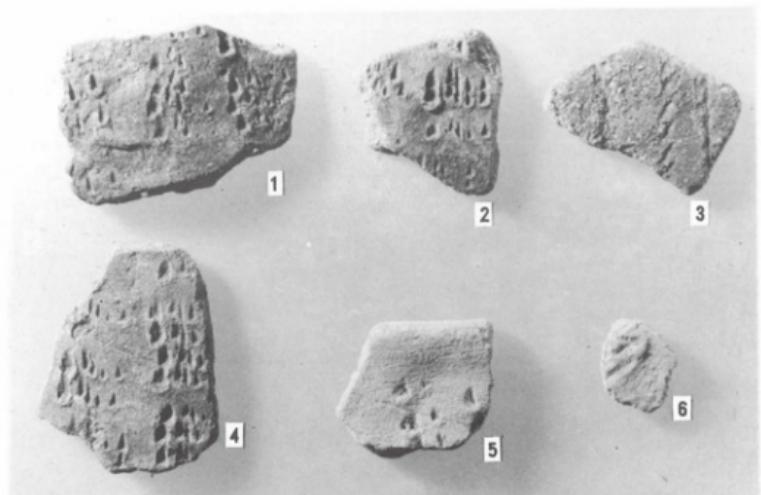
図版9 第4層上部層出土の土器



図版 10 下層出土の土器(2次)



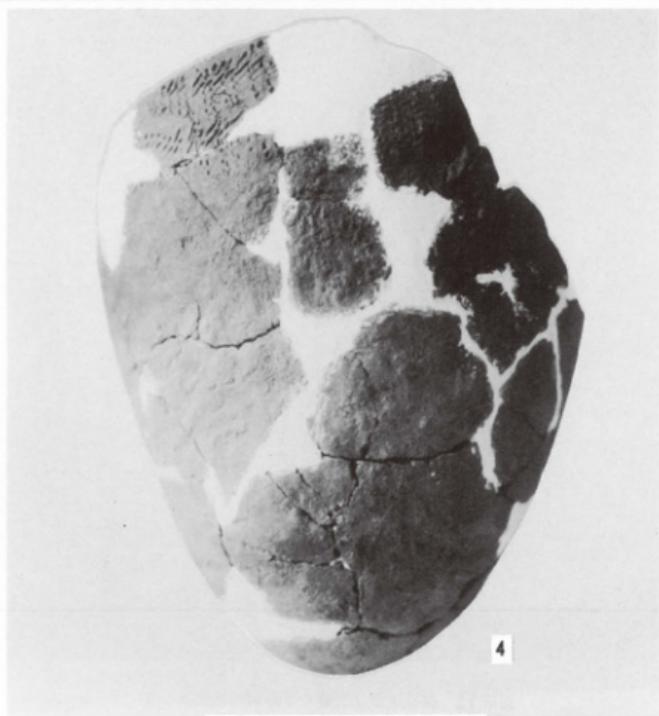
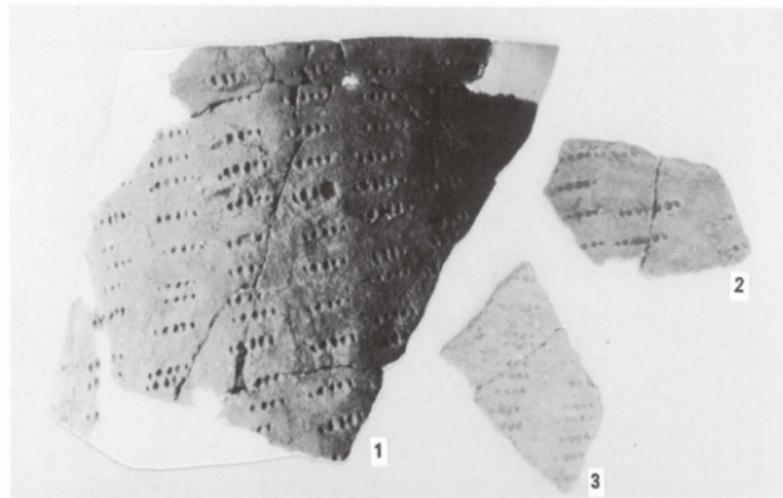
図版11 4層中部出土々器（9は4層上部、10は4層下部）



図版 12 4層下部 出土々器(10~15は下洞入口堆積)



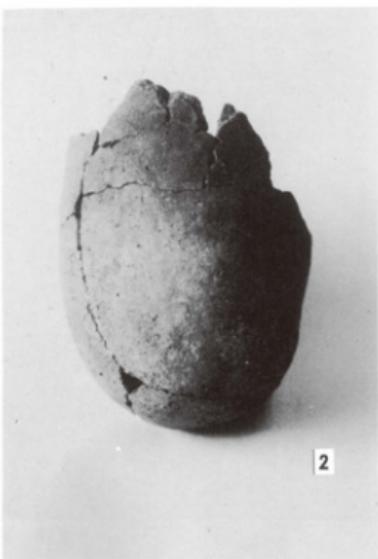
图版 13 連点波状文土器（下部洞穴出土）



圖版 14 連點波狀文土器（2 次）



1

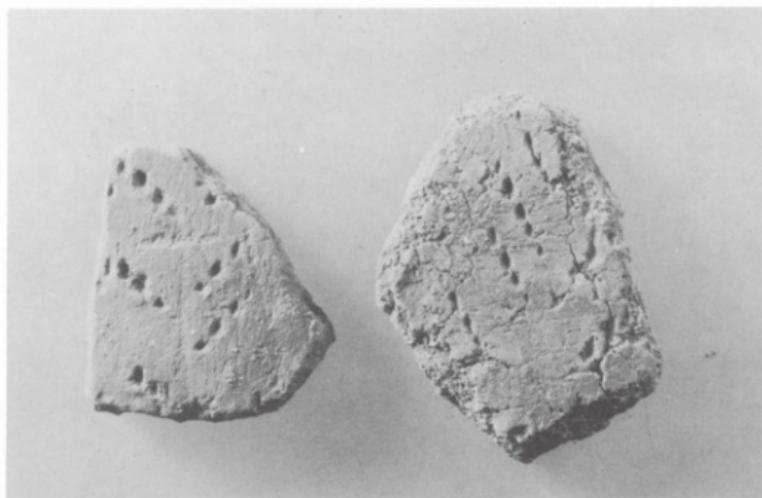


2



3

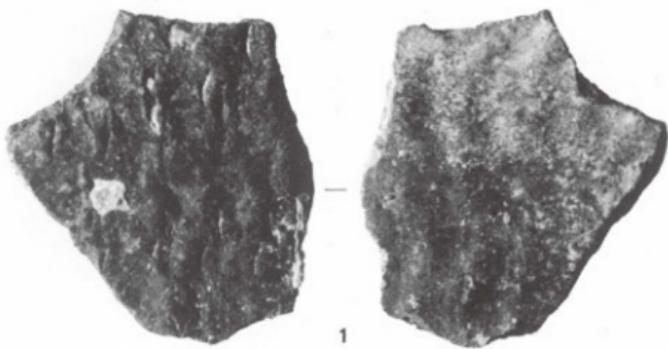
図版 15 下層出土の土器（2次） 3は採集品



図版 16 4層下部出土々器



芽器出土状況(3)



2

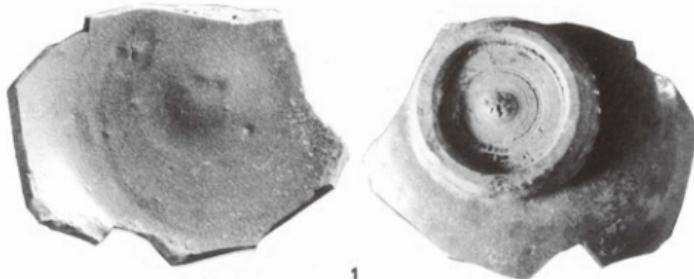
3

1

4

5

图版 17 爪形文土器



1



2

3

4



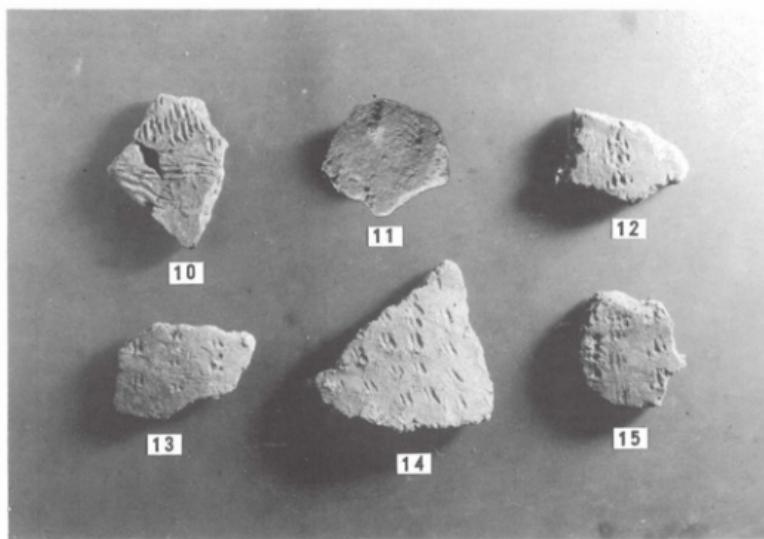
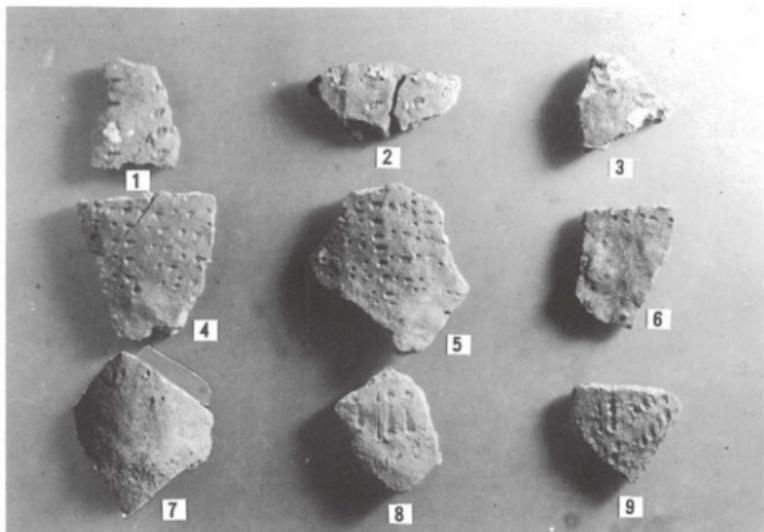
5

6

7

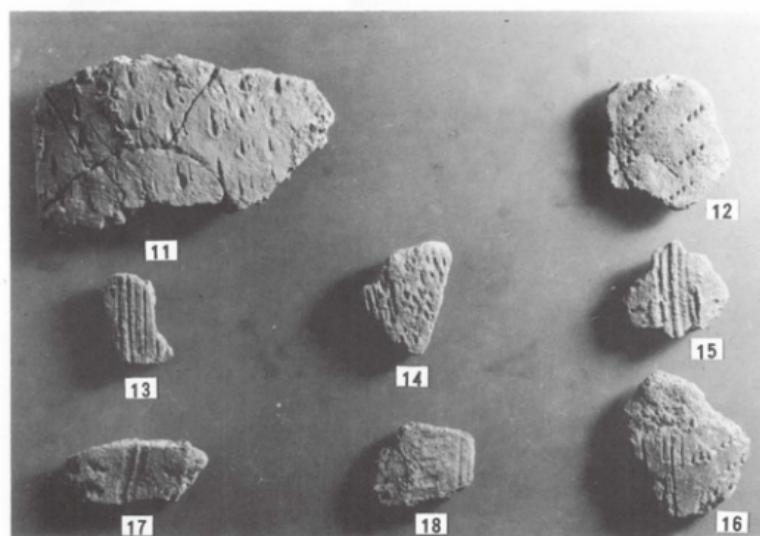
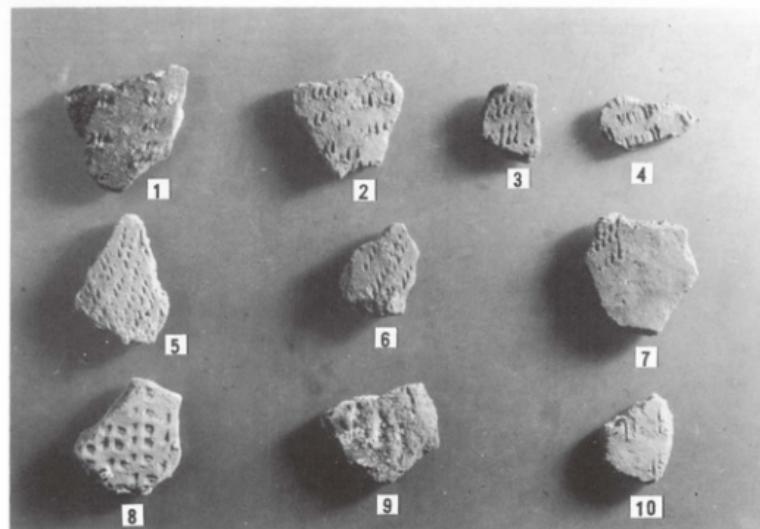
図版 18

1 : (XIV-4-表層), 2 : XIV-1-1), 3 : (XIV-11-上層)  
4 : (XIV-8-下), 5~7 : (XIV-6-大岩に付着)



下層の土器 I 1・2・7・9・13・14:(XⅠ-2-3), 3～5・10～12・15:(XⅣ-1-4)  
6:(XⅣ-8-最下), 8:(XⅣ-6-4層該当)

図版19

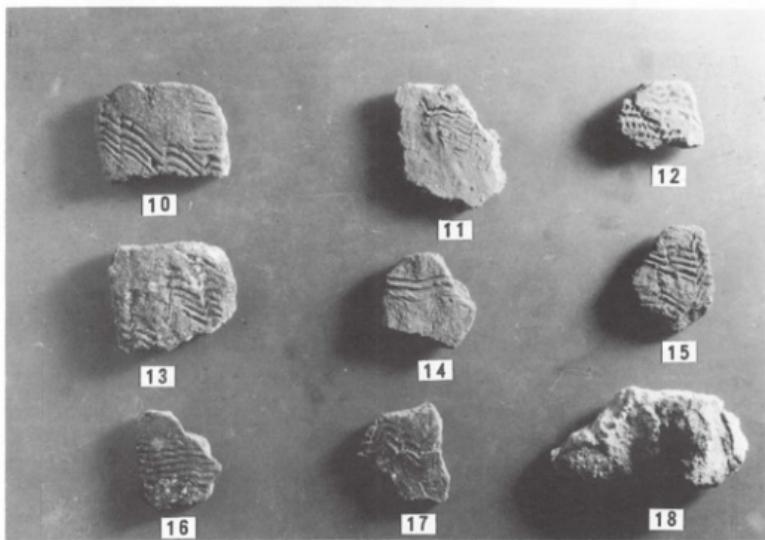
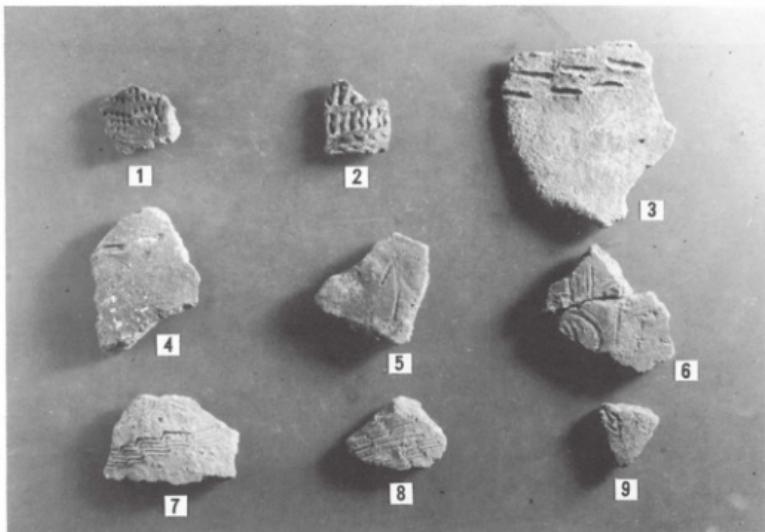


下層の土器Ⅱ 1・10・17・18 : (XⅠ-2-3), 2~6・9・13・14・16 : (XⅣ-1-4)

7 : (XⅣ-2-4), 8・12 : (XⅣ-7-下), 11 : (XⅣ-3-4)

15 : (XⅣ-4-4)

図版20



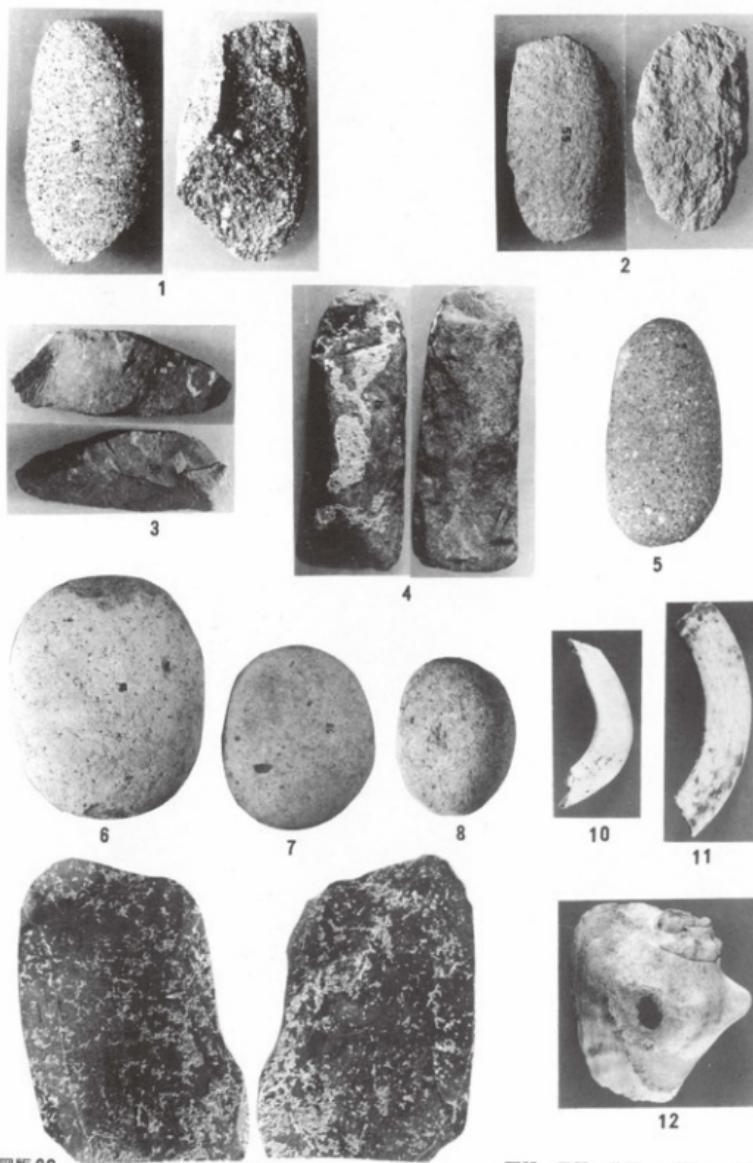
下層の土器Ⅲ 1 : (XIV-2-4), 2 : (XIV-岩陰表層), 3 : (XIV-6-4層

下部該当), 4-10-13-15 : (XIV-9-下層), 5~9-11-16 : (XIV

-1-4), 12 : (XIV-7-表層), 14 : (XIV-9-10)

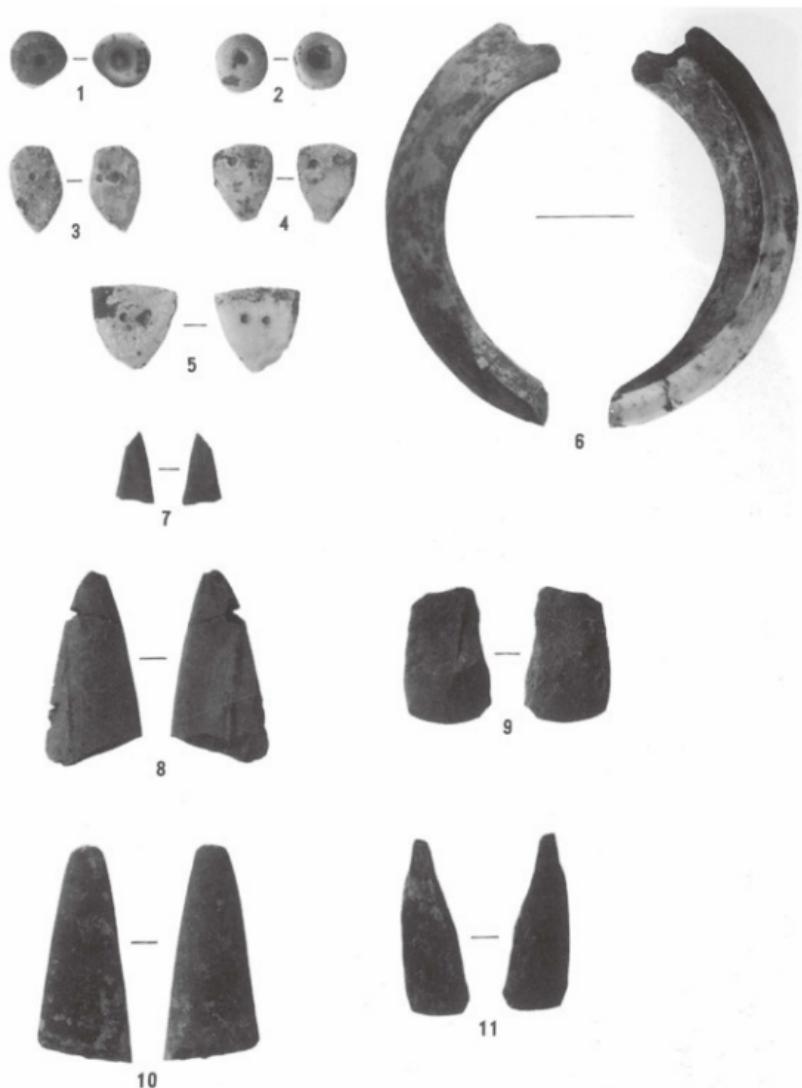
17-18 : (XIV-8-下)

図版21



圖版 22

石器 貝器 芽器 (第一次調查)



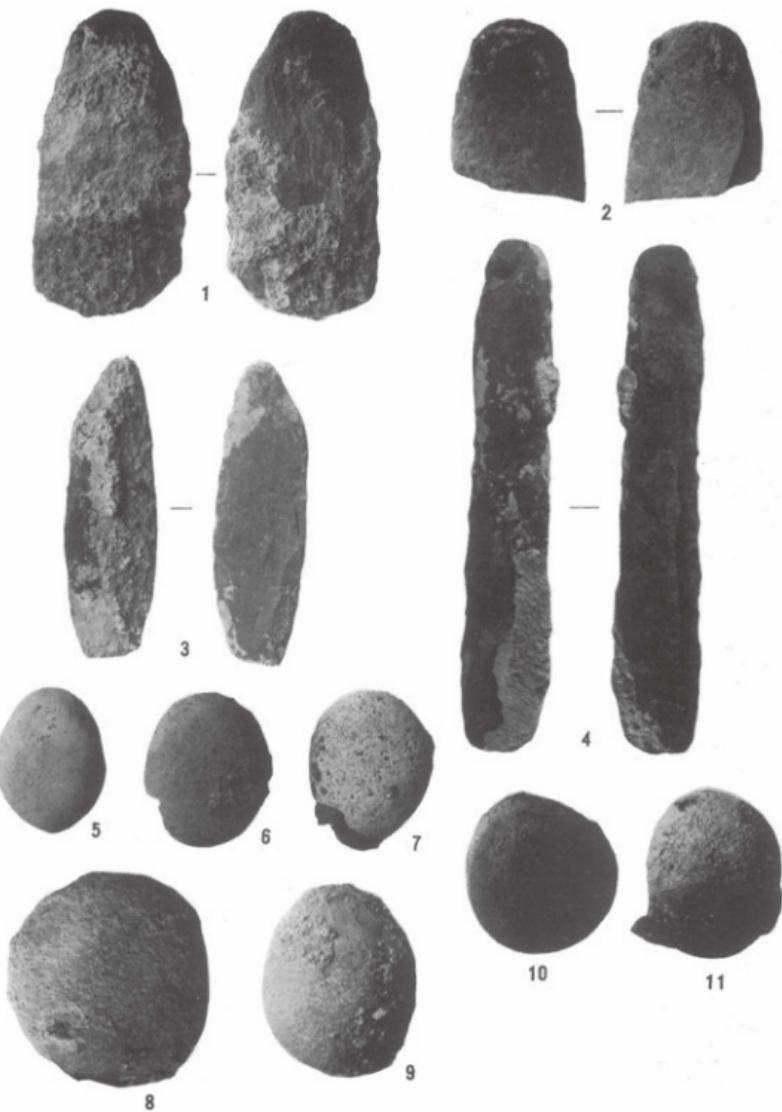
図版 23

貝・芽製品・石器（第二・三次調査）



図版 24

石器（第二・三次調査）



図版 25

石器（第三次調査）



第三次調査メンバー

本田 大山	久本 福永	神川 永	本江 本	中村 マツエ
道輝 傑	晋二	勇二	マツ	
	勝間 西	大山 幹雄	栗田 ツル子	平 汎子
	安起 常元	平 礼子	富江 和代	

# 中甫洞穴出土の動物骨

## —第三次発掘調査—

鹿児島大学農学部家畜解剖学研究室 松 元 光 春

### 1 はじめに

中甫洞穴は鹿児島県知名町（沖永良部島）久志検水窪にあり、河口・本田・瀬戸戸によって昭和57年10月（第一次）に自主発掘が行なわれ、爪形文土器が出土した洞穴遺跡である〔2〕。その後昭和58年9月（第二次）、同59年8月（第三次）に知名町教育委員会が主体となって河口らの指導の下に発掘調査が行なわれ、土器類とともに多量の動物骨も出土した。第一次発掘調査で出土した動物骨についてはすでに西中川ら〔5〕によって報告され、また、第二次分についても概略的に述べられている〔8〕が、今回、第三次発掘調査で出土した動物骨について調査する機会を得たので、ここにその結果の概要をとくに哺乳類を中心に報告する。なお、遺物には石灰分が著しく付着し、中にはそのために数個の骨が塊状に固結していて、石灰分を物理的に剥離すると骨が破損する恐れのあるものもあり、そういう遺物については約10%の蟻酸水溶液中に1～6時間浸漬して脱灰し、骨だけを取り出して同定に供した。

### 2 出土動物種と出土重量

今回調査した自然遺物の総重量は7901.1gで、それらの動物別および区画別出土量は表1に示した。貝類を除くと、哺乳類が全体の94.5%を占め、鳥類1.8%、その他3.7%である。哺乳類は以下の3目5種である。

#### A. 偶蹄目 Artiodactyla

- 1) イノシシ *Sus scrofa* L.
- 2) ブタ *Sus scrofa* var. *domesticus*
- 3) ウシ *Bos taurus* L.

#### B. 薔歯目 Rodentia

- 4) ネズミ類 *Rattus* sp.

#### C. 翼手目 Chiroptera

- 5) コウモリ *Pteropus dasymallus* sp. indet.

これらのうち、イノシシが4159.1g（977骨片）で、全体の89.4%を占めている。なお、動物種や骨の種類を同定出来ないものが145.9gあり、哺乳類全体からみた鑑定率は96.9%である。以下各動物について述べる。なお、骨格別および動物別出土骨片数は表2に示した。

##### 1) イノシシ（図版Iの1-49参照）

イノシシの骨は977個みられ、上腕骨（左19、右28、以下同じ）、大腿骨（20、20）、脛骨（23、28）などが多く、推定固体数は11体以上である。上腕骨の遠位端幅は $33.7 \pm 1.4\text{mm}$  ( $n = 5$ ) で、現生のリュウキュウイノシシと同じ大きさであり、また、頭蓋骨や下頬骨の形態的特徴もリュウキュ

ウイノシのそれに類似している。骨端線の閉鎖していない幼若齢個体の骨もかなりみられた。頭蓋や長骨は割断されており、一部の骨は焼かれている。加工痕は<sup>XIV</sup>3・4出土の左下顎大歯（雄）の先端と歯根部にみられたのみである。

2) ブタ（図版Ⅰの50参照）

ブタは肋骨2個が出土しているが、骨質が新しく、また、第一層から出土し、骨の一端には鋸によるものと思われる切断痕がみられることから、新しい時期のものと思われる。

3) ウシ（図版Ⅱの1参照）

ウシはX・ロ・1から脳頭蓋の部位が出土している。背面には左前頭骨が角突起基部とともに保存されている。角突起の形状からこのウシは雌と推定され、後頭頸幅92.3mm、大孔幅×高45.5×42.5mmで現代和牛の雌と同程度の大きさである。

4) ネズミ（図版Ⅱの2-15参照）

ネズミの骨は190個とイノシシに次いで多く出土し、大腿骨(15, 22)、寛骨(16, 8)、脛骨(12, 9)などが多く、15個体以上のものと推定される。X・1・3, X・2・3からは明らかに同一個体のものと推定される後肢骨、全身骨格がそれぞれ出土している。上顎臼歯の形状からドブネズミに比較されるものもあるが、四肢骨ではこれよりも大きい骨もみられる。また、一部の骨は焼かれている。

5) コウモリ（図版Ⅱの16-17参照）

コウモリは肩甲骨、中手骨の2個が出土し、現生のエラブオオコウモリと同じ大きさを有している。

以上、哺乳類の骨について述べたが、区画別にみると（表1）、<sup>XIV</sup>トレンチが最も多く、各区画とも第4層あるいは下層からの出土が多い。骨格別では（表2）、胸骨34.4%、後肢骨28.8%、前肢骨20.2%、頭蓋16.5%であり、とくに椎骨が多く出土している。

鳥類の骨（図版Ⅱの18-34参照）は187個と非常に多くみられる。種別では、キジバトやこれより大きいハト科の骨が大部分を占め、他にヒヨドリ、バン、サギ科の一種などの骨もみられる。骨格別では（表2）、上腕骨(22, 26)、尺骨(17, 15)、烏口骨(9, 15)など前肢骨が最も多く全体の71.7%を占めている。

爬虫類はウミガメで、腹甲の骨片がみられる。

甲殻類（図版Ⅱの35参照）は、種の同定は出来ないが、大型のカニの鉗脚が6個である。

貝類の同定は専門家に依頼する必要があるが、ヤコウガイ、シャコガイ、ハチジョウダカラ、マイマイ類などがみられる。

魚類の骨は今回の調査では全くみられない。

なお、これらの遺物に混じて、歯、上腕骨、腓骨など人骨が13点みられる。出土地点はX・1・2、<sup>XIV</sup>トレンチの1・1, 11-上層, 11-下層で、これらは第一次および第二次の発掘調査で出土した人骨の一部であろうと思われる。

### 3 考 察

中甫洞穴出土の動物骨については、西中川ら[5]が昭和57年の発掘調査で出土したものについて詳細に、第二次分を概略的[8]にそれぞれ報告している。それによると、貝類を除く動物種はイノシシ、ネズミ、鳥類、カニ類、魚類で、イノシシが大部分を占めているという。今回の調査から新たにブタ、ウシ、コウモリ、カメ類が追加されたが、貝類を除いた総出土量の87.2%はイノシシで占められており、イノシシが主要な狩猟獣であったことに変わりはないようである。また、ネズミも多量に出土しているが、一部の骨は焼かれていることから、ネズミも動物性蛋白源として食用に供されていたことがうかがわれる。コウモリは鹿児島県内では同じ沖永良部島の神野貝塚から報告されているのみである[7]。ウシは現代和牛の雌と同じ大きさであり、また、表層から出土していることなどから改良後のウシである可能性が高い。鳥類の骨が非常に多量に出土しているが、これは著者らがこれまで調査した本県の遺跡の中では最大の数を誇っており、遺跡の環境や哺乳動物の少ないことを考え合わせれば、鳥類も非常に重要な食料源になっていたと思われる。骨格別では、浅胸筋、深胸筋といった強大な筋の付着している部位の骨、即ち、前肢骨や胸骨が多いことも注目されよう。

中甫洞穴出土の哺乳動物相と同じ洞穴遺跡である県本土の黒川洞穴のもの[4]と比較すると、種類が極端に少なく、その主体になっているイノシシもリュウキュウイノシシに比較される小型のイノシシであり、このことは奄美諸島の遺跡[1, 3, 6, 7]からシカの出土が報告されていないことと合わせてこの地方の特徴となっている。しかし、今回の調査では、このような貧弱な動物相を補うように鳥類の骨が多量に出土しており、このことも本遺跡の特色の1つになっている。

### 4 ま と め

中甫洞穴から出土した動物骨について同定を行なった。

- (1) 自然遺物の総重量は7901.6gで、哺乳類4504.9g、鳥類85.0g、爬虫類(ウミガメ)2.1g、甲殻類(カニ)31.1g、貝類3132.6gであった。
- (2) 哺乳類はイノシシ、ブタ、ウシ、ネズミ、コウモリで、イノシシが大部分を占めていた。
- (3) 鳥類の骨が多量(187骨片)にみられた。

謝辞：稿を終えるに当たり、本研究の機会を与えて頂いた知名町教育委員会ならびに河口貞徳、本田道輝、瀬戸口望の諸先生に感謝いたします。

### 参 考 文 献

- [1] 笠利町教育委員会：宇宿貝塚、笠利町文化財調査報告書、P. 95-96 (1979)
- [2] 河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望：中甫洞穴、鹿児島考古、17、P. 1-40 (1983)
- [3] 西中川駿：面龜貝塚出土の動物骨について、伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)、P. 43-50、(1983)
- [4] 同上 他：古代遺跡出土の動物骨に関する研究  
IV. 鹿児島県黒川洞穴出土骨の概要、鹿大農学報告、33、P. 147-157 (1983)

- [5] 西中川駿他：中甫洞穴出土の動物骨，鹿児島考古，17，P.41-44（1983）
- [6] 西中川駿：大田布貝塚出土の動物骨について，伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)，P.74-81（1984）
- [7] 同上：神野貝塚出土の自然遺物，南西諸島の先史時代における考古学的基礎研究，P.45-50（1984）
- [8] 知名町教育委員会：中甫洞穴，知名町埋蔵文化財発掘調査報告書，P.1-58（1984）

#### 図版の説明

##### 図版 I 1-49：イノシシ

##### 50：ブタ

1. 頭蓋（前頭骨，頭頂骨，後頭骨） 2. 頭蓋（側頭骨） 3. 上顎骨（左） 4. 上顎犬齒（左，雄） 5. 下顎骨（雌） 6. 下顎骨（右） 7. 下顎骨（右，幼獣） 8. 下顎犬齒（左，雄） 9. 下顎犬齒（右，雄） 10. 環椎 11. 軸椎 12. 第一胸椎 13. 第二胸椎 14. 第十四胸椎 15. 第五腰椎 16. 仙骨 17. 仙骨 18. 第四肋骨（左） 19. 脊骨柄 20. 第一胸骨体 21. 肩甲骨（左） 22. 肩甲骨（右） 23. 上腕骨（左） 24. 上腕骨（右） 25. 桡骨（左） 26. 尺骨（右） 27. 前腕骨（右） 28. 第二中手骨（右） 29. 第三中手骨（左） 30. 第四中手骨（右） 31. 第五中手骨（左） 32. 第三指基節骨（右） 33. 第三指中節骨（右） 34. 第三指末節骨（左） 35. 寛骨（左） 36. 大腿骨（左） 37. 大腿骨（左） 38. 腰骨（左） 39. 腰骨（右） 40. 腰骨（右） 41. 膝骨（右） 42. 膝蓋骨（右） 43. 跗骨（左） 44. 距骨（左） 45. 第三中足骨（左） 46. 第五中足骨（左） 47. 第三趾基節骨（左） 48. 第四趾中節骨（左） 49. 第四趾末節骨（左） 50. 第六肋骨（左）

##### 図版 II 1：ウシ

##### 2-15：ネズミ

##### 16-17：コウモリ

18-34：鳥類（18-30：ハト科，31：ヒヨドリ，32：バン，33-34：サギ科？）

##### 35：カニ

1. 頭蓋（a：背面，b：後面） 2. 頭蓋 3. 下顎骨（右） 4. 下顎切歯（左） 5. 仙骨 6. 腰椎 7. 肋骨（左） 8. 上腕骨（左） 9. 桡骨（左） 10. 尺骨（左） 11. 寛骨（右） 12. 大腿骨（右） 13. 腰骨（左） 14. 距骨（左） 15. 末節骨 16. 肩甲骨（左） 17. 中手骨 18. 胸骨 19. 胸骨 20. 複合仙骨 21. 肩甲骨（右） 22. 鳥口骨（右） 23. 上腕骨（左） 24. 上腕骨（右） 25. 尺骨（右） 26. 桡骨（右） 27. 桡骨（右） 28. 中手骨（右） 29. 大腿骨（左） 30. 中足骨（左） 31. 鳥口骨（左） 32. 腰骨（右） 33. 大腿骨（左） 34. 中足骨（左） 35. 鋼脚

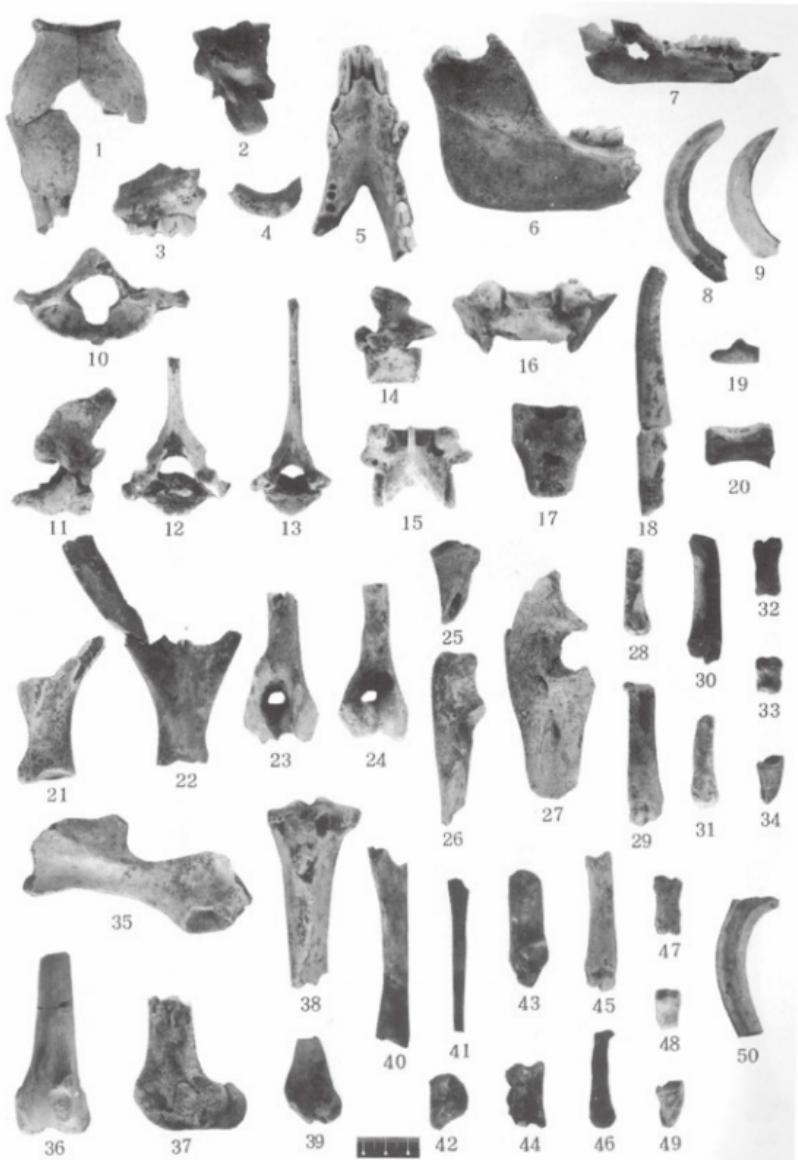
表1 動物別および区画別出土肩量

トレンチ	区画	層	哺 乳 類					鳥	※1 爬虫類	※2 殻類	貝類	不明骨	区出土 画骨 別量		
			イノシシ	ブタ	ウシ	ネズミ	コウモリ								
K		1		9.0 (2)		0.7 (1)		4.5 (11)		4.7 (2)			18.9		
		2				3.1 (7)		0.4 (1)					3.5		
X	口	1		2695 (1)									2695		
XIV	1	2	224 (1)									0.1	22.5		
		3	22.5 (3)		6.0 (25)							0.1	28.6		
		再堆積	2.1 (1)										2.1		
	2	3	311.0 (29)		9.7 (41)					2088	28	5323			
		5									35.0		35.0		
	1	1	51.9 (6)		0.4 (1)					77.8	0.8	130.9			
XV	4	4	782.6 (236)		17.3 (4.9)		13.6 (3.2)			258.0	45.7	1117.2			
		2	345.8 (127)		4.9 (1.6)	0.1 (1)	1.7 (5)			1884	12.3	553.2			
	3	4	95.9 (21)		1.0 (2)		0.2 (2)		9.7 (3)	69.0	6.9	182.7			
		1	129.9 (23)		1.9 (9)					363.9	3.7	499.4			
	4	3	121.2 (57)		0.3 (7)		0.1 (2)			57.2	7.1	185.9			
		4	228.9 (48)		3.3 (8)		5.5 (1.0)			1195	7.0	364.2			
		6	126.0 (33)				7.6 (2.0)			18.6	2.3	154.5			
	7	1	117.7 (15)				0.3 (2)			15.7	4.1	137.8			
		2	45.8 (18)				0.4 (1)			14.8	0.2	61.2			
		下	385.2 (111)		4.0 (6)		13.2 (2.8)		1.7 (1)	226.1	10.5	640.7			
	8	下	678.9 (100)		8.8 (6)		11.6 (2.3)		4.0 (1)	123.4	14.0	840.7			
		最下	231 (5)							100	0.8	33.9			
		9	350.8 (55)		4.2 (7)		6.1 (1.1)		5.9 (2)	329.8	4.6	701.4			
	9, 10		38.7 (1.3)		0.2 (1)		2.9 (6)			29.0	0.9	71.7			
		上	11.9 (8)		0.6 (2)		3.0 (9)		2.0 (5)		0.4	8.2	26.1		
		下	60.3 (11)		0.4 (1)	0.2 (1)	8.4 (1.1)	0.1 (1)		342.8	0.6	412.8			
	岩陰表層		152.8 (46)				5.5 (1.3)		5.1 (2)	545.7	13.2	722.3			
不明			53.7 (10)		0.2 (1)					98.7		152.6			
動物別出土骨量			4159.1 (977)	9.0 (2)	2695 (1)	67.0 (190)	0.3 (2)	85.0 (187)	2.1 (6)	31.1 (11)	3132.6	145.9	7901.6		

( ) 内の数字は骨片数を示す。※1: ウミガメ, ※2: カニ

表2 骨格別および動物別出土骨片数

動物 名	骨 名	頭				胸				前肢				後肢				骨								
		蓋	下顎骨	頸椎	胸椎	尾椎	仙椎	肋椎	椎骨	肩甲骨	鳥口骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中指骨	大脛骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足骨	趾骨				
イノシシ	46	77	55	39	71	34	14	1	197	12	42	47	30	34	2	36	21	34	40	3	51	9	37	24	21	977
	タヌク	1	2																						2	
ネズミ	7	6	3	8	4	1	2	8	11	2	15	2	3				24	37	21	4	12	20	190	1		
	コウモリ									1							1							2		
骨格骨片 出土数	195 (16.5%)																236 (20.2%)			337 (28.8%)			1172			
鳥類	1									9	11	24	48	12	32	7		213	13	11			187			
骨格骨片 出土数	1 (0.5%)																134 (7.0%)			39 (2.9%)			187			



図版 I



図版 I

---

知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

中 蒲 洞 穴

発行日 昭和60年3月

発行者 大島郡知名町教育委員会

891-92 鹿児島県大島郡知名町知名411番地

印刷所 御明るい窓社 鹿児島市上本町14-7

電話 0992-24-5050

---